
手を引く勇者と引きずられる魔王

hiko8813

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手を引く勇者と引きずられる魔王

【Nコード】

N5998W

【作者名】

h i k o 8 8 1 3

【あらすじ】

正体不明な世界で暇を持て余していた魔王（ ）と、そんなヤツにある目的で会いに行った勇者（ ）。

刺激が欲しくてたまらなかった魔王が、暇つぶしの為にと勇者のお願いを聞いてしまったせいで、色々振り回される話です。 10 / 10 一章まで完結しました。

基本的にコミカルな話にしたいのですが、物語の進行上どうしてもシリアスっぽくなる話も出てきます。そういった話が苦手な方は

ご注意ください。

0・ある魔王の愚痴（前書き）

はじめまして。小説を自分も書いてみたくてやってしまいました。もしも気に入ってもらえたなら嬉しいです。

基本的に主人公視点で書いています。一部に残酷描写と考えられる部分がある（予定の）為、ご注意ください。

0・ある魔王の愚痴

なんか面白い事が起きないかなーと思う。

面白いコトなら何でも良い。今も俺を苦しめ続けている退屈という名の暴力から全力で逃げたいのですよ俺は。何か良いアイデアがあれば是非お願いしたい。

自分で考えろって？　そこを何とか。もう自分で考え付く限りの暇つぶしを試した後なんだよ。もう飽きちゃってさ、何するにしてもやる気が出ないんだよね。

こんな事ばかり言っていると、もしかしたら俺を「つまんねーつまんねー」と口だけ動かしてるぐうたらな男だと思ったかもしれないけど違うからな。俺はそんなんじゃないぞ。

ホントだつてば！

……すまん、ちょっと取り乱した。が、しかし。

そうじゃないんだ。解かってくれ。な？　な？　飴やるからさ。今話題のすっぱい果実を贅沢に使った果汁1000%の飴。なんで100%を超えまくって1000%なのかは聞くな。俺も知らん。

え、要らない？　あ、そう。

ま、ともかく。

俺はそんなじゃないんだ。こう言っちゃなんだが行動力はあるほうだ。叶うなら今すぐに元の世界へ飛び出したい所存だぞ。じゃあ行けばいいじゃないかって？　それが出来ねーから困ってんですよ。俺は今、ものすごく。

外に飛び出せない所にいるんだ。俺は今閉じ込められているんだよ、このなーにも無い世界に。見てよコレつまんねーだろ？　見渡す限り白しろシロ。この如何にも寝るだけって感じのボロ家だけがあつて後は見ての通り。そのボロ家も見たとおりホントにベッドしかない。何故か腹は空かないしそれに伴うアレとかも起きないからお見せできないような光景になっていないのが救いといえば救いだ。

何か発見が無いかと試しに十分ほどボロ家から真っ直ぐ歩いてみたんだが、ふざけた事にたどり着いたのはこのボロ家。たった十分で世界一周は間違いなく世界記録だな。ぶっちゃぎりの。

……この状況も自分のセンスも笑えねえ。出口が無いんだ、どこにも。出口さえあれば陸から沖に100km離れた無人島からだって、世界最大の砂漠ど真ん中からだって脱出してやるのに、ホントどこ探しても出口が無かったっつーワケです。

ひでーよな？　虐待だよな？　気狂うよな？

あまりに暇すぎて実はこの家、一度ぶっ壊した。

んでまた組み立てたものだったりする。

いや、そんな目で俺を見ないでってば。や、俺だってそんなつもりは無かったんだ。たださっき言った世界一周感動のゴール地点にのほほんと突っ立ってたボロ家をみたら無性に腹が立ってさ。つい。

えへ。

あーもーそんなに引かなくなっただっていいじゃん。ほらほらこっちきて。

でもさー、こんなトコに何年も居る俺って凄くない？ よく気が狂ってないと思うよホント。

なに？ どうしてこんな事になったのかって？ 事故だとか？

あー。うん。さっき言っただけで閉じ込められたんだよねー、故意に。

そいつひでーやつなんだよ。こっちはただちよつと世界征服でもしようかなって思っただけなのにさ。……世界征服は気ままに出来ることじゃない？ うん、そう考える貴方は全く正常な感覚の持ち主だと思う。ただ、俺ん家だとフツーに話題になるんだよ。世界征服ってのが。

ん？ 俺の家族が何をやってるのかって？ んなつまんねーコト聞かないでよ。じゃあ俺をこんな所に閉じ込めた犯人の名前？ えーと、面と向かって聞いた訳じゃないんだけど、仲間らしきやつらからユーシャって呼ばれてた。変な名前だよな。あはは。

……あー。思い出したらまたムカムカしてきた。ちくしょー。いいなー。あいつらは世界を自由に歩きまわれるんだもんない。ひでーよなー。俺が何したってんだよ。そりゃ確かに世界征服しよつかなーって思ってたけどさ。思っただけなんだよ。本当だって。最近頭の中の妄想まで取り調べられんのか？ 時代って変わるよなー。

『あの……』

今思えばさ、昔はよかったよ。あんときはあれで親から憎むほどの愛情をもらってたけどまだここよかマシだったな。死ぬほど扱われたけど何にも無い此処と違って刺激があるし。本当に何回か親に殺されかけたけど。「愛情よ」なんて戯言を抜かしながら地獄の火炎を投げつけてきたお袋様とか、無言で俺の苦手なホーリーブレスを延々と浴びせかけ続けてくれた親父殿とか。あー懐かしい。絶対あれ夫婦喧嘩の八つ当たりだったと思うけど。

『あのっ……』

他にもさ、5歳の時にグレイトドラゴンの巢に放り込まれた時のこととかあったなー。あんときはもうすごかった。卵産んだばかりしくて気が立っててさー。モノスゲエ勢いだったな。見てるはずのキール……あ、これ俺付きの執事な。昔から居る奴なんだけど、こいつもちつとも助けてくれないでやんの。

『もしもしっ……すみませーん』

この空耳しつこいな。まあいいや、どこまで話したっけ……ああそうだ。

そんなこんなな愛情に囲まれていた俺はもうほんとーに嫌だった。だってこんな生活続けてたら近いうちに死ぬ。で、逃げ出したくて言っちゃったわけだ。

「世界征服してきます」

って。何でこんな事宣言したかって？ くそ親父達が煩いのなんのって四六時中口を開けは「お前は選ばれしものらしいのでちゃっ

ちやと世界くらい征服して来い」なんて言う訳よ。何なんだよそのテキトーな予言は。その頃は正直世界とかにあんま興味なかったし面倒そうだからそんな予言無視していたんだけど、段々身の危険を感じるような愛情を向けてくれるようになったちゃってさ。両親と執事の三人がかりで闇討ちとか。鬼だよー。愛が歪んでるよねー。だから世界征服に行くって言えばこの家から逃げられると、そう思ったわけ。

そこまではよかったんだけどさー。

自由に歩ける初めての異世界が嬉しくて舞い上がっていた俺は、あちこち観光に出かけた。市場とか行くとさ、見たことも無い美味しそうな物を並べている屋台とかずらっと並んでいるからもう堪えないよね。あつちこつちへ食べ歩きツアーを毎日絶賛開催したよ。そんな事しながら辿り着いたあの町でも、何か目新しい物は無いかなときよろきよろしてたらさ、いきなり大勢に囲まれたんだ。

がちゃがちゃと汗ダラダラ出そうな鎧着込んだのがざつと千人くらい。あれ？おかしいな、と思ったらあれよあれよという間に捕まっつて偉そうな髭もじゃオヤジの前まで連れてかれた。抵抗？ 勿論しないさ。だって俺何も悪いことしてないから。

通じなかった。

見事なまでに俺の言い分は無視され、俺はそのまま牢屋に閉じ込められた。

ほら、俺これでも魔王の息子だし。やっぱふつーの人から見ると怖いのかな、なんて。

あれ言わなかった？ これでも魔族の王子やってるんだ俺。よくあ

るじゃん御伽噺に出てくるアレよ。昔俺も良く読んだよ、悪い魔王を勇者がやつつけるって話。好きだったなあ。格好良いよね勇者って。聖剣エクスガリオン欲しいなあ。

……ああ、話が逸れたゴメン。捕まった後の話ね。俺これでも平和主義だからさ、断食してアピールしたわけよ、どっかの聖人みたいに。我ながらけっこう続いたなあ、3日って。

でもやっぱり何の効果も無かったし、ハラへって段々馬鹿らしくなってきたからもう止めようかなと思った時、ちよつと強そうな男率いる集団がやってきたんだよ。

そいつら俺がフレンドリーに話しかけたのにガン無視で大掛かりな魔法を唱え始めてやんの。人間にしてはけつこうな魔力だったと思う。でもま、こっちは鎖に繋がれて動けなかったしそこまで大した魔力でもなかったから殺されはしないだろうと大人しくしていたら。

何度思い出しても溜息が漏れる。

此処にご招待されたんだよ。

浅はかだったと思ってるさ。でもさー、何遍も言ってるけどちよつと酷くない？俺マジで何もしてないんだって。見た目だって人間と違うのは銀髪ってコトと、人間と比べてちよつとだけ尖った耳だけで、ほとんど変わらないしさ。それなのにさーこんなヒデー所に飛ばしやがってあいつらこそ悪い魔王とその一味だと俺は確信したね。此処から出たら、

『あのっ！！すみませんっ！！！』

「うるせえよ空耳俺の記念すべき独演会通算一万回目を邪魔すんじや」

……ん？ やけにハッキリ聞こえたな今の空耳。

「そ、空耳じゃありませんっ」

やっぱり聞こえた謎の声の方に振り向くと、そこには長い黒髪の小柄な女の子が。

誰？

「は、初めまして魔王さん。わたしは勇者のリアと申しますっ」

……誰？

0・ある魔王の愚痴（後書き）

頑張ってコメディーを目指していますが、小説って難しいです。

1・「私と一緒に旅をして欲しいのです」

どーなってんだよ。

何で今俺は良く分からん誰かとお茶しているんだろう。

「ですからね、私と一緒に旅をして欲しいのです」

顔が隠れる程のチョコレートパフェを幸せそうにつつきながら、目の前の誰かさんが頬を染めて言う。俺の注文した物はまだ来ていないので先に食べてもらっているのだが、かなり美味しそうだ。

ちなみに俺は『ジャンボデラックススーパー』という名称の、この後に何が続くんだよと思わず言いたくなる品物を注文した。金持っていないけど目の前のコレが奢ってくれるらしい。

もう一度目の前の少女をよく観察する。背の高さは俺の肩くらいで、何処となくあどけなさが残る雰囲気なので十五、六歳くらいだろうか。ちなみに俺の歳を人間に換算すると大体十七、八くらいだけれど興味ない？ よね。うん。

少女の容姿は恐らく可愛い部類に入ると思う。やや青がかった黒い瞳は綺麗に透き通っていて目もぱっちりしているし、透明な程の肌に添えられた鼻と口も理想っぽい形と配置ではなからうか。肩まで真っ直ぐに伸びる艶やかな黒（だと思っていた）髪が降り注ぐ陽光を受けて青く輝いている。髪の色は黒ではなく、濃い青らしい。

服装は少しアレンジしてあるけれど、至ってシンプルな旅人の服

ってやつだ。傍らに畳んである純白のマントといい、ぜんぜん汚れていないところを見ると恐らく卸したてだろう。妙に小奇麗でなんだか旅人らしくない。そして持ち主に全く似つかわない、傍らのゴツイ剣に目が行ったところで、

「あの、聞いてます?」

「実はあんまり聞いていなかった」

「……えつと、どこまで覚えてます?」

「お前が何処かに旅立ちたいとか何とか」

「殆ど全部聞いていないじゃないですかっ!　　というかその内容も間違ってますっ!」

俺の気が抜けた返答にむー、と唇を尖らせるよく知らない人。チヨコついてるぞ。

「ちゃんと聞いてくださいっ。私は魔王である貴方に」

「なあ、さっきから引つかかってたんだけどさ」

形のいい眉が動く。

「何ですか?」

「とりあえず一つ目。俺確かに魔族だけどさ、魔王じゃないんだ。魔王はおれの親父でまだピンピンしてるはずだが」

「あなたのお父様というのはあのジェノサイ王ですね」

仮にも勇者が魔王を捕まえてお父様は無いと思う。

「……そうだけど」

「残念ながらすでに亡くなれています。もう100年も昔の事ですので私が直接見た訳ではないのですが」

脳の回転は速いほうだと思っていたがそれはどうやら悲しい思い込みのようだ。今言われた事がちっとも理解できない。

「すまん。もう一度言ってくれないか。どうも今まで変な所に居たせいで耳と脳がとろけてるらしいんだ」

「ですから、100年前に先代の魔王ジェノサイさんは亡くなっているんです。という訳で、息子である貴方が魔王さんってコトになるんです」

はあ、そうですか。そう言ってもう一度相手を見る。

嘘をついているようには見えない。やるな、なかなかのポーカーフェイスだ。だが勇者が善良な市民を騙すのは良くないな。

ちっとも信じようとしない俺に向かって不思議そうに首を傾げる目の前のこやつにもちゃんと解る様に、丁寧に説明してやることにする。

「だって俺ちよっと前に親父に会ってるし。100年前に死んでたら話が全然合わないだろ」

「最後にお父様に会われたのって、新王期の何年くらいですか」

「えーと、確か1002年くらいかな。そのあとすぐにこっちの世界に来て、大体半年位はこの世界を見て回っていたと思う」

と説明したのに、どうやらちつとも得心がいていないご様子。
仕方ないので壁の方を指差す。

「だって今は新王期1005年だろ？ そのカレンダーにも“05”と書いてある」

つまり約3年もあの忌まわしい空間に囚われていたのか。良く気が狂わなかったな俺。

ま、それは置いておいて、どーだ参ったかニヤリと悪者ぶった笑みを浮かべてみる。どうよ、嘘は止めてほんとの事をゲロしちゃいなよ。ね？ どうしてそこで悲しそうな目をするの？

「あの……今は新王期2005年です。本当です、信じてください」
「にせん、ごねん？」

「2005年です」

「せんごねんじゃなくて？」

「2005年です」

「はっはっは。まさか。いくらなんでも1000年は無いつしょ」

確かに俺はあのフザケた真っ白な世界に長いこと閉じ込められていた。でも自分の感覚ではせいぜい数年。おまけしたって10年も居なかつたはずだ。時を忘れるほど愉しい世界では断じてなかつたぞちつくしょう。

現実を認めない俺に対して勇者様は「あ」と呟いてから何やら俺に差し出した。

月間誌” 極上スイーツ” の5月号だった。

ほう、確かにこれはうまそうだな。む、目の前のパフェもこれに載ってるぞ。有名な店なのか此処。そうだ、さっき頼んだのにちつともこない『ジャンボデラックススーパー』も載ってないかな。どんなシロモノだあれ。

「違います。年のところを見てくださいよ」

……わかってるさ。イマイチ勇気が出なかったけど、すよははは、と白い歯を見せながら

確認したそれは何度見ても2005年5月号だった。

「まああああああじでええええええ！！？！？？」

ちやぶ台返しをしようとして出来ないことに気付く。勇者様に思いつき水とかブチマケちまうし。嗚呼、この感動を思いつき表現したいのに。

「あの、魔王さん……」

はっ。

我を取り戻した俺は周りからの視線に気まずい思いをしながら着席した。いい加減真面目に今の状況を考えよう。

長いこと閉じ込められていると思っていたが、まさか1000年も閉じ込められていたとは思わなかった。そんなに長いこと一人遊びを続けていられるなんてある意味ショックだ。俺はひょっとして一人で遊ぶことがものすごく楽しかったのかもしれない。

「あの、大丈夫ですか？ そんなにがつくり下を向いて……気分が悪いようでしたらこの剣を翳せば」

「何やって……ぐはア!？」

むしろ病んでいるのは心の方だったが、勇者が剣を掲げた直後から本当に気分が悪くなったので慌てて止めさせる。

「?」

ヤバイ。それヤバイよ聖剣の類だ。何て名前の剣かは知らないけど、さっきから感じている軽い頭痛はコイツのせいなのか。

「??」

「いや、可愛く小首を傾げてもらっても駄目だ」

「治りませんか？」

「むしろ悪化した。よく考えてみろって。魔族に聖剣向けるのって死刑宣告だ」

わたしは平気なんだけどな、と不思議そうに剣と俺を見る。

「それはお前が勇者だから……ってそうだ気になる事その2。いいか？」

「あ、はいどうぞ」

ようやく収めてくれた天敵にほっとしつつ水を飲む。ついかまだかよご注文の品は。

「あー、なんだ。さっきから当たり前のように話しているが」

「はい」

「キミってゆーしゃ？」

「はい」

いやいやいやいや。だつてさ俺が見たゆーしゃってやつは男というかオッサンだし、パーティの中には確かに一人は女いたけど魔法使いっぽかった。そもそも女の子って勇者になれるの？ 御伽噺にそのパターンは無かったな。

「ほんとうですってば。……まだまだ未熟者ですけど」

おもむろに服に手をかけ始める女の子。おいおい待ってください

よ俺だつて心の準備つてモノが。

「なんだか目つきが怖いです……」

「気にするな。んで、なにしてるんだ」

「……んしょつと。ほら、ここに聖痕があるです。ね？ これ勇者の証なんですよ」

突如衣服を脱ぎ始めたときはどうしようかと思つたが、どうやら見せたかったのは体にあるアザの様なものらしい。胸と右肩の間のちよつと際どいところにそれはあつた。

「おー、確かに見たことあるぞそれ、親父に魔王としての帝王学とかなんとかいうのを叩き込まれた時に見た記憶が。」

「ね？ これで信じてもらえました？」

赤くなつた頬で言われるとこつちまで恥ずかしいやんか。はよ服着なさい。

こほん。

目の前のこの子が勇者だつてのはまあ認めるとしよう。親父が死にまつた事は確認しようが無いけどまあ話を合わせてみても良いだろう。しかし、そうなると気になる事その3が当然出てくる。

「俺は魔王らしい」

「はい」

「キミは勇者だと」

「そのとおりです」

「いっちゃん初めにキミ何ていったか覚えてるか？」

「『私と一緒に旅をして欲しいのです』ですけれど」

正解。一字一句完璧だ。

……これはあれか、1000年後の世界で流行しているジョークなのか。

「？」

小首を傾げて説明を要求する不思議ちゃんはどうやら大真面目に言っているらしい。

「あんな、どこの世界に勇者と魔王と一緒に旅する世界があるよ？
何これドッキリ？ 何かの企画なの？」

「え、ドッキリって何ですか？」

なんでもない。なんでもないからもう一度よく考えておくれ。

こめかみを押さえながら一つの考えに辿り着く。

あーあれだ、この娘魔王が世界征服という悪行をする存在だつてコト解かってない気がする。よく考えると親父は100年前に逝っちゃったらしくこいつは魔王というものを見た事が無い筈だ。どんな教育されたか知らないがその可能性はあるかもしれない。

ここは現実を突きつけてやろう。

勇者の使命は世界平和であり、魔王の目的は世界征服だ。一緒に居られるワケがない。大方こののほほんは魔王の目的を慈善事業とでも勘違いしているんだろう。現実を知ってショックを受けるかも知れないが、ここはハッキリ言っておくべきだな。

コップに残った半分ほどの水を一気に飲む。うし、作戦はこうだ。

勇者の使命は？	世界平和	魔王の目的は？	おおか
た慈善事業とでも思っている	すかさず突っ込む	お勉強	
タイム	じゃあ私達敵だったのね	ふはははは	完璧。

一つ問題があるとすればツッコミをどのように遂行するかだがそこは己の感性に委ねよう。ぶっつけてGOだ。

「あなたのお仕事はなんですか？」

もしかしたらと言葉を租借しまくってから吐く。

「立派な勇者になることです」

ニッコニコしてるよ。いいね、そういうの好きだよ俺。ってそうじゃなくて、

「では、その立派な勇者のお仕事はなんですか？」

「世界を平和にすることです」

はいよくできました。では問題です！ ジャジャン！

勇者の仕事とは世界を平和にすること、で・す・が。魔王の仕事とは一体何！？ さあ答えを張り切ってどうぞ！

「世界征服です」

「知ってんのかよお前！ なんだよそれ！」

俺馬鹿みたいじゃねえかよ。

二度目の絶叫に周りの目が再び集中する。ああいかんいかん周りの人に迷惑かけちゃ駄目だつてよく言うよねゴメンナサイ。

「常識ですよね」

両手を軽く挙げて喜ぶヤツの目の前で頭を抱えて蹲る俺。

困った。知ってる上で俺と一緒に旅する企画を持ち込んで来やがりますか。目の前の生物はひょっとしてあんぼんたんなのかもしれない。そういうのはちよつと。

「失礼なこと言わないでくださいよっ」

「人の心を読むんじゃないっ」

ああもつ。ここまで言わなきゃ解かんないかなあ。

「魔王が生きてたら世界征服されちゃうんだぞ？ そうなったら平和なものにも無いだろ？ ほら、これだと勇者が困っちゃう。戦って倒さないと平和はやって来ないぜ？ 俺達は言わばコインの表と裏みたいなもんだよ、絶対相容れない存在なんだ。そんなのが一緒にいるなんてまずいと思わない？」

「思いませんっ」

なんでだよっ。

あーもーワケわかんなくなってきた。なんかここまで自信満々に言われると俺が間違ってるような気がしてきて困る。

「わたしの事、嫌いですか？」

勇者を好きになる魔王が居ると思ってるこやつはひょっとして大物なのか。

いや、嫌いってワケじゃないけどさ。あーもーそんな顔するなよ。ね、頼むから涙目にならないでよ俺思いつきり悪者じゃんか。魔王だけど。

「ぐすっ……はい、やっぱり魔王さんって優しいです」

どこをどう取ればそういう考えになるのでしょうか。それにしてもこの勇者魔王に対して敵対心つてもものが皆無だよ。なんだか調子が狂う。

いかん、気を取り直そう。この問題は当面置いておいて質問その4へGOだ。

「ところでそれ、なんて剣？ 見た所魔法が掛かっているみたいなんだけど」

さつきからプレッシャーを掛けてくる剣を睨む。すると余計に頭痛が酷くなった。

聖剣の類だろうとは思ったけど、よく考えたらこんな世間知らず勇者が持つてる剣だ。旅の序盤で手に入れたチャチなシロモノだろう。けど、妙にプレッシャーがあるんだよなその剣。

「エクちゃんですか？」

なんだその可愛らしいようでそうでない微妙な名前は。

「エクスガリオンのエクちゃん。以前洞窟で見つけたんです」

未だに來ない注文のせいで飲み飽きつつある氷水のシャワー攻撃！

「ひゃあっ！ 魔王さんひどいですっ」

思い切り顔が水浸しになった勇者の非難も耳に入らない程ビクビクした。

「ものすごいもの見つけてんじゃないかよ！ 何もう旅終盤なの実は俺ここで終了!？」

「え。エクちゃんをご存知なんですか？ 凄いですかこの子」

「お前知らんのか!？」

もうどこからツツコンでいいのか解らなくなってもこれだけは言わねばなるまい。

「あのな、エクスガリオンといえばかの有名な勇者アレキザイドが持っていたとされる最上級の剣で、勇者は魔王を打ち倒す為にこの剣を求めつつレベル上げするのが王道パターンなんだよ。それがなんだよもう見つけちゃってるじゃんかお前」

どうりで嫌な汗が出るワケだ。

「……でも私は、そんなすごい剣を持っていたって何も出来ませんでしたから」

「な、なんだよ。急にしょげて」

突然の落ち込みっぷりに驚く。ちよつと強く言い過ぎたか？ と思ったがどうやらそうではなかったようだ。

「世界を平和にする為に、色々なところへ旅に出ました。魔物も一杯倒しました。王様からも沢山感謝されてご褒美もたくさん貰いました。けれど、それだけじゃ世界は平和になりませんでした」

どういう事だろう。魔王である俺はずっと居なかったわけだし、

その剣があれば雑魚魔物くらいすぐに一掃できそうなんだけど。てゆーか話脱線しまくりだなおい。

「魔物さんが原因じゃないんです。確かにその、魔王さんには申し訳ないんですけど沢山魔物さんを倒したおかげで、魔物さんから被害を受けるということは無くなりました」

それで良いんじゃないでしょうか。あと魔王に謝る勇者って見たこと無いんですけれど、ツツコミするだけ無駄みたいだからもう良いや。

「でも、魔物の問題が収まったと思ったら、次は人間同士で争いを始めてしまったんです」

詳しくは言わなかったが、なんでも生まれ育った国が滅んでしまったらしい。結構あっさりと話しているけれど、かなりキツイ話だ。

「……。」

詳しい事情は分からないが、酷い事をする人間も居たもんだ。ひよっとして俺を閉じ込めやがったやつ末裔かそいつ。

「そ、それはわかりませんが、とにかく皆が言っていた魔王さんを倒せば世界は平和になるっていうのは間違いの様な気がしたんです」

なるほどね。そう考えるのは何となく解かる気がする。

でも、だからといって俺がお前と一緒に旅立つという流れには結びつかない気がするんですけれど。魔王は居ないに越したことはな

いと思うなボク。質問3の答えが解からない。

「どうして俺を助けた？ いや助けてくれたこと自体はものすごく感謝してるんだけどさ」

俺を助けてどうしようって言うのアナタ。目的は？ ただ旅を一緒にすれば良いのかよ。お前はこの世に平和を築きたいんだろ？俺助けたら災い呼ぶとは思わなかったのか。魔王だし。

「一緒に世界征服しちゃいませんか？」

ほどばしるシャワー攻撃再び。

「ふえええ……」

すまん。いやしかしこの無邪気さに騙されてはいけませんこの娘言いやがりました。

「おつ、おまつ。ちょっとそこ座りなさい！」

「さっきから座っていますけど……」

うるっさい！ そんな細かい話なんてどうでも良いんだよ！

「お前さ、自分がなに言ってるのか解かってる？ お前勇者様よ？」

「でもっ！ わたし、世界を平和にしたいんです！」

「いやさ、だからお前が世界征服したら」

あれ？ 勇者だから良いのかひょっとして。
ん？ でも世界征服に良いも悪いもあつたっけ。

「私達がこの世を平定した暁には絶対に世の中を平和にして見せます！」

こんな所で所信表明されても。

「そしてその為には是非とも世界征服の先輩である貴方にご指導して頂きたいと思ひまして」

「本気で言ってるのか？」

「おお真面目ですつ。道中征服の手解きお願いしますつ」

「どうしても？」

「どーしてもですつ！」

じー。

じー。

じー。

全くブレない瞳で見つめてくる。傍から見たらきつと奇妙な光景がどのくらい続いたか解らないが、先に折れたのは俺の方だった。

「わかった。わかったから」

そんなに顔近づけるなって。

「やった！ 有り難うございますっ！」

良いのだろうか。ほんとに。

「私頑張りますね！」

平和な街の一角で世界征服を宣言する勇者。気分が高揚しているのか、ほんのりと上気した肌に染み一つ無い事まで良く見える程に、顔がすごく近い。

「分かったから落ち着いてくれよ」

「……あ、ごつ御免なさ」

真っ赤な顔でぺこぺこしてテーブルに頭ぶつけた。ああほら泣かない泣かない。ね、飴やるからさ、果汁1000%で体にめっちゃ良いらしいぞこれ。

「おいひいです」

そりゃよかった。

ところで俺の『ジャンボデラックススーパー』まだ？

2・「もう勘弁してください、ホントに」(前書き)

前話にくらべて随分短くなってしまいました。

各話なるべく同じくらいの分量にしたいのですが、難しいですね。
努力したいと思います。

2・「もう勘弁してください、ホントに」

店を出たご機嫌な勇者と退治された魔王が並んで歩く。

「凄かったですねーじゃんぼでらつくすーぱー」

その言葉に反応してまた腹が嫌な感じに悲鳴を上げた。

俺はいま勇者の策略にまんまと乗られて大ピンチです。

「わたしお財布忘れちゃった」との衝撃のカミングアウトをしてくれた勇者。呆然とした俺の目に飛び込んできた食事代がタダになるとの張り紙。その条件が目の前の山を制覇することだった。

だってさ、勇者と魔王が二人で食い逃げなんてカッコ悪すぎるだろう？

「また食べましようねあれ」

「二度と食うか！」

巨人族専用って書いとけ。

椅子に座る俺の頭より高いアイスの山だぞ？ あんなもの誰が食うってんだよ。

「わたしまだまだいけますよ？」

半分以上食いやがった異次元胃袋の持ち主が余裕の笑みを浮かべ

ている。

甘いものは別腹と言い切ったコイツの胃袋はあの白い世界に通じていたに違いない。だって明らかに胃袋の体積と食べた量に矛盾がある。それくらいの量を平気で食べやがったのだ。

そしてまた悲鳴を上げる俺の体。

ぐっ、これ以上この話題を引っ張るのは精神的にも拙い。強引だが話を変えよう。運良く休めそうな広場を見つけ、俺はふらふらになりながらベンチを目指した。

* * *

「ああ、いい天気ですねー」

「そうだなー」

「こんな陽気だと甘いものが食べたくなくなってますか？」

「もう勘弁してください、ホントに」

賑やかな街の中心から少し離れた公園で、ベンチに座って語らう勇者と魔王。

俺は未だに半信半疑だった。実はこうやってのほほんと駄弁っている事こそが俺を陥れる罠だったりしないかと。今斬りかかられたら確実にやられる自信あるもんな。そもそも勇者がこんな小娘って

のが怪しい。裏で操ってる『真の勇者』とか出てこねーだろうな。

「わ、わたし本物ですってば」

「心を読むなっ」

まったく。あれか、何か読心魔法でも使ってるのか。今からでも「やっぱ一緒に行くの止める。えへ」とか誤魔化して逃げようかな。

「そんな。ひどいです」

「だから心を読むなっての！」

「うう、ごめんなさい。こんな事他の人とは一切無かったんですけど、なぜか魔王さんの考えている事って解っちゃう気がするんですよね」

何となくにしては嫌過ぎるほど正確なんですけど。

「きっと私と魔王さんが出会っるのは運命だったと思うんです」

ああそうだろうさ、でも間違ってもこんな形ではない気がする。

何故そこで顔を赤らめて嬉しそうにしてるんですか貴女は。

それにしても、と街を見渡す。輝く緑が眩しい公園では子供から老人までがその光を浴びて皆一様に笑顔だ。なんというか、絵に描いたような平和な風景だ。

「なあ。こつやって見る限りすつげえ平和っぽいんですけどこの世界。」

爺ちゃんと孫が白い鳩に餌やってるよ。

「そうですね」

とても優しい顔で、相槌を打つ。誰かが嬉しそうにしている姿を見ることこそが、こいつは嬉しいのかもしれない。まだ殆ど何も知らない相手だが、そんな気がした。

「確かにこの街は平和です。でも遠くの国では今でも人が死ぬ争いが繰り返されているんです」

命を奪い合うなんてとても悲しいことだから、どうしてもそんな悲劇をなくしたいんです。そう呟く顔は確かに勇者っぽかった。ちよつと感心する。

「なあ勇者。お前さ、」

「リアです」

ん？

「最初にすること決めました。私のことリアって呼んで下さい」

「いや、話に繋がりが全く無いですね。何でそんな怒っているんだお前」

「私にはリアっていう名前があるからです。私も魔王さんのこと
名前で呼びますからっ」

「……まあ、いいけど。俺の名前は」

はっ。

「呪いか？ 呪いでも使う気なんだろ。名前書くだけで相手を殺せる
魔導書とか」

サクッ

「さく？ ってぎゃあああああっ！！！」

流れるような動きで伸びてきた聖剣が額に浅く刺さった。

「酷いですっ。わたしそんなことしませんっ」

「酷いのはお前だばかちん勇者！ どこの世界に魔王刺す勇者が」

いるな。勇者なら皆やってるっばい。

なんだ、そうか。そういえば当たり前だよな。……ああなんか白
い世界が見えてきた。

「っ大変っ！ どうして額から血を流して！？ 今治しますから！」

何でお前がビックリしてんだよ！ というかお前のその台詞が白
々しいのは気のせいだよな？

「いでつ、いででででで！ やめろ、やめてくださいっ。魔族に聖なる波動は駄目だから止めて！」

「あ、元気になりましたね。よかった」

目の前の笑顔が何故か怖い。……お前、やっぱり怒っているのか。

「さあ、教えてください。貴方のお名前は、何とおっしゃるのですか？」

考えてみれば、自分だけ名乗らないのも失礼な話だよな。何となく会話の流れが怒涛過ぎてタイミングを失っただけだし、言わない理由なんて無いんだけど、……何故か改めて聞かれると緊張するのは何故だろう。自分の事ながら解らない。

「ダメ、ですか？」

俺が黙ったのを拒否と捉えたリアの顔がしょんぼりと曇る。さっきから思っていたけどその顔は反則だと思う。

「レオンだ。よろしくな、リア」

「はい！ 改めて宜しくお願いしますレオンさん」

ぱあっと晴れる表情は、まるで頭上に広がる気まぐれな空みたいだ。

これからどうなるかなんて全く予想がつかない。でも一応、俺がここの世界にやってきた建前は『世界征服』だから渡りに船と言えなくもないし。どうせ他にやることも無いんだ。暫く付き合ってみ

るもの悪くない……よな？

「ではっ、張り切って世界征服やってみましょー、おー！」

「お、おお……」

このノリはどうかと思っけど。

2・「もう勘弁してください、ホントに」(後書き)

読んでいただいております。

どこまで続けられるかわかりませんが、少しずつでも書いていきたいと思います。

3・「そうになったら悪いのは俺か？　俺なのか？」

「早速ですけど、具体的にはどうしたらいいんでしょうか？　世界征服って」

「そりゃあ、世界征服って事はこの世の全てのボスになるってことだろ？　だから、」

輝く瞳が俺を見つめる。実は頭の片隅で世界征服なんてただの冗談かもしれない、と思っていたのだが……そんなことは無いらしい。すぐく期待されていた。

今更ながら、困ったかもしれない。

親父から習った方法って主に”軍事力で片っ端から制圧”になるんですけど。

にこにこしている勇者様の顔を見ながら思案する。

そんな事を正直に言ったらこのヒトに成敗されないでしょうか。争いが嫌いなヤツに対して問題を武力で解決するなんて手法を進言したら逆鱗に触れかねない。

いや、何故か俺に対して妙に素直な態度をとるコヤツならば、俺が言えば本当に武力で世界を制圧してしまうのかもしれない。本人はこんなばやばした雰囲気だが、手にしている聖剣は間違いなく本物。その威力は十分世界制圧可能なレベルのはずだ。

「世界を平和にするのですっ」とか言いながら聖剣振るって世界制覇。そして何時しか魔王と呼ばれるリア。そんな未来が想像できてしまう。

にこにこしているリアの顔がちよっとだけ傾く。急に黙った俺を見て不思議がっているらしい。

「突然頭抱えちゃってどうしたんですかレオンさん」

「そうなたったら悪いのは俺か？　俺なのか？」

勇者にそんなことさせちゃって良いのかと今更ながら悩む俺。ここでリアを更生させる事こそ世の為なのかもしれん。どうしよう……ええい、悩んでも仕方が無い。正直に言っぞ。

言った。

ビュオッ

「ばっ、危ねえなっ！　ノーモーションで突き刺してくるんじゃない！　暴力反対！」

すんでの所で空を切る奇襲。死の香りがしたぞマジで。

「え、エクちゃん？　突然どうしたの……わわっ」

……………何をやってるのですかこの勇者。

「んっ、この子普段はとってもいい子なのに、急に暴れだして……エクちゃんいい加減にしなさいってば」

どうやらリアは俺を成敗しようとした訳ではなく、突如暴れだした剣を必死に宥めようとしているらしい。だがちっとも成果が上がっていない。がくがくと揺れながらもその切っ先は俺に向いていた。

「ああもう、エクちゃん。レオンさんに斬りかからないで」

その聖剣は職務を全うしようとしているだけだと思う。……それにしても流石は伝説の聖剣、勝手に動くのか。しかし猛犬エク公も主に繋がれては手出し出来まいてかったか。

ピカッ

「おわあっ！！！！　こらこらこら何か飛んできたぞ！」

とっさに砲撃（？）を上空へと軌道を逸らす。うわ、かなりのパワーだ流石は伝説の剣。

「ご、ご免なさいっ、エクちゃんっ、街中で奥義出さないでっ」

「どうなってるんだよその剣」

「何故かものすごく興奮してますっ」

「何とかしろよ。お前持ち主だろ、どうすりゃ治まるんだよ」

「一度切らせてあげると落ち着くと思うんですけど」

死んじまうよ！　その願い聞いたら間違いなくあの世行きだよ！　やっぱりお前怒っているだろ！

「このばかちん勇者他に無いのか手は！　　ってうわ危なっ」

俺の銀髪がはらりと散る。どう鼻屑目に見ても食らったらアウトだぞこれ。

「ッそうだ、お前手を剣から離せ。そうすりゃ止まるんじゃないのか」

持ち主からの魔力供給が無くなれば大人しくなるかもしれない。

「確かにそうかも知れないですけど、うう、離れないんですっ、一回こうなっちゃうと」

呪いの剣かよそれ。……仕方が無い、少々手荒にでも放させてやる。

* * *

聖剣は持ち主の体勢などお構いなしに無秩序な機動で暴れまわっている。持ち手と一体でない分動きの鋭さはさほどではないが、全く意味不明の機動を描く為動きが読めない。

とにかく、避けてばかりでは埒が明かない。道具に振り回されている未熟者に向かって手ごろな木の枝を投げてみた。

「おお、さすが」

一瞬で木屑どころか跡形も無く切り刻みやがった。あれと戦うのか。

おもしろい。

「大人しくしているよ、リア」

頷くのを確認して、踏み込む。影を残す勢いで突っ込んだ。

互いが衝突する金属音。

剣を握む手を叩いて落とそうとしたのだが、見事に阻止されてしまふ。俺に手持ちの武器などは無く、腕を持ち前の魔力で出来るだけ硬化して何とか受け止めているに過ぎない。が、その腕が早々に悲鳴をあげだした。流石は伝説の呪いの剣だけあって退魔の力が凄まじく、あまり長くは持ちそうにない。

持ち手が攻撃の意思を持った時の威力を考えると空恐ろしいが、逆を言えば今のコイツに本来の威力は無い筈だ。ただ金属の塊が暴れているだけの物に負ける訳にはいかない。

「このっ。負けるかつ、折角この世界に復帰できたんだ」

俺はまだ何もやっていないんだ。復帰してからやった事といえば、まだ変な勇者と話した事と、馬鹿みたいに大きなアイスを食べた事だけ。こんな状態で死んだら情けなくて涙が出てくるのでぐっと力を込めて押し返すが、相手も負けじと押し返してきた。

「危なっ！」

唐突に聖剣から不吉な光が溢れた瞬間、強引に腕を振り払って切っ先を変えた。直後に背後の岩が爆発に巻き込まれて、粉々になった威力にちよつと寒気がする。闇雲に正面から剣を叩き落そうにも阻止されてしまうし、うかうかしてたら俺もあの岩みたいにならない。さて、どうしよう。

「おーい、リア」

「はいっ、どうしました？」

「当たりそうになったら避けるよ」

はい？ と目を丸くした勇者を尻目にさっきバラバラになった岩の破片を幾つか拾う。思い切り振りかぶった俺はそのまま石を投げつけた。

「きゃっ！ レ、レオンさん！？」

身を竦ませたリアとは違い、剣が正確な動きで破片を打ち落とすていく。それを確認した俺はやや大きめの塊を手にした。リアの顔が少しだけ引きつる。

「あ、あの、ひよつとして」

「頑張れ」

異論は受け付けない。そもそも持ち主がちゃんと猛犬を繋いでおかないからこんな目に遭うんだ。リアの訴える目を無視して、先程と同じように岩を投げつける。しかしその後がちよつとだけ違う。リアの目の前に迫った岩が、迎撃される前に五つほどに割れた。

リアの四肢と頭を狙うように綺麗に分かれた岩だが、当然聖剣も黙っていない。僅かな速度の差を見切って両足、両手を狙う岩を打ち落とし、最後に頭を襲う岩を打ち落とした。

「ったく、手間掛けさせやがって」

カシャン。

聖剣が地面に落ちた。……動かないな、よし。これで剣が勝手に動いたらどうしようかと思った。

「大丈夫か？」

「あ……え、どうなっただんですか、今」

「岩に気を取られている隙を狙っただよ」

剣がどう動くか予め解ってさえいれば隙を狙う事も簡単だ。聖剣がリアの頭を守るように動くことが解っていたので、そこを狙って叩き落としてやったのだ。

ぱたり、と地面にへたり込むリア。

「どうした？ 俯いて。ひょっとして腕、痛かったか？」

それともまさかホントに俺を撃破する算段が崩れてがっかりしてるとか。

「よかった、ほんとに良かったですっ」

「おいおい、どうしてお前が泣きそうになってるんだよ」

悔し涙か？

「嬉しいんですっ」

もう、と膨れた頬がすぐに笑顔に変わった。

* * *

「それで、あの、先ほどレオンさんが言いかけた征服のやり方についてなんですけれど、」

「あ、ああ、アレな」

今の乱闘騒ぎに乗じて有耶無耶にしてしまおうと思っていたのに、やっぱり覚えていやがった。こうなったら仕方が無い、適当な事を言って誤魔化そう。でないともたあの剣が暴れだして俺の命が危ない気がする。

「あー、実は、この世界には人間を裏から支配する悪いヤツがいるんだ。そいつのせいで今この世の中に争いが絶えない。そいつを探し出し、やっつけちまえば良いんだ。そうすれば世界はお前の思うままになる……気がする」

どうしよう、我ながらあまりにいい加減すぎる。こんな出鱈目いくらなんでも流石に信じないだろうし、他にそれっぽい出鱈目を考

えないと……と焦っていたのだが、どうやら俺の与太話を信じちゃったらしい。

これからの旅の行方が非常に心配になってきた。

* * *

「それにしても、先程は本当にごめんなさい。二度とあんな失礼なことしないように、エクちゃんにはきつく言っておきますから」

俺がこれからの旅の行方を憂っている最中、リアはどこかへ唐突に消えたかと思っただけすぐに座布団抱えて戻ってきた。

何ゆえ座布団？

と突っ込む間も無く座布団の一つを置いてその上にエク公を立てた。

ほんとに立ちやがった。バランス思いつきり無視して立ってるよこいつ。呆れている間にリアが同じように座布団を敷いて正座する。

「レオンさんもうござ」

何か抗い辛い雰囲気なのでおとなしく言う事を聞くことにする。何が始まるんだと頭の中をクエスチョンマークで埋め尽くした俺の目の前で、リアは気にせずに進行する。

「……というわけで、ね、エクちゃん。この人は魔王だけど私の大

切な師匠なの」

いつの間に師匠認定されてたんだ。というか剣に話しかけてるよコイツ。

「もう、茶茶を入れないでくださいっ」

怒られた。でも剣に言い聞かせるって、俺は軽く封印するとかそういうのを想像してたんだけど。

『しかし……』

そう、しかしいくらなんでも本当にこうやってお話するなんざお前は三歳児か。

ところで、

「誰だ今『しかし……』って言ったやつ」

無視された。

「もう、エクちゃん頭固いよ。この魔王さんは一緒に世界を平和にする手伝いをしてくれるんだから」

剣だもんな、ガツチガチだろ。

『魔王と行動を共にするなど、私には到底理解が出来かねます』

そうそう、良いこと言うね。初めてまともなヤツと口利いた気がする。

「だからさ、誰の？ 今の声」

「エクちゃんの声です」

黙考すること暫し……ああそうか腹話術か、お前上手いな。あ、
そうだあれ出来る？ 時間差のやつ。

『こんなふざけた男と馴れ合うなど、できません』

まさかの罵倒にちよつとショック。でもホント上手い。全くリア
の唇動いてないぞ。

「だから違いますってば」

む、強情だな。隠さなくったっていいじゃん。それならそれで考
えがあるぞ。

リアの背後に回る。不思議そうに背中越しに見上げてくるリアに、
後ろから抱きついた。

「……」『……！……！』

そのままリアの口を手で覆ってやる。もちろんそつとだけど、こ
れで腹話術はできんだろはっはっは。

『貴様ッ！ わが主に手を出すとは許せん！ その穢れた手を離せ
ッ！……！』

「……おいリア」

「むーむー」

悪かった。思わず力が籠っていたらしい。

「ぶはっ、ど、どうしたんですかいきなり。いやべつに嫌だったという訳じゃなくって、でもいきなりでちょっとびっくりしたというかあのその」

「喋るの？ あれ。」

主人を人質にされたと思っているのか座布団のうえでピョンピョン跳ねて怒りを顕にする聖剣エクスガリオン。

「ああ、はい。エクちゃんとは時々こうやってお話しながらお茶を飲んだりします」

飲むんだ。そうなんだ。

怒り狂うエク公に向かい降参の意をもって、俺は両手を上げた。

再び話し合いが始まって、ようやくエク公の方が折れた。

リアが、言うこと聞かないならここにエクを放置すると宣言したからだ。ものすごい問題発言だった気がするが俺も自分の身は可愛い。黙っておこう。

『ふん。我が主に変なことをしたら、たたっ斬ってやるからな』

そんな素敵な捨て台詞を残して、ようやく大人しくなったのだっ
た。

ふん、俺に負けたからってそんな意地になるなよ。

ズオッ

「つつぶねえな!!　なにしゃがるエク公!」

『貴様っ!　我を愚弄するとは許せんそこになおれっ!』

「うつせえ!　てめえまで心読むんじゃねえ!」

「もうっ、エクちゃんてば!」

このパーティの行方がさらに心配になってきたんですけど。本当
に。

4・「レオンさんって方向音痴なんですか？」（前書き）

こんにちは。こんな拙作を読んでくださった方、ありがとうございます。

今回から場面がちょっと変わります。

4・「レオンさんって方向音痴なんですか？」

俺達は今、パレット・ハイロードという街道をのんびり歩いている。

さっきまで滞在していた如何にも平和な街はパレットという名らしい。あの街に長居しても何をやれば良いのか見えてこなかった俺達は、とりあえず別の場所に行くことにしたのだ。ここパレット・ハイロードを道なりに進むとハイグレイ王国っていう大きな国に通じるらしいので、今はそこを目指している。

外に出て思っただが、流石に1000年も俗世から離れていると、地理が全く知らないものになって困る。が、意外なことに違いはそれくらいで、今のところ文明は1000年前に比べさほど発達していないように思えるのだが……実際のところはどうか。馬を引いて畑を耕す農夫の姿を見る限り、俺には違いが分からない。

ただ一つ気になるといえば、時折見かけないモノを手にしている人がいる。アレは何だろう。

「ああ、あれは方角を知ることが出来る”コンパス”です。」

物珍しそうな俺の視線に気付いたのか、横から解説してくれた。でもコンパスって昔から有った気がするけれど、あんなに大きくなかったぞ？

「コンパスと言ってもただ方角がわかるだけではありません。地図

を投影することが出来ますし、あのコンパスを持つもの同士、お互いの位置がすぐに解かるという優れたものなんです。」

へー。でもさっきから何人かが持ち歩いているけど、あいつらの位置情報がみんな判るのだろうか。

「それって困らないか？ 知られたくないやつにまで、今の場所を知られるんじゃない？」

「その心配はないです。各コンパスは固有の番号を持っていて、番号を互いに登録した相手にのみ居場所がわかる様になっているんです。」

なるほど。このコンパスは最近になって発明されたマジックアイテムらしい。使用者が魔術を使えなくても相手の位置が判るなんて便利なモノが出来たもんだが、流石にそこそこ高価らしく使っているのは行商人や冒険者が多いのだとか。あまり普及はしていないのな。

「お前も持つてるのか？」

「はい、私の必需品ですから。」と得意そうに見せてくれた。大きさはリアの小さな手に少し余るくらいで、まんじゅうみたいな丸い形をしたコンパスの中心には何やら地図が表示されている。

「中心の三角が俺達？」

「その通りです。このコンパスの最も優れているところはナビゲーション機能なんです。これさえあれば、赤ちゃんだって目的地に辿り着けるんですよ。」

すごいでしょ、と何故か胸を張る勇者さま。へー。ああこの灰色が山なのか。こっちの青色が川で、緑が平原。その中心を通る線がこの街道という具合に見るんだな。成る程コレなら迷いようがない。

俺が全くこの世界を知らない手前、自然と先導を勇者に任せる事になっているのだが正直に言って不安だった。この勇者は恐らく平気な顔して道に迷うタイプに違いない。でもいくらなんでもコレ持つてりや大丈夫だよな。

ところでさっきからキョロキョロしてるけど、どうした？

「……すみません、ここ、どこですか？」

「ふざけんなお前！」

ボケか？　ボケたんだろお前。ちつとも笑えないけどな！　さつき赤ちゃんだつて大丈夫だと言ってから数秒しか経ってねえぞ。そもそもなんで一本道で迷えるんだよ、ナビいらねえじゃんか。

さっきまで絶好調で明るい場所を行進していたのに、気付いてみれば森の中。

いや、何で道を逸れたのかなー、とは思っていたけどさ。

「困りました。おかしいですね、どうしてこんなところに来てしまったのでしょうか」

失敗の原因を真剣に考えてやがる。

「とにかく、来た道を戻ろう。さっきの街道に戻ればいいだけなんだろう？」

そうですね、と同意を得たところで踵を返した。やっぱり俺が先頭になるう。

* * *

「おっかしいなー」

10分経過。俺達はみごとに途方に暮れていた。

既に往路に費やした時間は軽く経過しており、もうこの森から飛び出しても良い頃はずっとに過ぎ去っていたのに、ちっとも森を抜けられそうにないのだ。

「レオンさんって方向音痴なんですか？」

「やかましいわ！ このおおボケ勇者！」

誰のせいでこんな所をさまよってると思ってたんだお前。

「ひどいですー」と抗議するちんちくりんを放置して真剣に悩む。おかしい、いくらなんでも来た道真っ直ぐ帰るだけで迷うわけがない。いくら1000年の間バカをやっていたからといって、方向感覚までバカになっていたとは思いたくない。多分、おかしいのはこ

の森だ。

さつきから気にはなっていた、妙に癪に障る気配と何か関係があるのかもしれない。

誰かに視られている。

「敵意満点って感じだな。こいつらか？ 森が変になってる原因は」

『そのようだな』

……、この声は。

嫌そうに顔を顰めて振り返ると、やっぱりエク公が座布団の上に鎮座していた。

座布団って必須アイテムだったのか？

「困った時、こうやってエクちゃんにどうしたらいいか聞くんです」

リアと一緒にだと俺が信じていた勇者像をことごとく否定されていくように思えるのは気のせいだろうか……などと思いがふらついた俺をよそに、リアは「ね、エクちゃんどういうこと？」と話を進めていた。

『どうやらこの森に居る輩が、我々を敵とみなしてうろついているようです。』

そう。森に入った時から変だとは思っていた。野生の動物には無い、色のある殺気がちくちくと鬱陶しいのだ。

『恐らく彼らの仕業でしょう、森全体に惑いの結界が敷かれているようです。脱出する為には術者を探して解除させるしかありません』

「でも、探すってこの広い森の中をですか？」

不安そうに眉を寄せるリアの言うとおり、確かにそれは問題だった。海のように広がる森は、何処までも続いていそうな程に広い。こんな広さの森をあても無く搜索したら、それこそ空腹や疲労で力尽きそうだ。

「転移魔術とか使えないのか？」

俺の勝手なイメージだと、一度行った事がある場所にはすぐ飛んでいけるような魔術がありそうな気がするんだけど。少し面倒だけど一旦パレットに戻ったほうが楽じゃないか？

「うーん……あるにはあるんですけど、敵対する結界が張り巡らされているような不安定な状況で無理に飛ぶと、困ったことになるかもしれません。止めておいたほうが良いですよ」

えー、いいじゃん頑張れよ。飛んだほうが楽じゃないか。

「困った事って例えば何だよ」

「気が付いたら腕を置き忘れちゃった、とか。聞いた話ですけど、過去にそんな例があったみたいで」

やめましょう。うん。それがいい。

「念の為に聞くけど、コンパスはどうなってる？」

外へ出るヒントが表示されていないかと聞いてみたのだが、リアから差し出されたコンパスには森を示す緑一色と中心の三角しか表示されていなかった。このコンパス最大望遠の表示半径はざっと10キロって所だから、本当なら森以外の表示があってもよさそうだなのにそれが無いという事はコンパスすら影響下に置くのか、それとも森に入った瞬間に奥地に飛ばされたのかもしれない。

……だったら気付けよ俺。

なんだか急に自分が情けなくなる。俺は一応魔王だったのに、こんな罠に引っかかって気付かないとは。

困ったことに、自分は本格的に呆けているのかもしれない。思い出せば、エク公とちよつとバトルした時もイマイチ感覚がおかしいというか、慣れないというか……とにかく本調子じゃなかった気がする。うーん、全盛の頃の感覚が思い出せない。この1000年一切戦いなんてしなかったし。

「これからどうしましょうか、レオンさん」

「ま、悲観的に考えてもしょうがないな。ほらほらそんな顔しないお前、勇者として今までやってきたのならこれくらいの試練あったら？」

「えと、私はずっと仲間の皆に助けてもらっていましたから」

えへへ、と恥ずかしそうに照れ笑いするリア。

予想はしていたが、やはりこの勇者にもパーティメンバーは居たようだ。でも今は一人なんだよな。あ、魔物退治が終わってパーティ解散したのかな。もうちょっと面倒見ていてくれてたら良かったのに。

『おい』

無粋に割り込む声。

わかってる。探す手間が省けたよ。

* * *

俺たちの代わりに丸焦げになった木の陰に隠れながら、周りを伺う。

「何人だ？」

複数なのは間違いない。相手は結構な力量を備えているようで、いきなり仕掛けられたこの炎術にしてもまともに当たれば痛そうな威力だった。周りの大木が燃え上がり炭と化してゆく様を横目に、襲撃者を探す。

「5、6人といったところでしょか。どうしてこんな事を……」

リアも流石に戦闘となると顔つきが変わる。油断なく辺りを伺う表情は間違いなく戦士のそれだった。互いに背を向けて周りを伺う。ぶずぶすと木の焦げる音と匂いが漂うここからでは、襲撃者の姿を見つけられなかった。

「さあな、相手に聞けば早いんだけどさ。ところでリア」

「なんですか？」

「命を狙われる心当たりは？」

「無いですよっ、そんなの」

「それじゃ、やっぱ俺のせいかな？」

「え、どうしてレオンさんが狙われるんですか？」

「こいつらはお前と違って常識的なんだろう、っと！」

今度は氷だ。1メートルは優に超える氷柱が片っ端から降り注ぐ。

どうやって対応しようか考える俺に先んじて、リアが進み出た。手にした剣を握り締めて1、2、345。最後は横薙ぎに一閃。5つの氷柱が使命を果たすことなく砕け散った。

「止めてください！ 私たちに争うつもりはありませんから」

リアの呼びかけに対する返事は雷撃。威力は氷の一撃に劣るが、

雷は広範囲を薙ぎ払うので回避が難しい。今度は俺が前に出た。

足元に染み込ませておいた魔力を一気に中空へ解き放ち、巻き上げた大量の土を盾のように前に固定する。相手から見れば、突如地面が垂直に立ち上がったように映ったかもしれない。狙い通り雷撃を防ぎきった土が地面へと還るタイミングを見計らって、ぽい、と拳大の石を適当な場所へと放り投げた。

「リア。ちょっと耳を塞いでいろ」

「はい。……どうしてですか？」

すぐわかる。

石は地面に触れた途端に閃光を発し、大きな破裂音が周りの草木を振るわせた。俺の影になるよう隠してやったのに、それでもかなり驚いたリアの顔が面白い。バカにしてやりたいが、先に面倒ごとを済ませないとな。

意識を集中した俺の耳に、俺達とは別の微かな足音が聞こえた。俺の反撃に驚いたのだろうか、浮き足立っている様だ。数は3。恐らく2手に分かれた片方だろう。残りの連中が潜む場所はまだ確信が無いけれど、恐らく俺達を挟んで反対側。挟撃される前に見つけた端から叩いていこう。数が半減すれば攻撃も少しは大人しくなるだろう。

こんな長ったらしい思考をする間に目標を補足した。やはり3人いた連中は、立派だがどこか草臥れた灰色の魔術師ローブを纏っていた。さて、どうしてやろうか。

「とりあえず、気絶しててくれ」

ここで下手に殺しちゃうと後ろの勇者に俺が裁かれかねないし。

苦し紛れに放たれた火の玉を素手で捕まえる。若干暴れる火の玉にちよつと細工して投げ返してやった。ぽかんと口を開けた三人の直上で”元”火の玉が弾けると、連中がばたばたと倒れる。疲労も手伝ってかアツサリと眠りに落ちてくれたみたいだ。

振り返ると剣の音が止んでいた。向こうの連中はリアが片づけたらしい。よしよし、偉いぞ。

* * *

「んー……」

自分の両手を見つめながら、俺は首を傾げた。やはり、自分の体に小さな違和感がある気がしたのだ。

今回程度の連中（恐らく、人間の一般的か少し上位クラスの魔術師だと思つ）を相手にするには全く問題ないが、このままの状態でちよつと腕の立つ相手が現れたらと思うと、あまり笑えない。

今の自分が本調子じゃないという根拠はただの感覚であり、酷く曖昧なモノなのだが、親父らに鍛え（イジメ）られていた頃の自分はもつと力を持っていた気がする。なんだろう、何かされたか俺？

「レオンさん、どこでーすかー 逸れちゃだめですよー」

ただか30メートルも離れていないのに逸れる方向音痴の泣き声で、思考がぶつつり途切れた。嘆息して救出に向かう。

「あれ、どこでーすかー!」

ひょっとして俺の調子がおかしいのはアイツのせいかもしれん。本当に調子狂う。

4・「レオンさんって方向音痴なんですか？」（後書き）

前書きに続きまして。

今後の展開は一応考えてあるのですが、その通りに進められるかどうか、結構怪しいです。本当に文章を作るのって難しいですね。

投稿する前に何度か見直すのですが、そのたびに文章を直しているのに、辻褄が合わないような変な所があるかもしれません。というかきつと色々あります。ごめんなさい。

5・「じゃあ、どこへ行くんだ」

「で、こいつらは結局何者なんだ？」

目の前には気絶した狼藉者6名が転がっている。狙われたのは俺が魔王だからかと思っていたが、よく考えたら誰も俺（魔王）が出てきた事を知らない筈なのに、いきなり襲い掛かられるのもおかしい話だ。ひょっとしてただの山賊だろうか。

『山賊にしては高等な魔術師が揃い過ぎている。恐らくは高位の主を守る近衛兵といったところだろうな』

「随分と具体的な推測だな？　あと唐突に喋るんじゃないよビックリするだろ」

『ふん、貴様は知らんだろうがローブにエンブレムが刺繍されている。これはラインハルト卿のものだ』

さっきの小競り合いのせいか、さらにボロくなったローブを指し言う。誰だそのなんとか卿ってやつは。

「ラインハルト卿といえば、長きに渡ってハイグレイ王国に仕えている名士です。でもエクちゃん、どうして卿の近衛兵さん達がこんな場所に居るの？」

誰もその問いに答えを持たない。

そもそも俺は関係無い面倒事に首を突っ込みたくないの、そん

なクエスチョンは後回してもいいと思う。問題は、どうしたらこのふざけた森から脱出できるかって事だろう。

「ところで、肝心の結界は解けたのか？」

リアが首を振る。やはり俺と同じ意見だった。まだ森の雰囲気は変わっておらず、方向感覚が狂うような気持ち悪さはまだ続いている。

『こやつらを倒しても結界が解かれないところを見ると、術者は他に存在するという事だろう。この森を出るのなら、何れにせよその者に会わねばなるまい』

そうなるよな。まったく厄介な事だ。

「ところでその術者ってのは何処にいるんだ」

『……知らん』

肝心な時に役に立たないなお前。

* * *

「ところでさ、近衛兵がここに居るって事は、こいつらが守っている主もこの森に居るって事だよな？」

「近衛兵が主の傍を離れることは考えにくいですから、そうだと思います。どうしてこの森に居るのは解りませんか……」

どんな理由か知らないが、近衛兵はラインハルトをこの森の何処かに匿っている……のだとしたら、俺達がいっすらに襲われたのは、主を襲う敵だと勘違いされたからなのかもしれない。ただの迷子なのに。

「……あれ？ この森に要人を匿っているのなら、どうして侵入者が森から出られないような結界敷いたんだろうな」

連中がラインハルトをこの森の何処かに匿っていたとしよう。

それを誰にも知られたくないというのなら、人避けの結界を使えば良いと思うのだが。そうすりゃ俺達も迷い込まずに済んだのに、この森にかけられているのは恐らく幻覚と封印の結界だ。

『ふん。この森は大きな街道の近くにある。近道にもならない森など、普通誰も近づかぬ。狩に適する獲物にも乏しいしな。』

この森に近づくのは敵である可能性が高いから、追い払うのではなく畏にかけて始末すると？ 情報を持ち帰らせない為に？ 何か物騒な話だなおい。

「うーん、結界の狙いがどうであれ、術者さんに会って誤解を解かない事にはここから出られそうにないですよ。どうやって探しましょうか。この人達は当分目を覚ましそうにないですし」

少々脱線した話を元に戻すが、衛兵達は未だに気を失ってだらしなく寝そべっていた。

叩き起こしたところで口を割るようなやつらじゃなさそうだ。手荒な真似は絶対にリアが許さないだろうし、そうすると他のモノに尋ねるしかない。

「それなんだけどさ、良い方法思いついた」

「ごそごそと気絶連中のポケットを探る。こんな森の中でウロウロしている連中だ。持っけていてもおかしくないと思う。……よし、あった。」

「おいリア、これ見てくれないか」

思った通りに見つかったコンパスを、リアに向かってポイッと投げた。

ゴツッ

「痛いですっ」

お前、運動神経切れてんのか？

「……これ、どうするんですか？ 人のもの取っちゃうのは駄目ですよ」

「借りるだけ。なあ、そのコンパス使えば主の居場所が解からないか？」

はっとするリアの顔。慌ててコンパスをいじり始めると、すぐに答えが返ってきた。

「ありました、ここから北西約5キロの地点に複数の人が固まっているようです」

ビンゴ。

「その位置をお前のコンパスに移せるか？　よし、それじゃ行くか」

* * *

あちこちから飛び出る枝葉や青々と茂る草を適当に払いながら、俺が先頭になつて森を歩いてゆく。さっきまで先頭をリアに任せていたのだが、良く見たら全然違う方向に進んでいやがったのだ。

「おのれはワザとやってんのか？」

「うーん、不思議です。確かにこつちだと……ひょっとして!!」

これはもしかしてコンパスすら結界に惑わされているのでは！と戦慄するリアの手からブツを奪い取ること20分。目的地はもう目前だった。

ただ黙って歩くのに飽きた俺は「そっいえばさ」と話を振った。

「さっきの話だけどさ」

「なんですか？」

「敵を皆閉じ込めちまえば、確かに森の中の情報は出て行かないだろうけどさ。敵からすれば放った刺客が何人も同じ森で帰って来ないとなれば、この森にターゲットが居ることがバレちまうんじゃないのか」

「もう既にそうなっているのだと思います。あの人たちの格好を見ても、私達と遭うまでに相当の数と闘っていたみたいですから」

こいつ時々中身変わるんじゃない？ と思うくらいにまともな事言ってる。

それにしても居場所がもう分かっている、でも追っ手を何度放つても返り討ちにされる。そんな相手に懲りずに追っ手を差し向け続けるなんて、随分ノンビリした追っ手だよな。

……………？

「いたっ……もうレオンさん。急に止まらないで下さいよっ」

鼻を押さえて抗議するリアからもっと文句が出てくるかと思っていたが、その前に俺同じ事を感じたらしい。視線が俺と同じ方を向く。ほんの少し、砂粒よりも小さなパチパチという音が聞こえるのだ。恐らくは 俺は空を見て確信する。

上空がみるみるうちに煙で覆われていくのだ。

「わ。な、なんですかレオンさん。急に引つ張るなんて」

「決まってる。急ぐぞ、火の手が早すぎる。ったく、よりによってこんなタイミングで火遊びとか最悪だ」

さっきの近衛兵との小競り合いで発生したような小火とは訳が違う。明らかに森を焼失させる目的が見えるような燃え広がり方だった。

信じられないと呟くりアの瞳。気持ちは解からなくても無いが間違いない。微かに流れてくる魔力の残滓をコイツも感じたのだろう、悲しそうに眉根を寄せた。

ひょっとしたら放火犯はラインハルトってヤツを狙っている人物かもしれない。探したい相手が森に潜み出てこないのならば、森自体を消してしまえば良いのだから。

……まあ、放火犯がどんなヤツかなんて、今考えることじゃない。どんどん昇ってゆく煙が青空を灰色へと塗り替えてゆく様を見る限り、ここも遠くない内に火が回ってくるだろう。その前に目的人物に会ってさっさと結界解かせてこんな森脱出すれば良いんだ。ほら行くぞ。

しかし、勇者の決断は違った。くるりと踵を返すと真っ直ぐに煙の立ち昇る方へと進んでゆく。

俺の手を握ったまま。

「こらこら、どこへ行くんだ」

「火を消しに、に決まっているじゃないですか。急げばまだ間に合います！」

そうですかご苦労様です流石は勇者偉いぞ勇者。でも何故俺の手を握っている？

「レオンさんが居ないと迷っちゃうじゃないですか」

「知らねえよ！ 自信満々に何を言っているんだお前」

まったく、こいつの頭がどういう構造しているのか本気で調べてみたい気分だ。

結局リアが引つ張るままに引きずられて行く俺。放っておいたら後味悪いっつか、森の中で迷子になられたら探すのが面倒だしさ。

こらこら、そっちじゃないこっちだ。

……………。

生木の燃える臭いが強くなり、熱源が近づく。深紅の炎が近づく者を威圧する。地獄と化した範囲は既に視界に収まりきらないほどに膨れ上がっていた。

「うーわ……………」

見ただけでゲンナリするほどの光景だった。コレを消すの？ 本

当に？

やっぱり止めないか、とリアに訴えようとしたんだけど、やる気がハンパない勇者は既に水の魔術を唱えたのか大量の水をぶちまけて消火活動を開始していた。

「レオンさんはそっちからお願いします！」

……と言われても。俺水魔法はあんまり得意じゃないんだよな。

どうしたものか。かといってボケツと立っているだけってのは情けない。あ、そうだ。

俺はたまたま手にしていたコンパスを見る。都合の良いことに、近くに青い表示があったのだ。あまり大きそうな川じゃないけど、コレを使おう。

ところで、世界征服するっていう当初の目的を忘れていないかお前。

* * *

大体30分も経過しただろうか。

ぶつくさ言いながらも消火作業は順調に進んだ。既に燃え残る面

積は三分の一以下にまで進み、俺達が進んだ後には水浸しになった木が焦げた体を並べている。随分と見晴らしが良くなった視界の先にはおお、紛れも無くさつきまで居たパレット・ハイロードと、何やら物騒な連中。

「げ、何か変なものまで見つけちゃった」

灰色のロープを纏ったのが3人、これまた灰色の甲冑をつけたのが5人。向こうも俺達を見つけたのか真っ直ぐこっちに向かって走ってきた。

「がっはっは、とうとう見つけたぜ」

この妙に偉そうな男がリーダーなんだろうか。スキンヘッドがトリードマークらしいその男は、ニヤニヤ笑いがこんなに似合うヤツも珍しいってくらいにヤラシイ笑みを向けてきた。その髪型すごく似合ってるね。

「おら観念しろ、ここにラインハルト卿が居るコトは割れてんだ。」

何がそんなに嬉しいのか知らないが、男のニヤニヤ笑いにますます磨きが掛かる。

「いや、俺達も探してたんだけど」

俺の言い分を聞いておいて間髪いれずに大笑いしやがるタコ親父。

「バッカかお前、お前ら森の中に居ただろ？　ならアイツを守る兵士だろうが」

その2つをイコールで強引に結ぶお前こそがきつとバカだ。

「いや、ホントだって。パレットって街からハイグレイ王国に行くとして道に迷っちゃってさ」

「ウソつくんじゃないよ！ あんな一本道で迷う馬鹿がどこに居るってんだよ」

いまそこで消火作業しています。

今度は取り巻き連中まで加わって爆笑しやがった。あくまで紳士的対応に努める俺だが、堪忍袋の緒が音を立てて軋みだした。

消しちゃおっかな。こいつらなら全員相手にしても多分10秒も要らない。……でもそんな事したらきつと怒るよなアイツ。一応平和を愛する勇者だし。

俺がどうすべきか迷っている間に、消火作業を終えた防火隊長が駆けつけてきた。

「どうしたんですかレオンさん。この方達はお友達ですか？」

これから消そうかと。

「おーおーちっこいガキだな。こんなのに守られてんのかラインハルト卿ってのは」

再び起こる爆笑。その光景を見て、リアの顔が理解の色になった。

「やっちゃいましょう」

「マジッスか!？」

こいつに堪忍袋は無いらしい。

いやでもさ、仮にも勇者が一般人に暴行事件は拙いんじや。

「懲らしめてやるだけです。いいんです。おっけーです。ノープロです」

最後のはノープロblemsの略らしい。業界用語(?)に詳しい勇者が手ごころな枝を拾った。ぶぶんと軽く具合を確かめるリアに、

「おいおいおい。おチビちゃん本気かよ、俺そんな趣味無いんだけどな」

さらに油が注がれる。うわ、リアの顔がものすっごい笑顔だ。

「なあおチビちゃん、悪いことは言わ」

キレた。

俺でも一瞬見失いかける程の動作は、相手からすれば消えたりアが突然目の前に出現したように見えただろう。鼻先1ミリに突きつけられた枝がタコ男を全身金縛りにかけた。

「あなた失礼ですつ、私おチビちゃんじゃありませんっ」

あの言葉が地雷だったらしい、以後絶対に気をつけよう。

寸止めなしでアレやられたらマジで洒落にならないと思う。

ん？

呆然の取り巻きが見守る中、自分の背後に生じた気配に気付けたのは偶然だった。

避けられたのは、ただの幸運だった。

6・「知らない人です」

空気すら振動しない。不自然な程に静かすぎる一筋が俺のすぐ傍を通り抜けて、焦げた木の枝を音も無く両断した。

ジャリツ、と乱入者の脚が立てた音が妙に響いて聞こえた。尾のように結んで流している長い髪の色は混じりの無い紅。俺の胸程の高さから睨んでくる瞳も透き通るような赤色だった。リアよりも僅かに小柄な外見をした女の白い手が持つ得物は、剣の類だがリアのものとは形が違う。確かあれば”カタナ”とかいう武器

「っ！」

語る言葉も持たずにそれが揺らめく。空気を切り裂く音すらしない一撃を咄嗟に腕で防ごうとした。

「げ
」

魔力で硬化してある筈の服が紙のように散る。紙一重で回避できた腕が自分にくっついていいることを確認して、不覚にも流れた冷や汗を拭った。

マズい、アレに触れたらただじゃ済まないだろう。斬ることに關してはエク公以上だ。何なんだこいつは……ひょっとして放火魔のボスはあのスキンヘッドじゃなくこいつなのか。

動きの鋭さはリア（エク公のみ）とほぼ同等。だが触れたら腕が落ちかねないモノを腕で受け止める訳にもいかない。木の棒を魔力

で目いっぱい硬化したら、何とか受け止められる……か？

「あぶねっ」

胴を狙う一撃を避けた俺は、地面に転がっている手頃な枝を掴んでありったけの魔力を込めて強化した。棒切れを振り回すなんて滅多にしないので自信ないけど、素手よりはマシだ。

ぼろっ。

え。

赤髪に向けて構えた棒切れが、真ん中から切断されてぼろりと落ちた。

「……………無理だ。」

限界まで強化してこの有様かよ。

棒を投げ捨てて次の手を考えるしかない。

迂闊に背を見せて撤退するのはダメだと思う。目を離れた僅かな隙に目の前まで間合いを詰めてくるような相手だ。背後からバツサリやられる可能性が非常に高い。

だったら立ち向かうしかないんだけど、相手に触れられない以上魔法を使うしかない。しかし魔法を使うとなるとどうしても無防備な一瞬が出来てしまう。そんな隙を見逃してくれる程甘い相手には見えないのだ。何か使えそうな物も落ちていないし。

どーしよう。

気付けばさっきまで居たはずの連中が消えている。何処に行ったか知らないが俺も一緒に連れて行って欲しかった。

「勘弁してくれよ……」

俺はただの不幸な迷子ちゃんですってば。

生まれた沈黙の時を狙い主張する俺の言葉にも、目の前の赤髪は耳を持たないかのように返事をくれなかった。

頭、足、胴、肩、腕。凶悪な刃が振るわれる度に冷たい汗が流れる。どうしようもなく心臓に悪い時間を過ごしている俺は、そんな中で一つの光明を見た……気がした。相手は頭を狙ってカタナを振り下ろした後、決まって足を狙ってくるのだ。

これが相手の無意識的な行動ならば、それを見越して攻撃を叩き込む事ができる。

ただ万が一、それが相手の意識的な行動だったとしたら、非常にマズイ結果になりそうだ。俺がこのクセを見抜いて反撃に出る瞬間を、相手が待ち構えているのだとしたら。

「……………」。

あまりウダウダ考えている時間は無かった。このまま相手が諦めるまで避け続けるなんて選択はむしろ危険だと思う。俺が避けるこ

とに動きに慣れてきたのか、相手の動きはむしろ鋭さを増している。

やるしかないよな。

胸を狙う突きを避けた先へ追尾するように、肩、腕、脚へとカタナが伸びてくる。ぐっと力を込めるように踏み込んだ相手が上段に構えを取った。来る。

頭を狙い振り下ろされたカタナを、まずは右へ回り込むように避ける。

相手はそのまま俺の脚を狙うように動くはず。それを避けて一気に反撃する為に、カタナを飛び越えるようにジャンプして一気に間合いを詰める。

何かを考える時間も惜しい。無防備に伸びきった相手の腕に狙いを定め、俺の右手に用意した雷撃を叩き付けた。

「ッ

」

相手の驚いたような息遣いが聞こえた。いける。目論見が成功したことを確信した俺は、予想外の動きをした相手にまた驚かされた。

体に雷撃が届く前に、赤髪は飛び込んだ俺の下をくぐるように体を投げ出したのだ。行き場を見失った雷撃が地面に吸い込まれて消滅する。慌てて振り返った俺から離れるように、赤髪は猫のような身のこなしで大きく距離を取った。まるで俺がこんな風に反撃することを予め知っていたような、鮮やかな反応だった。

「……これでもダメか。まったく、面倒な相手だ」

* * *

そして俺は、また胃が痛くなるような睨み合いへと戻されてしま
う。

しかしさっきまでとは少し状況が違った。相手との間合いが10
m近く開いているのだ。さっきまでとは違う、剣士に不利な位置関
係だ。

この位置なら接近される前に魔法が使える。もう遠慮なんかして
やらない。小さな女だと思って油断していたらごらんの有様だ。

あれ？

ふと気付くと、赤髪が構えを変えていた。

「……何だこのイヤな感じは。」

殺気が膨らむのが嫌でも解かった。エク公の時とは違う純粹な敵
意が俺に突き刺さる。相手が武器を納めたというのに殺気が膨らむ
一方の構えからは、悪い予感しかない。

昔どこかで聞いたことがある。抜刀術と名付けられた剣技は防ぐ

ことの叶わない一撃必殺。相手の間合いに踏み込んだら最後、俺の体は2つになっちまうだろう。

しかしこの距離ならば魔法が使えるし、相手の武器は絶対に届かない。射程比べではこっちが圧倒的に有利なんだから、迂闊に前に出なければ大丈夫だ。そう自分に言い聞かせる。

「……。」

それなのに、俺は少しも安心できていなかった。まるで相手の射程距離内に突っ立っているような、皮膚がピリピリするような感覚が消えないのだ。

「。」

赤髪が、短く何かを呟いた気がした。カタナを納めていたヤツの脚が焦土に線を引く。鞘から引き抜かれる刀身が見えない。速過ぎる扇形としか認識できない赤銀が俺の遙か手前で空を切り、

冷たい何かが俺の右の頬に触れた。

「」

頭に沸き起こる疑問を全てキャンセルした。退け、と考えていたらその時はもう駄目だっただろう。情けなく仰け反りながらも、俺はまだ生きていた。恐る恐る頬に触れても、手に血は付かなかった。

心の中で舌を打つ。

とんでもないヤツだ。1000年後の世界ってのはこんなのがゴロゴロしてるのか？

何故届いた。錯覚じゃない、間違いなくあれは命を刈り取る一閃だった。ぐるぐる巡る思考と共に改めて無言の襲撃者を見る。そいつは仕留め損なった事にか忌々しげに眉を顰めて、

「ちっ、なの」

変な語尾をつけた。

なの？

ふと殺気が消えたかと思ったら、そいつは刀を肩に乗せて笑った。笑いやがった。

「ジャイノスの手下にこんな骨の有る輩が居るとは思えないなの。あんた、なに？ なの」

今絶対に無理やり語尾付けただろ。

「……道に迷った旅人ってやつ？」

言ってから大笑いした連中を思い出す。しまった、もう少し本当っぽく聞こえる言い訳を探しとくんだった。こんなの誰も信じないよな……と後悔したのだが。

「それは大変だった、なの」

……どうも俺の周りにはちよくちよく稀少（変）なのが出現するらしい。ま、話が早くて助かった。

「俺達は此処から出たいだけなんだ。何とかしてくれないか」

「主様に頼まないと駄目なの。これから会いに行く、なの」

* * *

「問答無用で切りかかれた時はどうなるかと思った」

「過ぎたことをクヨクヨしてもしょうがない、なの」

お前が言つとすぐ腹立たしいんですけど。

口の先まで出掛かった文句を飲み込んで、目の前の赤髪に続いて森を進む。自信にあふれたその足取りは安心して先頭を任せられた行く手に邪魔な枝を音もなく切り落として一言。

「あんたさっきの攻撃よく避けた、なの」

「あまり良く覚えていないんだけどな」

ふつうはその前に意識が切れてるの、などと物騒なことを言う。

「サキはあんたのこと気に入った、なの」

「そりゃどうも」

こいつサキって言うのか、聞く手間が省けた。まあ褒められたら悪い気はしないので適当に相槌を打つ。サキは上機嫌らしく、ふんふんと鼻歌なんぞ歌っていた。

「なあ、どうして俺に襲い掛かったりしたんだ？」

「主様を狙う不屈き者の手下だと思った、なの」

聞けば今までも襲撃されたことがあるらしい。相手はずいぶんとしつこいヤツらしく、もう何度目の事かは覚えていない、とつまらなそうに教えてくれた。

「お前、その間ずっと戦ってきたのか」

「当然なの。主様を守ることが私の生きる意味、なの」

生きる意味、ねえ。良く解らないけど、コイツがいれば何回襲撃されたところで負けないだろう。小さい体を精一杯反らしてふんぞり返るその姿はやっぱり小さい。リア以下かもしれない。良かったな、お前よかちつこいのが………………。。

！？

「？ そんなに汗水垂らしまくってどうした、なの」

忘れてた。かんっぜんに頭から抜け落ちてた。あの馬鹿は何処へ。

いない。どこを見渡してもあの方向音痴の姿が見つからない。

「なあ、さっき会った場所に、お前よりすこし大きいくらいの女の子居ただろ？」

あんなのでも放置すると後味が悪い。リアのやつ間違いなく森の中で迷っているだろう。サキと会うまでは確かに居ただけど。

「私を見てすぐ逃げたアレならの森の中に行っちゃた、なの。知り合いなの？」

「知らない人です」

見捨てよう。暫く反省でもしている。

* * *

案内されて辿り着いたレンガ造りの館は、思った以上に立派なものだった。木々に紛れる為か1階のみの造りかと思ったら、どうやら地下に伸びているらしい。それを考えると少なくとも数十人は暮らせるほどの部屋数がありそうだ。扉を抜けると目に入った内装は、派手ではないが落ち着いた色合いでデザインされていて、居心地の良さそうな雰囲気だった。ここで休めるのなら悪くない。

「あー、何だかとてもなく疲れた。」

ここで一通りくつろいでゆっくり休んでから、今頃泣いて反省しているリアを回収してやろう　　と思っていたのだが。

「もう、遅かったですねレオンさん」

案内されたティールームに、茶菓子を幸せそうに頼張る未知の生物がいた。何故だ。何故貴様がここに居る！？

『ふん、随分と苦戦したようだな』

隣には同じように茶を啜るエク公が居た。ホントにお茶飲んでやがる。リアの茶飲み友達だという告白は嘘じゃなかったようだ。大ピンチだった俺が捨て置かれたのはひょっとしなくてもお前の差し金か。

「ほっほ、ようこそ。お仲間の方も到着したみたいじゃな」

エク公に文句の一つや二つを叩きつけていると、笑みの形に皺を刻んだ男がやってきた。

一目で直感する。きつとこの男がラインハルトだ。

「主様、ただいまなの」

俺を席に案内したサキが男の傍へ向かう。

短く何かを報告したサキは頭をぼんぼんと撫でられて、嬉しそうに目を細めていた。その様子はとても俺を怖い目に遭わせた人物とは思えない。まるで飼い主に甘える子犬みたいだ。外見はどちらかと言えばネコっぽいんだけど。

「サキも座りなさい。……さて、改めて自己紹介をさせてもらおうかの」

予想通りの名を告げた男に続いて、俺達も簡単に名乗る。

一通り挨拶が済んだところで、どうしてリアがこんな所に居たのかを聞いてみた。

「気絶した私達の部下をここまで運んでくださったんじゃよ。」

リアは俺と離れてそんな事をしていたらしい。近衛兵を気絶させたのは俺達なのだがそこは黙っておこう。リアに対し「ありがとう」と人懐っこい笑みを浮かべる男の見た目は初老に入っただけだが、その雰囲気には同年代と話す気安さがあった。

隣に視線を向ける。静かに茶を啜るサキは”ヨーカン”という甘菓子を幸せそうにつついていて。女の子って皆甘いものに目が無いんだろうか。糸の先に括りつけたら釣れるかもしれない。

「それにしても、あやつらまさか森を燃やしにかかって来るとは。ちとゆっくり構えすぎたようじゃはっはっは」

かんらかんらという表現がとても似合う笑い声とその表情からは、追われている者の恐怖が全く読み取れなかった。リアが綺麗にした皿の上にフォークをそっと置く。紅茶の香りを楽しむようにゆっくり

りと一口。

「おじ……ラインハルト卿はもう随分とここに居らっしゃるのですか」

「ふふ、無理にそう呼ばなくとも良い。おじいさんなり、好きに呼んでくれて結構じゃ」

顔を赤くしたリアが恐縮するのを見て何故かこっちまで恥ずかしくなる。それにしてもずいぶん出来た人のようだ。

「この森に来てから今日でもう一月近くになるかの。あんな国でもワシの愛する国でな。簡単には見捨てられんのじゃよ」

「どうしてこんな事をなさっているのですか？ ラインハルトといえばこの辺りでは知らぬ者は居ない程の名士であり、代々王に仕えていると聞いていますが……」

「一言で言えば退屈しのぎの相手かの」

意味をうまく読み取れない。リアも同様らしく困惑の顔で一口紅茶を含んだ。いつしか空になった俺のカップを見てじいさんがおかわりを勧める。目を離していた隙に侍女のような格好になっていたサキがテキパキとお代わりの準備を進める中で聞いた話は、数分程で話し終える簡単なものだった。

* * *

その王は、平和でつまらない世の中が退屈だったらしい。嘗ては魔王を相手に戦った勇敢な国だったが、魔王が消えて久しい現世では自分達が戦う相手が居ない。強力な手駒を持て余す事に耐えられなかったというのだ。

「なんか子供っぽいなそいつ」

思ったことを素直に言っていると、じいさんは怒るところか苦々しい顔で笑った。

「その通り、私も言ってやったよ。もつとも穏便になるよう言い方には気をつけたがね。返ってきた言葉は『無礼者』じゃったよ」

ますます子供だ。良くそんな王の居る国が繁栄を続けられたな、と思う。

「最近即位したてのほやほやじゃからの。王様であることにはしゃいでおるのかもしれん。なんせ12歳じゃから」

ホントに子供じゃないか、そんなのがトップなのかあの国は。どうりであるの兵士も品が無いと思った。

じいさんが言うには、ジャイノスという男が王に近づきだした辺りから、王の考えが変わっていったらしい。

「好戦的な意見ばかりを取り入れた王に、厳しいお灸をすえた

かったのじゃが……何度意見を申しても無視されるばかりか、とうとうわしを含めた明確な反対派は反逆者扱いになってしまったのじゃよ。はっはっは。」

これっぽっちも気落ちしていない風に笑っているその様を見てみると、何となくこっちの方が王様っぽい気がする。風格つてやつだろうか？ 視線をサキに向けると、彼女はそんな主を見て誇らしげに微笑んでいた。

「それで、この森に？」

彼らは逃げられないのではなく、逃げなかったらしい。そもそもこの森に結界を張った理由は追っ手呼び寄せることにあったのだという。捕らえた追っ手は殺してしまうのではなく、わざと情報を与えて逃がしていた。そんなことを意図的にしていると思わせないように軽い記憶操作をしているらしいが。

「どうしてそんなことを？」

「退屈しのぎに付き合うためじゃよ」

暇になったからと兵を動かすような王だ。周りに進言されて隣国へ攻め込むといった一大事を引き起こしかねない。その目をこちらに引き付けておく為にこうして籠城めいたことをしていたらしい。アピールの為に、進入してきた相手に宣戦布告めいた書簡を渡した事もあったのだとか。思い切ったことをするじいさんだ。

「じゃが、やはりたかだか数十人では限界というものがある」

もともとこの森には50人の私兵がいたのだという。それが今は

たった6人＋サキだけになってしまった。選りすぐりの兵といえど限界などつくに来ていたのだ。そこにきて今回のように森を燃やされてしまえば、隠れるところそのものが無くなってしまふ。地の利を生かして戦力差を埋めてきたこれまでのように行かなくなれば、あつというまに勝負は決着するだろう。

ほんの少しだけ、初老の男の顔が悲しそうに歪む。しかし一瞬のこと、すぐに彼は笑った。それが義務であるかのように笑顔を最後まで崩さなかった。

「わかりました！」

短絡思考が大真面目に手を上げる。

根拠は無い。しかし、何故か厄介なことになる予感がした。『私
がその困った王様にお灸をすえちゃいますから！ 大丈夫です。ノ
ープロですっ』なんて言い出すかも、とかそんな予感。

やめてほしい。

そういえば何故こんな立ち入った話をしているんだ俺達。

「おいリア、発言は良く考えてから」

「わたしたちがその困った王様にお灸をすえちゃいますから！ 大丈夫です。ノープロですっ」

「って俺もかよ！ 何でだよ！」

そんな俺の心の叫びは当然のように無視された。

6・「知らない人です」（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

あらすじにも追記したのですが、物語の進行上どうしてもシリアスっぽくなる話が出てきます。もう少し先の話なのですが、そういった話が苦手な方はご注意ください。

お気に入り登録をしていただいた方がいるみたいでびっくりしました。ありがとうございます。この先面白くなるのかちょっと自信ないですが、話の区切りが付くまでは今のペースで投稿したいと思います。

7・「こんな所で何やってんだよお前ら……」

全くもって不本意なのだが、俺は結局「一度王様を見てみましょう」と主張して止まない勇者を止められずにハイグレイ王国に連行されていた。俺とリア、そしてサキが加わって3人となった俺達は、美味しそうな匂いを漂わせている出店でちょっと買い物をしている所だ。

「んまい」

いま俺が食べている、トロトロになるまで煮込まれた肉や野菜を穀物の生地で包んだ食べ物”ピロタン”という。この国の名物らしいのだが結構おいしい。他にも色々魅惑的な匂いをさせている屋台が多いので、いつか全部制覇してやろうと思っている。

王様見学に来ている俺達だがこんな楽しみでもないと言われてない。どうして俺まで実行犯に選ばれたのか未だに納得出来ないし、というかおかしいだろ。

「リアっち。アイスクリームお待たせ、なの」

「わっ、すごく長いです」

クリームだけで30センチはあるアイスを片手にうつとりする勇者は、いつの間にか随分サキと仲良くなっている。別にいいんだけどさ。

「おいしいですっ」

「なの」

お前らどんだけ甘いもの好きなんだよ。

「レオンさんも良かったらどうですか？　とっても美味しいですよ」

「子供じゃあるまいし、大人はそんなもの喜んで食わねーよ」

「レオンも私達とそんなに年齢違わないと思うの」

1000年単位で俺のほうが年上だったの。人間換算なら近いかもしれないけど。

* * *

これじゃまるで子守じゃねーか。

きやいきやい騒ぐ黒っばいのと赤っばいのを他人行儀に眺めながら、俺は改めて街をぐるっと見渡した。この国も一見すると平和だ。人通りが多く市場は活気付いているし、とてもこれから争いの火種になろうとする国には思えなかった。

サキから聞いた話だとこの国の人口は1万人ほど。かつては魔物討伐の拠点として多くの冒険者、傭兵が集まる大きなギルド（組合）も存在していたらしいが、魔物の脅威がほぼ去った今は既に解散し

た後だという。少し興味があつたのでギルド跡地に行ってみたのだが、今は武器・防具を扱う店に変わっていた。他よりも一際大きなレンガ造りの建物の内部は、この国の工匠が持ち寄った作品で溢れていた。

「……持ち運ぶのが面倒なんだよな。」

いつまでも武器のひとつも持たないでいると、この間みたいな情けない目に遭うかもしれないのだが……どうも惹かれる品物が見当たらない。俺は両親の良くわからない教育方針によって武器防具の類を持つことを禁じられたまま育ったので、下手に武器に頼ると余計に弱くなるかもしれないし。

何の付加効果もない装飾品を楽しそうに見て回っている2人を放置して店の外に出た俺は、他の面白そうなものを求めて回る事にした。

「……お？」

何気なく覗き込んだ路地の先にも、レンガ造りの建物が林のように立ち並んでいる。だがどこか感じる気配が違っていた。一本道を逸れただけの空間には、同じ街とは思えない湿った空気が流れていた。

どうせリア達は暫く店を見て回ると言っていたし、サキがいれば迷子にもならないだろう。どこか懐かしい雰囲気惹かれた俺は、そちらの方へと足を向けてみた。

* * *

染みが奇妙な模様を描く木の戸を押す。油の切れた甲高い、しかし懐かしい響きが俺を迎えてくれた。その場にいる4割が煙らせている煙草と7割が遠慮なく出す罵声に似た大声、そして全員が手にする様々な酒の香りが力の限り大人の遊び場を主張している。1000年経とうがこういう場所は変わらない。お子様なあいつ等と違う、大人な闇の帝王には相応しい世界だ。

まずは酒でも飲もうかな。酒は良いよね、嫌なことを忘れさせてくれる。

カウンターに座り指を立てる。言葉無く俺の手に収まったのは黄金色をしたキツイやつだった。無言の勧めに応じて一気におおる。

喉を通るなんともいえない熱さ。呼吸するだけで噎せ返るような

「げほつ。」

これ、が俺、の悩みを、ゴホッ 忘れ、させて ゴホッ くれる。

「お客さん、無理すんなよ」

何コレ強すぎだよ。

どんな代物かと思ってボトルを見たら骸骨マークが付いていた。殺す気か。

「じゃあタバコでも喫むかい？ お客さん」

「……ああ、それじゃ貰おうかな」

タバコは良い。肺に溜めた煙をゆっくりと吐けば胸の内につかえたモノまで吐き出させてくれる。そう、いらぬことに悩ませられている俺にはタバコこそ必要だ。マスターに合図すると差し出した指に葉巻を挿してくれた。渋い音をさせてマスターの手が石を擦る。果物の香りがする洒落たその煙を肺一杯に吸い込んでケホッ、ケホケホゲホッ。

「お客さん、コレ飲みな」

「げほっ、ああ、ありがとう。」

強面からは全く想像できないマスターの細やかな心配りにちよつと感動する。やっぱり俺にお似合いなのは手の中のホットミルク

「じゃねえよ！ 誰がミルクの似合うお子様だよ！」

「はっはっは、そう怒るなよ。イイ男が台無しじゃないか」

そんな平べったい声で言われてもちつとも嬉しくない。やや乱暴に飲み干した俺が次はどこへ行こうかと考えていたら、マスターがまた俺に話しかけてきた。

「お客さん、オトナなら向こうでひと勝負してきたらどうだい？」

「勝負？」

「良い暇つぶしになると思っぜ。帰りにどうなってるかは保障できないけどな」

マスターに礼を告げて奥のテーブルに向かうと、刺す様な緊張感がまた一段と強くなった。無言でカードを切るディーラーと時折巻き起こる歓声と悲鳴。一瞬にして一月の稼ぎが消えたかと思えば一年分の稼ぎが舞い込んでくるここは、時の流れすら歪んでいるようだった。

「ちょっと遊んでやるか」

不敵な笑みを浮かべて席に付いた俺の目の前で、ディーラーが恭しく頭を下げた。

ブラックジャックは1から11まであるカードの数を足して21に近い方が勝ちというシンプルなゲームだ。ディーラーと一対一で勝負し、勝てば掛け金に応じてチップが支払われる。

最も強いのは21なのだが、22以上になってしまうと「バースト」となって無条件で負けになってしまう。また、同じ21でもエースと10を組み合わせた「ブラックジャック」が成立した場合はそちらが優先される。単純だけど結構奥深いゲームだ。

手持ちのチップは500。どんと10倍、いや100倍にしてやる。愚民どもよ、魔王の實力に恐れ平伏すが良いわ。わはははは。

「残念、バーストですねお客様」

えっ。

けしからんディーラーを睨むが涼しい顔で受け流された。……まあいい、初戦はツイてなかったが慌てる必要は無いさ。たった10枚チップを巻き上げたからっていい気になってんじゃねーぞちくしょう。

「18だ!」

「19です」

「どうだ、20だ!」

「残念、わたくしは21です」

「なん、だと……」

無常な宣告と共に没収されてゆくチップの山。くそ、流れが悪いのかちつとも勝てない。これではただの力モだ。残り200枚のチップを見ながら続行するか暫し迷う。

だがこんな事で逃げ出したらそれこそ笑いものだ。絶対に勝つてやる、ぎゃふんと言わせてやるつ。

「掛け金は200だ」

ディーラーの眉が小さく動く。完全なポーカーフェイスの相手が初めて見せた小さな表情だった。

「どうぞ。」

伏せて配られたカードはハートの6とスペードの8。合計14しかない。俺は迷わず3枚目を要求した。

「……む」

新たなカードはクラブの3だったのでこれで計17だ。21を超えたらバーストになり無条件で負けになってしまうこのゲームでは、とにかくバーストこそ警戒しなくてはならない。ディーラーと1対1の勝負なのだ。相手がバーストしていれば例え17でも勝てる。

しかしディーラーのアップカードはキング。そしてそのままスタンドしているということは、最低でも17ということ。自信ありげに俺を見下ろす目からして、きっとそれ以上の手が入っている。

もう一枚引くしかない。このムツツリは間違いなく余裕の面だ。ディーラーに指を掻き込むような動作を見せて、次のカードを要求した。

ちよつとどきどきする。さて、勝負

引いたのは、ハートのエース。

「……また微妙なの引いたよ」

エースは1か11として扱える。11だとバーストなのでこの場合無条件で1となり合計18だ。どうしよう、後一枚引くとなれば

候補は1〜3までしか無いのでバースト率はかなり高い。でも、

「もう一枚だ」

俺の勘が叫んでいる。ディーラーは絶対に18以上の手で待っている、行け！ と。

勝負だ。手の内に滑り込んできたカードに手を置き目を瞑った。

深呼吸。

もう一回深呼吸。緊張感に滲む汗すら心地良い。神よ、俺に祝福を！

音を立ててめくった最後のカードは。

ダイヤの3。

震えた。21だ。今俺は大人の階段を一步昇った気さえする。勝ち誇った顔で残る4枚を叩きつけてやった。さあチップを寄越すがいい！

「21だ！」

「ブラックジャックです」

うん、あれだ。良く考えたら祈る相手を間違えた。

* * *

がつくりと肩を落とす俺の背後でにわかに歓声が巻き起こった。どうやら大勝ちしているヤツがいるらしく、青くなったディーラーがダラダラ流れる汗を拭っている。それを見つめる背中には二つ。小柄ながら自身に満ち溢れた指裁きでチップを積み上げてゆく様は、まさしく勝負師の姿だった。

あれだよ。あんなふうにカッコよくこの世界を渡り歩きたかったんだ。

「見学しようっと」

軽めのドリンクを頼んでから近づいてみると、やっぱりかなり小柄な二人組みだった。肩までの艶のある黒髪と赤く長い髪を尻尾のように縛って流した女二人。傍らには不釣合いなほどの剣が主を見守っていた。

ゲームはポーカーだった。二人の対面に座る客との勝負らしい。

対戦相手はかなり負けが込んでいる様子。その表情は険しく、スキンヘッドに走る青筋がびくびく動いてこれでもかと威嚇する。しかし手前の二人組は全然気にしていない。二人で仲良く

「これいらない、なの」

「そうですね、じゃあこれ切っちゃいましょう」

とかのたまって手札を切った。

.....。

……落ち着こう。冷静になれ。Be coolだ。

そんなワケない。アイツらはまだまだこんな世界とは無縁なお子様なのだ。そもそも、やつらは幸せそうに馬鹿でかいアイスクリームを頬張っていたではないか。そんなあいつ等がこんなところに出没するハズが無いっていうか絶対に門前払い食らうだろ。年齢制限とかそれ以前に見た目で。

そうか、世の中には同じ様なヤツが3人は居るという。そうに違いない、きっと名前は全然違

「リアっちまた勝った、なの」

「サキちゃんのおかげですっ」

……。どうやら間違いないらしい。

「あ、レオンさん!」

「やつほー、なの」

「こんな所で何やってんだよお前ら……」

俺の姿を見てぱつと嬉しそうな顔をしたリアは、何故かサキと二人で座っていた長椅子の真ん中に座るようお願いしてきた。そして何やらこそこそと耳打ちされる。

「実は私たち、レオンさんの妹だと説明してここに入れてもらったんです。ですから、少しの間だけ話を合わせてもらえませんか？」

「お願いおにいちゃん、なの」

全然似てないだろ俺達。

呆気にとられた俺を見て了承したと勘違いしたのか、二人はじゃれつくように腕を絡めてきた。途端に射抜くような視線があらゆる方向から突き刺さる。……え、なんで？

「ニイチャン、両手に花なんて羨ましいねえ？ ハッハッハッ」

ちつとも笑っていない声で睨んでくる野次馬の男。良く見ると周りのギャラリーのうち殆どの男が似たような視線を送ってくれていた。

「きゃっ、お兄ちゃん怖いですっ」

「なのっ」

お前らそんなキャラじゃなかっただろ！？

ぎゅっと腕を抱きしめられて、小さな膨らみが両側から押し付けられる。周りからの視線がさらに倍ほど厳しくなったせいで非常に

居心地が悪い。

テーブルを見ると、二人が飲んだと思われる果実酒のコップが半分ほど残っていた。ひよつとして二人とも酔っ払っているのかもしれない。たったコップ半分なのに。

「オイオイお前ら！　いつまで対戦相手を放置してイチャイチャしてやがるんだ！！！」

「きゃー」

「きゃー、なのっ」

もう止めてくれ。そのうち呪い殺されそうな視線になってきた。

* * *

ようやく勝負が再開し、俺達の前にカードが5枚配られる。……信じられないが、二人の前には大量のチップがうず高く積みまわっていた。それに引き換え相手側には申し訳程度の小山。大勢は明らかだった。

「ツーパーだ」

「スリーカードですっ」

勝った。

「スリーカードだ！」

「フラッシュなの」

勝った。

「どうだ！フルハウスだ！」

「フォーカードですっ」

また勝った。

なんなんだこの鬼のようなツキは。

「ぐ、ぬぬぬぬぬうっ」

もはや相手は真っ赤を通り越して浅黒い。気のせいかどこかで見たことのある強面と相俟ってかなりの迫力、どうりでディーラーまで青くなる訳だ。

しかしそんな威嚇もこの二人には全く通用していない。なんせ相手を見てもいない。二人で仲良く談笑しながらデタラメにカードを捨てている。どれくらいデタラメかというと、まず”55777”と配られたカードから5を一枚だけ捨ててしまう。そして7をもう1枚引いてくるのだ。

これはさっきフォーカードでフルハウスに勝った時の手札だ。相手の手札は”A A K K K”のフルハウスだったので確かにあのまま

” 5 5 7 7 7 ” で勝負すれば負けていた。だが相手の手札が見えていない状況で、フルハウスを崩す気になど誰になるか。こいつらどんな思考回路しているんだよ。

普通じゃないってのは薄々気がついていただけさ。

「クソツタレ！ 次だ次だ！」

強面の怒鳴り声のせいで更に青くなってゆくディーラーから新たに配られたカードは、スペードの12とハートの345。強運は未だ継続中らしく、最初からストレートが成立していた。

「どれを交換しましょうか」

おいおいおい。

「この3ついらない、なの」

しれっとノータイムで捨てられるハートの345。

おいおいおいおいおいこら。

シュッ

……………ん？

微かな気配を感じて対戦相手へ目をやると、なにやらくねくねと不穏な動きをしている。非常に気味が悪い姿だ。

「……………」

男はくつくつく、と悪い笑みを浮かべてカードを凝視している。ついでに言えば、その直前にディーラーから何かが渡った所もばっちり目撃してしまった。平たく言えばイカサマだ。よほど良い手札を仕込んだのか男は齒をむき出して笑いを浮かべながら有り金全部を積み上げていく。

『…………おにいちちゃん？ どうした、なの？』

まだそれ続いているのな。

怪訝な顔の俺を見てサキが首を傾げていた。…………こんな勝負で負けるのも馬鹿らしいし、教えておいてやろう。

『あいつがイカサマを仕込んだのを見たんだよ。悪いことは言わないからここは降りておけ』

『やなの』

即答だった。

『勝負で逃げるのは私の一番嫌いなこと、なの』

サキの赤い瞳が好戦的に光る。ちょっと待て、と止めようとしたけど遅かった。

「勝負なの」

「バカが、食らいやがれ！ キングのフォーカードだ！」

おおお、と沸くギャラリーと勝利を確信して大笑いするスキンヘッド。面白くない光景だがさすがにこれに勝つのは無理だろう。引き際を知らぬとは所詮お子様はこの程度だったか、と思ってたのに。

「ふっ、なの」

ぱたりと倒したその手札は、スペードの12345。

勝っちゃったよ。

泡を吹いてひっくり返ったディーラーと赤を通り越して白くなったスキンヘッド。もう終わりと見たのか颯爽と席を立つ2人組み。

すっかり氷が溶けて不味くなったカクテルを飲んで思う。

これは多分悪い夢だ。

7・「こんな所で何やってんだよお前ら……」(後書き)

今回も読んでくださってありがとうございます。

お酒とタバコは二十歳を過ぎてから、でお願いします。(念のため)

8・「もうバレてる、なの」

あのバーに随分長居をしていたらしく、空気の籠った部屋から外に出るとすっかり陽が落ちていた。

「また甘いもの食べましょうね、サキちゃん」

「なの」

俺の後ろでは不良勇者とその仲間が稼ぎの山分けに興じている。元手に幾ら使ったか知らないが、アイスクリームなら気絶するくらい食べてもまだまだ余りそうだ。

「そろそろ飯にしないか？」

時刻は夕食の時間に差し掛かっている。辺りの食事処からは競い合うように魅惑的な匂いが撒き散らされていて、肉や魚が焼ける良い匂いや音はどれも旨そうだ。どこの店に入るか迷ったが、結局はサキお氣に入りの店に突撃する事になった。

「この店は色々な食べ物が揃ってる、なの」

案内されたのは明々とした松明が外観を照らす華やかな雰囲気のお店だった。流石に地元住民は良い店を知っているらしく既に結構な数の客が並んでいる。数分ほど待たされた俺達は店員の案内で奥のテーブル席へと案内された。

「美味しいな」

「おいしいですっ」

「口に合って良かった、なの」

俺は米と色々な具材を豪快に炒めた鉄鍋料理を頼んでみたのだが、食べてみると色んな味が混ざって面白い。明日もここに来ようかな。

……ああ、忘れてた。そういえば明日の予定について話し合っただっけ。

「明日王様に会う予定だったよな」

「そうなの。明日は謁見の日、なの」

こくりと頷いたサキは”サシミ”という生魚を美味そうに食べている。余計な心配だろうけど腹を壊さないのだろうか。

「でもそう簡単に会えるのかな。謁見は飛び入りの申請が通りにくいですし」

幸せそうにパスタを口に運んでいたリアが額にソースをつけながら割り込んできた。見た目はふざけているが言っていることは正しい。珍しく。

「最近是谁も会いたがらないから、すぐ会えそうなの」

どうやら相当人気が無いらしい。

それも当然かもしれない。さっきのバーのマスターにもちよこつと話を聞かせてもらっていたのだが、兵隊にずいぶん甘く好き勝手を許しているらしい。実際乱暴な兵士による厄介事があのバーでもよく有るそうだ。反面国民には厳しいらしく、突然税を重くして全て軍備に回すなんて暴挙も有ったらしい。

「やっぱり大分嫌われているみたいだな」

「みんなジャイノスのせい、なの」

黒幕、ねえ。そいつには会えるのか？

「あいつ王に四六時中くっついてるの。金魚のフン、なの」

顔でも思い出したのかサキの箸運びが乱暴になっている。主を脅かす敵だからか、ジャイノスってヤツが相当嫌いなようだ。

「まあ落ち着け。ところでその謁見にお前が出席しても大丈夫なのか？」

ほら、お前じいさんの側近だし顔割れてるだろう。城に入った途端襲われそうじゃん俺達まで、と主に自分を心配して言ってみる。

「そうになると、俺達だけで行ってくるってのが妥当だよな。気が乗らないけど」

「その心配は無いの」

なんで？ と首を傾げる俺が食べていたチャーハンに変な影が映った。何この丸い影。

「もうバレてる、なの」

「よう。ガキ共」

「あ」

俺の後ろでスキンヘッドが笑っていた。もうあれっきりの人だと思っただのに結構しつこい。さっきポーカーでコテンパンにされたのにまだ懲りないみたいだ、というか相当怒っている模様。

「これはひょっとしなくても面倒事になるのでは」

「いまさら、なの」

「すみませう、食後のデザートお願いしますっ」

一人だけ無関係ぶっているヤツがいるぞ、こら。

* * *

結論から言うと、サキがあいつを蹴散らした。

大体相手も悪い。チビだのガキだのさんざん叫びまわった挙句こっちに問答無用で殴りかかってきたのだ。かなり酔っ払っていたが、そんな事は沙汰に手心を加える理由には少しもならなかったようだ。

スイッチは、じいさんを侮辱するような言葉を大声で叫んだ事だろう。

『もういちど言ってみろ、なの』

凶悪な視線が男を射抜き店内が音を無くした。それでも意地だけでサキに突っかったのは賞賛に値するかもしれない。俺なら逃げる。

連中自慢の鎧もサキの刀の前には紙同然だった。しつこく絡む男に何気なく振り下ろされた一閃は、あるうことか鎧だけを両断して見せたのだ。いや、殺^やっちゃったと思ったのは俺だけではない筈だ。何度思い出しても男が二つに分かれていないのが不思議だった。

何より恐怖したのは体験した本人だろう。真っ青だった顔を憤怒の形相に変えて

『貴様ら絶対に覚えてろよ!』

という教科書どおりの捨て台詞と共に退散したあいつは、また登場する気だろうか。出来るだけ面倒なことにはしたくないんだけど……あまり深く悩んでも仕方がないか。

「ごちそうさます。美味しかったですっ」

手を合わせて行儀よく食後の挨拶をするコレは、ちっとも気にしていないようだし。

* * *

ほぼ同時刻。ここはハイグレイ王城、王の間。

「ふん」

おもしろくないという心境を全身で表すように、少年がただっ広い王の間でふんぞり返っていた。この国では誰よりも上に立つ人物である彼は、小さな頭に大きすぎる王冠を載せて大層ご立腹の様子だった。

またラインハルト卿の始末に失敗したのだ。

宣戦布告の書を寄越された時、王はこれに自分に対する挑戦だと受け取った。指揮を一手に引き受け、自分の優秀さを知らしめる良い機会だとこの一月の間追っ手を差し向け続けた。

しかし一向に成果が得られない。今日も役に立たない兵士長から言い訳ばかりの報告を聞かされるのだろう。

「も、申し訳ありませんっ！」

ごちん、と王剣の鞘で叩かれた男が鼻を押さえてうずくまる。最近王は会話開始後の数言で結果が判るようになってきているらしい。

もうすぐ聞く前に結果が解かるようになるかもしれない。

「こんの役立たず！　ばか！　お前なんてどっかいつちゃえっ！」

「しっ、失礼します！」

兵士長に格上げされたばかりだったこの男は、今回の失敗で雑用まで一気に降格することが決定している。背後から同情の視線を送っていた文官を押しつけるようにして転がり出て行った。

「どいつもこいつも、ボクの作戦をちつとも成功させない！」

誰も声を掛けられない程怒りを顕にするその様はただの駄々っ子にしか見えない。下手に機嫌を損ねれば待つのは暗い未来しかなく、家臣達は一様にこの王を恐れていた。ただ一人の男を除いて。

「ゲツゲツ、お静まりください、グレイス王」

両生類が声を持てばこんな感じになるのだろうか。まるで蛙がゲコゲコ鳴いているような人間離れした音が、王を振り向かせた。

「ジャイノスか。うん、少し取り乱してしまったな」

誰も手に負えない王を一言で鎮めてみせた男の名はジャイノス。現在の王の右腕を勤めており、執政全ての事実上の支配者だ。彼のことを、周囲の人間は揶揄と畏怖の念を込めて”ドールマスター”と呼ぶ。

というのも、何故か王はこの男に対してだけ耳を傾けるからだ。

他の者は首を捻るしかない。ガラスを金属片で引っかく音くらいに酷い声が王には心地よく聞こえるらしいのだが、周りの家臣達には全く理解出来ない。

そんな声を笑顔で受け止めた幼い王は、ジャイノスに先を促した。

「ゲ。実は王が懸念されている問題について報告がありました。ラインハルトを守護しているサキが、現在この王国内に潜入しているらしい、と」

「それは本当か！」

サキの名に王が色めき立ち、周りの人間も互いに顔を合わせる。

彼女を知らぬ者はこの場に居ない。かつての王の右腕ラインハルトの下に舞い降りた、”紅き守護天使”と称えられる少女剣士だ。失脚したラインハルトに今なお忠誠を誓う彼女は、彼を守る最大の壁として立ち塞がっている。煮え湯を飲まされた回数もう小さな両手でも追いつかないほどだった。

「それで、サキは今何処に？」

興奮気味にまくし立てる王を片手で制す。腰を下ろすのを待って、ジャイノスは玉座の間全体に響くように迷惑な声を張り上げた。

「ゲツゲツ、申し訳ございません。それは現在調査中でして、具体的な場所は申し上げられません。が、この状況を見逃す手はありません。守護の居ない今こそ絶好のタイミングと存じます。ここで一気にラインハルトに引導を渡すことを、強く進言いたします」

王側近の一人が隣と目配せした。相手も困惑の顔だった。

ここに居る誰もがラインハルトという男の重要さを知っている。

彼を殺してしまう事は、国の首を絞めることになりかねない。

不幸な事故で両親を亡くして半年余り。落ち込む幼き王に対し厳しくも真摯に仕えてきたラインハルト卿が反逆者として追放された時は、誰もが驚いた。王にどんな心変わりがあったのか、誰もその真相を知らない。ラインハルトの後釜となったジャイノスが怪しいと呟く者も居る。

だが誰も何も言わない。言えないのだ。ジャイノスの発言中に口を挟む事は、暗黙のうちにタブーになっていた。禁を破った数人が既に処刑されている今、とても迂闊なことは言えない。

皆が同じ事を考えていたのだろっ、誰も声を発しない。

「そうか、わかった」

本当に内容を理解しているのかと疑いたくなる程王はあっさりと了解する。満足そうに礼をしたジャイノスは「ゲッゲッ」と低く笑った。

夜の闇が深くなってゆく。耳障りな哄笑だけが、我が物顔で飛び回っていた。

9・「言ってる場合か！」

「なあ」

「どうしましたか？ レオンさん」

「お前はこういう事態を予測しなかったか？」

「あ、はは。ちょっとだけ思いました」

視線を泳がせるリアに同調するように、諦めの吐息をひとつ。

「リアっちに同じ、なの」

しれっとそんな答えを返すサキの額には、ベシッと裁きの拳をぶつけた。

「お前、とんでもない有名人らしいな」

”紅き守護天使”とかいう大層な二つ名持ちのそいつが、惚けた顔で反論する。

「向こうが勝手にそう呼んでいるだけなの。私はそんなこと知らない、なの」

お前が知らなくなっただけ向こうにはお前のファンが沢山居るんだよ。タダでさえ目立つ赤い髪を堂々と晒しているのに、お前自身がそんな有名人じゃ敵に発見してくれって言ってる様な物だろうが。

昨日は堂々と街中を歩いていたのに騒ぎが起きなかったので大丈夫だと思っていたんだが、サキのファンは兵士に限って圧倒的に多く存在していたらしい。今朝になって王に会うためノコノコと城に出向いた俺達は、次の瞬間には一斉に追われる身になっていた。

薄い壁を挟んだすぐ向こう側でまた罵声が通り過ぎていく。午前中に宿を出た俺達の頭上には既に太陽が昇りつめていた。

数に頼ったしらみつぶしの搜索は確実にその範囲を広げ、このままチンタラしていたら見つかるのは時間の問題だった。ただの様子見のつもりが見事に騒動の中心に巻き込まれた格好になっている。

まあそもそも計画がいい加減すぎるんだけど。

「大体、何なんだそのふざけた変装は！？」

今に至る要因の10割を占めるそれを詰問するが、本人にはちっとも反省の色が見えない。

「変装だなんてコソコソした作戦は性に合わない、なの」

髪のを少し変えて帽子を深く被っただけの変装に飽きが来たのか、サキは帽子すらポイと投げ捨ててしまった。

「そもそも、もうバレてるって昨日言った筈なの」

「今朝ノープロノープロ言っていたヤツは誰だ！」

「はいっ」

……そうか、お前だったな。

「一応聞くが、その根拠は？」

「皆私たちを探していて、今のお城にはもう殆ど兵士さんは居ない
はです。今が王様とよく話し合えるチャンスだと思っています。」

「……なるほど？」

ホントにこいつは頭が良いのか悪いのか良く解からないが、確かに
言われてみればその通り。

「でもどうやってそこまで行くんだよ？ 一歩でも外に出たら即見
つかるぞ？」

「私に任せてくださいっ」

リアが自信ありげに俺達の腕を取ると、何やら詠唱を始めた。俺
とは書式が異なる印を結んだ途端に光が溢れ思わず目を窄ませる。

こいつこんな事もできたんだっけ、と思う間に転移術が発動。気
付けば俺達は王城の屋上に立っていた。

* * *

代々受け継がれた武人の魂のような無骨な造りは、城というより
砦を思い起こさせる。余計な装飾がなく機能だけを求めた造りは王
の志向なのだろうか。12歳にしては渋すぎるから先代の趣味かも

しない。

騒がしさから一転した音の無い世界。静寂が支配するここハイグレイ王城は、確かにリアの言う通り兵士達の気配が希薄だった。

「ふつ、作戦通りなの」

しれつと嘘つくんじゃないよ。どう考えたってお前何も考えていなかっただろ。

「バカなこと言うヒマがあるならさっさと用件を済ませようぜ」

今回の目的は王様と一度話をするって事だよな？ さっきの騒ぎで俺とリアまでサキの仲間だつて知られた以上、今更簡単に事が運ぶとは思えないんだけど。

「あはは、なんとかなりますよ。」

「なの。レオっちは心配すぎ、なの」

その根拠をぜひ聞かせてもらいたい。こら二人とも、目を逸らすんじゃない。

「あの王様つて、お前から見てどんなヤツなんだ？ 確かグレイス四世つて名前だよな」

昨日聞いた話ではまだ12歳の子供で、ジャイノスつてヤツに唆されて色々問題起こしそうなんだっけ。これだけ聞くと、その子供はとても素直にお喋りに応じてくれそうにないんだけど。

「半年前に前王様が亡くなる前までは、主様が教育係みたいになつていた、なの。」

じいさんの護衛として常に傍に控えていたサキも、グレイスを良く知っている。我俣を言うことも確かにあったけれど、グレイスが最も信頼していたのはじいさんだったという。

「ジャイノスが来てから王は変わっちゃった、なの。」

やっぱりジャイノスか。昨日も言っていたけどサキはジャイノスを何とかすれば解決すると思っっているらしい。俺達の中で唯一事情を知るサキの意見だから、多分正しいのだろうけれど。

「王様とちゃんとお話をする為には、その人をどうにかして王様から離す必要がありますね」

そうだよな。ってコトは、それなりに面倒なコトになりそうだな、やっぱり。

* * *

屋上での会議に区切りが付いたところで、俺達はいよいよ本格的に探索を開始した。城の内部構造を知るサキが先頭に立ち、俺とリアはその小さな背中についてゆく。

「やっぱり、レオンさんが言った通りになりそうですね」

気配を殺して進む最中、何故か上機嫌なリアが俺にキラキラとし

た目を向けてきた。

「何が？」

「ほら、レオンさんが仰っていたじゃないですか。争いの影にはきつと、悪いことを企んでいる誰かが存在するって」

あー、ちよつと前にそんな戯言を言つたような気がする。

「？ 何の話、なの？」

ひそひそ話す俺のそばにサキが寄つてきた。どんな説明をすれば良いのか考えるのが面倒なので、適当に誤魔化すことにしよう。

「えつとですね、レオンさんは魔お」

しれつと妙なことを口走りそうになったリアの口を問答無用で塞いだ。

「むぐ？」

ちよつとこつちにおいで。とリアの首根っこを掴んでサキから距離をとる。

「今何を説明しようとしたか貴女」

「あ、あの。レオンさんそんな、恥ずかしいですっ」

何を言っているんだリア。お前が今何を想像したか知らないけど絶対それ違つよ。

「別に俺達は何者なのかなんて情報、今説明する必要ないよな？」

勇者であることを隠す必要は無いかもしれないが、俺は違う。この世界で魔王だとバレて得したことなんぞ一つも無かった。というか俺はそのせいで約1000年程酷い目に遭ったんだよ。

「サキちゃんならきつと大丈夫だと思いますけど」

まだそんなことを言うわからずやの頬をつまむ。

「にゃ、にゃにふんのれふか、」

「い・い・な？」

思い切り顔を近くして懇願する。祈りが通じたのかそれでようやく頷いてくれた。

「……………あう」

「なんだか二人だけで楽しそう、なの」

サキが何の話か知リたそうな顔をしていたが、これちつとも面白い話じゃないからな？

* * *

「ここにも居ないぞ」

第一候補の玉座の間、第二候補の王の寝室、第三候補の大広間（ここで食事が行われるらしい）すべて探したが、俺達は王らしき人物をまだ見つけられないでいた。兵は出払っているとはいえ最低限の人間は配置してある。見つければ厄介な展開になるのは間違いない。かといってここで逃げ帰ってはわざわざこの国に来た意味が無い。

「あとはどこが怪しいと思う？」

残る可能性は、城の関係者ならば誰でも入れるような場所しか残っていない。護衛の兵以外にも人が居る可能性が高いので危険度が上がるが、目的を達成するまではサキもリアも絶対に帰りたいがらないだろう。さつさと見つけて早く終わらせたいし、少しくらいのリスクは覚悟しよう。

いいか、お前ら絶対に騒ぎを起こすんじゃないぞ。いいな？

「それでは少々危険ですけど、それらしい部屋を一個一個探しましょうか」

3桁に達しそうな部屋数を誇る城だ、一体どれだけ時間が掛かるやら。

.....。

「ここにも居ない」

ってな具合に地道に丁度10部屋目を探し終えた時だった。

「うにゃーっ！！　なのっ」

早くもサキが音を上げた。その気持ちはすごく良く解る。もう帰りたい。

「これ以上こんな事してても埒が明かない、なのっ」

何を思ったかサキは躊躇無く物陰から飛び出した。抜刀してから言う。

「その男とっ捕まえて聞いてくる、なの」

何故かグツと親指を地に向けて爽やかに出て行った。

止めるなんて無理な相談だった。神速で忍び寄られて鋼鉄すら両断するであろう刃を目の前に突きつけられた男は、サキの出現に驚愕しつつもひと言ふた言喋ったかと思うとアッサリ首を切断された。

「最初っからこうすればよかった、なの」

「ちょっと待てよおいっ!？」

何だ、何故そんなに冷静なんだお前は！ 死んだ？ 死んでるだろアレ！？ 刀が間違はなく首を抜けたようにしか見えなかったんですけど！

騒ぎを起こすなってどれだけ口を酸っぱくして繰り返したと思っ
てんだお前は！

「王様朝から出かけてるらしいの」

そうか。そうなのか。ならいくら探しても見つかるわけ無いよな
残念無駄足かー、って

「言ってる場合か！」

渾身のノリツツコミにも、ぶんと刀の錆を落とす仕草をするこ
いつはちつとも意に介していない。

「つつん。……あ、だいじょうぶです。ちゃんと息していますから」

「当たり前だ、生きて……何で生きているんだよ？」

ハッキリと斬っちゃった現場を目撃した者としては、俄かには信じ
がたい。しかし改めて見てみると確かにそいつは死んでもいない
し首をちょん切られてもない。見る限り全くの無傷だった。

「わかりやすく言うとこの剣のおかげ、なの」

俺が訳わかんない、という顔をしていたからだろう。すらりとし
た刀身の背を手に乗せて、犯人が凶器を自慢げに見せてくれた。

サキの刀を間近で見るのはこれが初めてだった。臙姫おほろひめと名付けられた細身の刀は、曇り一つ見当たらない赤銀の輝きを静かにたたえている。良く見たら刀身には微かな意匠が掘り込まれていた。……なんだろうこれ。羽根、のように見えるけど違うかもしれない。

俺はそんなに武器には詳しくないが、見れば見るほどこれに斬られて無事である理由がわからない、それくらいにこの得物には迫力があつた。

「斬つたと見せかけて斬つていなかったのか？」

そうじゃないと説明がつかない。目で追えないほどの一閃だったから、見間違いの可能性なら否定はできないけれど。

「ん？ 思いつきり殺やつたなの」

頼むから不穏当な言い方をしないでほしい。

「詳しく説明すると長くなるし私も良く知らない、なの」

そこは威張るところじゃねえよとツツコむ前に、サキが臙姫を壁に突き立てた。

普通はどんなに良い刀であってもそんな事をすれば刃毀れの一つもあつて当然だ。なのにサキの刀は、まるで水の中に差し入れたような気楽さで音も無く壁を裂いてしまったのだ。とんでもない切れ味 いや、これは。

「この子の刀身には実体が無いの。マボロシ、なの」

神刀隴姫。製作年は不明、製作者も不明。ただ、これを創った者は人間ではないらしい。代々ラインハルト一族を守る刃の筆頭に貸し与えられていた業物だそうだ。

間近で観察しても実体があるようにしか見えないのだが、実体ある物が突然消える筈が無い。おもしろい武器だが相手からすれば厄介だろうな。俺もかなり戦^やりづらかったし。

ところで、刀身が幻だといっても確かにその刀にはモノを斬る力がある筈だ。まだ出会って間もない頃こいつは音も無く木を切断して見せたことがあるし、何より今目の前で壁を切り裂くというアホな事までやって見せたのだ。その切れ味なら人間が斬れない筈が無いのに、どうしてそこで倒れている人間は無事だったんだろう。

その答えはごくごく簡潔なものだった。

「この子はヘンなヤツなの。人間には当たらない様になっている、なの」

そう言われて昨日の酒場での出来事を思い出した。鎧だけ斬られて驚愕に目を剥いた男は確かに無傷だったのだ。一体どんな理屈なのか興味があつたが、サキは詳しい原理なんて知ろうともしていないらしい。変なヤツで片付けられてしまった隴姫にちょっとだけ同情した。

サキが言うには、この刀は神が授けた守るための力なのだそうだ。かつて魔王と呼ばれた存在が人間に恐怖を振りまいていた時代、迫り来る魔物の脅威から身を守る為に隴姫は生まれたいらしい。その力

が人同士の争いに使われない様、人間を斬れないという一種の封印を施したのだとか。

不思議なもので、そうすることによって対魔の力がより増幅され
たらしい。エク公とは違うけど、これも伝説レベルの武器なのかも
しれない。

「まさかとは思うけど、それ喋ったりしないよな？」

「？」

うん、違うならいいんだ。忘れてくれ。

「”人間”には効かないのか」

「斬られても体には一切傷がつかないの。その代わり、その人間に
流れている“気”を一時的に断ち切ることによって無力化できるの。
それがこの子の攻撃、なの」

腕を切り落とすように切れば腕が動かなくなり、首を切り落とす
ように切れば意識が落ちる。

「お前が普段遠慮なしに刀を振り回すのは、どうせ切れないって思
っているからなんだな？」

「そなの。だからレオンとこないだ遊んだ時も本気だった、なの」

強そうなのを見るとウズウズするの、などとマニアックな発言を

するサキに対し、今更ながら嫌な汗が流れた。

”人間には”。その言葉を聞いて、若干の不安が鎌首をもたげてニタツと笑う。

「……人間以外は？」

「ふつーに斬れる、なの」

「例えば魔族なんかは」

「効果バツグン地獄行確定、なの」

ですよねー。

改めて目の前が暗くなった。あの時サキの刃を避けられなかったら、俺は今頃死後の世界だったのか。

……いやいや落ち着け。目の前のこいつはこれでも仲間みたいなものだ。今更俺に向かって振り回すようなクレイジーな行動はしないよなそうだよな信じるぞ？ ……でも念のために言っておこう。

「あんな、サキさん。それも二度と俺に向かって振るんじゃないぞ」

「こんな風に？ なの」

「振るなって言っただろーが！！」

何気ないように見えて少しも手加減のない一閃をギリギリでかわ

した結果、万歳の格好でそのまま倒れる俺。

「大丈夫、痛くないの。最初は誰でも怖がるの」

コイツは一体何を言っているのか。どうやら今まで誰にも剣を避けられた事が無かったらしいサキは、怪しげな微笑を振りまきながら俺に歩み寄る。

「やめっ、止めるおいバカこのっ、うわっ!!」

* * *

.....。

10分後。俺には10時間くらいに感じられた洒落にならない運動が終了した。

「まあ過ぎたことを気にしてもしょうがない、なの」

前にも言ったが、それはきっと加害者が言っではいけない言葉だと思っんだ。

「いやいや、まさかレオンが魔族でしかも王さまだったなんて、な

の
」

結局正直に事情を話して事なきを得た（？）んだけど、棒読みでそんな事を言われると余計に腹が立つのは俺の度量が狭いからなのだろうか。

ふうっ、と一つ大きな息を吐く。

激しい運動と恐怖で暴れていた心臓がようやく落ち着いてきた。

結局サキは、俺が魔王だからといって即座に切りかかって来るような真似はしなかった。それどころか、

「ん、ごめんなさい、なの」

しおらしく謝るこの姿を見ると毒気も抜かれるわけで。

「もう解かったよ、だからもう俺に向かって振り回さないでくれよ」

「うん。……それにリアツちも、なの。まさか勇者様だったなんて、なの」

それはきつと誰にも解らなかったと思うから気にしないでいい。

「わ、様なんて付けないでよサキちゃん。お願いですから」

普段のリアを見ていると勇者という肩書きに若干の疑問の余地があるのだが、そこは黙っておいた。まるでついだとばかりにカミン

グアウトしたけどいいのか？ 一応秘密だったんじゃ。

「……ま、とにかく」

周囲をぐるりと見回して一言。

「これからどうするかだよな」

当たり前といえば当たり前なのだが、あれだけ騒いで兵士に見つからないというのは幾らなんでも虫が良すぎる。そこまで気の抜けた警備である訳もなく、俺達三人は大量の兵士に囲まれていた。

「結局こうなるんだよね……」

おおよそ前から数百人、後ろからも同程度。じわり、と円を形成しながら迫ってくる。逃げるところか出口すらみえない混雑具合だった。

「どうする？」

「どうしましょうか」

「取り合えずレオンを生贄にしてみる、なの」

「却下だッ！」

「か弱い女の子達に戦えっていけない筈、なの」

そのか弱いお前に殺されそうになった経験を持つ俺は、一体何て形容されればいいのだ。

「あーもう、とりあえず包囲を突破するぞ。いいな？」

異論は無いようなので「セーの」で息を合わせて一気に突破しようとした俺達。

しかし、予想外の人物がそれを遮った。

「そこまでだ！ 愚か者共め」

この場に似合わないソプラノ声。全ての視線を集めるそこには、これ以上ないってくらいに得意げな子供、もとい王の姿。

そして、背後には何故か拘束されたじいさんがいた。

「……もしかして私達、ピンチですか？」

返事をする気にもならなかった。

9・「言ってる場合か！」（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

私用のため、2日に1度更新というペースからずれてしまいましたが
本日投稿します。

次回投稿は27日の予定です。

10・「まあ、そうなんだけどさ」

「捕まっちゃいましたねー」

「捕まっちゃったのー」

「捕まっちゃった、なの」

「……」

「困りましたねー」

「困ったのー」

「困った、なの」

「……」

何だよこのゆるゆるな空気は。

こんな薄暗くてじめじめした不快指数満点な地下牢で、こんな能天気な会話とか。普段能気な人間のシリアスな一面が見れるかなー、なんて少しでも思った俺がバカだった。

当然のように奪われた武器はここにあるはずも無く、リアもサキも丸腰状態だ。魔法が使えるリアはまだしも、サキはただのお子様に格下げである。こんな状況でもてんで動じないとか何を考えているんだろう。

多分何も考えていないんだろうな。

「今なんか凄く失礼なこと言われた気がする、なの」

「気のせいだ」

あの後、俺達3人はじいさんを盾に抵抗するなと脅された。じいさんを守ることが何よりも大切だとするサキの強い願いに押されて、結局俺達は抵抗することなくこの牢屋に押し込められる道を選んだ。

「まさかあの状況でアンタが出てくるとは思わなかったよ」

「ほっほ、すまんのう」

こんな状況になっても相変わらず飄々としたじいさんだ。

「どちらにせよもう潮時じゃったからの、この機会に賭けてみようと思ったんじゃない。まさか君らにこんな迷惑をかけるとは思わなかったものでの。」

じいさんはそう言うと、若干沈んだ顔で今に至るまでを語り始めた。

* * *

一月以上も続いた暇潰しの付き合いも限界だった。味方は傷つき、もう戦う力が残っていない。これからどうするべきか判断に迷って

いたじいさんの潜む森に俺達が迷い込んだのは、丁度そんな時期だった。

「渡りに船とはまさにこのことじゃ、と神に感謝したよ」

サキを俺達に同行させるという決断には、殆ど迷いが無かったという。サキが王と会う事で事態が好転する切欠が掴めないかと期待していたらしい。

「どうして俺達を信用したんだ？ ふつつ少しは疑うと思うんだけど」

俺達がどんなヤツかも良く知らないのに。自分で言うのも変だが、リアはまだしも俺は無害そうな顔をしていると思わないんだけどな。一応魔族だし。

「サキが手放しで誰かを気に入るなど、サキに出会ってから初めての事じゃったからの」

「気に入るって、俺を？」

「リアっちも、なの」

どうして？ と尋ねるリアと俺二つの視線を感じたのか、サキが人差し指を顎に当てる。どうやら考えるポーズらしい。

「なんか、二人とも面白そうだったの」

何だその理由は。

「あ、私もそれわかります。お二人と一緒に居ると何故か、わくわくしますから」

リアも直感だけで生きているらしい。お前実はただの直感で魔王を連れ回そうとは思ったんじゃないだろうな。

「ふたりって、わし仲間はずれ？」

じいさんはちょっと黙っててくれ。

「面白そうって、それだけで仲間にしようって？」

「勿論、実力も凄そうって思ったの。私一人じゃいくらなんでも国にケンカ売れないの。でも二人が助けてくれるなら何とかなりそうって思った、なの」

「ケンカって、お前話し合いをするために此処に来たって言っていないかったか？」

「備えあれば、なの」

……まあ敵地に乗り込む以上そういう事態はありえるって考えるよな。見たところサキは対多には向かない能力だと思っし、わらわらと寄ってくる敵を一度に相手は出来ないのだろう。

「で、ろくに話も聞かないまま流されるように俺達はハイグレイに来た訳だが」

片隅でイジケていたじいさんに話の続きを促した。

「サキから離れるのはせいぜい1日か2日の予定じゃから大丈夫と思っただのじゃがの」

こういう期待は往々にして嫌な方へと転がるもので、唯一恐れていたことが起こってしまった。今まで最低3日は空いていた襲撃が今回に限り翌日に来たのだ。

「予想外の出来事じゃったが、大軍を目の前にして覚悟が決まってしまったよ」

派手に燃えてしまった森では結界もロクに作動せず、進軍の妨げになどならない。さほど時間も掛からずに見つかってしまった、結局投降する道を選んだのだという。

「どの道、今までの状態が長く続くとは思っていなかったしの。最後の会話に賭けてみようと思ったんじゃないよ。ジャイノスを盲信する王を上手く説得できるかどうかは判らんじゃが……」

大罪を犯した者に対する刑の執行は、王の御前で行われるしきたりなんだそうだ。そこでもう一度だけ、王と話す機会が与えられる。命を賭けたラストチャンス。それに全てを賭けようと言うのだ。

「そんな、危険すぎます。……こんな事考えたくないですが、もしも駄目だったら」

「うむ。その時は、別行動をとっていたサキに助けてもらおうかと思っておったんじゃないのう」

前言撤回、命賭ける気ゼロじゃねえか。

ここで会話は振り出しに戻る。

「困ったのー」

「困りましたねー」

「困った、なの」

「何か他人事のように心配しているけど、俺たち全員死刑っぽいよな」

……なんだこの沈黙は。

「やっぱりそう思います？」

「何の為にこんな所に入れられてると思ってるんだ。立派な罪人として認められたからこんな歓迎を受けてるんだろ？ 大反逆者ラインハルト卿に与した不届き者として」

「照れるのー」

ホメてねえよ。

「でもでも、悪い方にはかり考えても仕方が無いですよ」

良いこと言うね。流石は前向きで純真な勇者様だ。

微妙に視線が合っていないのがどーいう意味か知らないけどさ。

「ひゃっ!？」

何気なく肩に手を置いたことがそんなに意外だったのか、リアの体がそんな悲鳴と共にぴくんと震えた。大袈裟な反応に不可解なものを感じながらも、一応謝っておく。

「悪い、脅かすつもりは無かったんだ」

「あれ? ……あ、そっか……」

一人で驚いて一人で何やら納得していた。

「セクハラ大魔王、なの」

そういうことをぼそつと言っんじゃない。誰かに誤解されたらどうすんだ。

「あ、え、と違っんですつ。ごめんなさい変な声出しちゃって」

なんでもないんです、と笑うその表情はいつものリアだった。しかしあの驚き方はちよつとヘンだなと思う。俺が肩に手を置いたのがそんなに意外だったのだろうか。

「大丈夫か? 色々面倒ごとが重なって疲れているんじゃないか」

「大丈夫ですつ。牢屋なんて日常茶飯事ですから」

何処の世界に牢獄が日常にある勇者が居るのだというツッコミはもう面倒だからしない。結局押し切られたような形でうやむやになったリアの話は、そのまま忘れられていった。

* * *

頭を切り替え、これからの事を考えようとした頃。

随分と真面目な顔をしたじいさんが、俺とリアに笑いながら言った。

「こうなったのもわしの責任じゃからの。君らだけでも何とか助かるように、サキに付いてもらうつもりじゃ」

ワシという荷物さえなければ、脱出も不可能ではないじゃろ？
とじいさんが言う。

「まあ、そうなんだけどさ」

それだとじいさんを守る役が誰もいなくなる。

俺の隣にいる勇者を見ても、同じことが言えるか？　じいさん。

「わたしは残ります。このまま見ぬふりなんて出来ませんから。ぜひお手伝いさせてください」

時折見せるガンコな声でそう言われて、流石のじいさんも言葉に詰まる。再び俺の方を向いたじいさんには肩を竦めて見せるしかない。

「心配してくれるのは有難いけど、俺もリアも自分の身くらいは守れるつもりだ。説得が上手くいくか判らないけど、じいさんの思うようにやってみればいい。駄目だった時の逃げる手伝いくらいはしてやるよ」

ここまで首を突っ込んだんだ。今更結末だけ知らないというのも気分的にスッキリしないしさ。

「……ほっほ。サキ、本当にワシらは幸運じゃの」

「はい、なの」

じいさんは、サキと一緒に「ありがとう」と頭を下げた。

改めてそんなことをされると妙に照れくさいけど、そんなに悪い気もしない。

散々リアのことを勇者っぽくないと言っている自分も、相当変なヤツだと思う。自分の事ながら。

* * *

「そろそろ、明日に備えて休みませんか？」

ちよつと周りがるさいですけど、とリアが不満そうに牢の外を見ながら言う。

俺達が捕まったとの知らせは既に全軍に届いており、城の警備体制は未曾有の人口密度に膨れ上がっていた。ちよつと耳を澄ませば暑苦しい鎧同士の擦れる音が聞こえてくるような状態だ。そこまでしなくても逃げないってのにご苦労な事だ。

「おうおう、いい様だなてめえら」

「……………。またお前か。」

定時の見回りなのか、例のスキンヘッドが勝ち誇った笑みで近づいてきた。昨日サキが蹴散らして以来忘れていたが、ひよつとしたらサキの情報を知らせたのはこいつかもしれない。

ちよつとム力ついた。

「ここでただ座ってるのも飽きてきた、なの」

癪に障るそれを目の端に留めたサキが言う。

「んなこと言っただけでお前、何か策あるのかよ」

ぼん、と俺の肩をたたき紅きなんとか。

「おねがい、なの」

100%丸投げだった。

仕方ない、わざわざご登場頂いたコレに手伝ってもらったし
よう。

11・執行の日・1

死刑執行の日は、少し汗ばむくらいの快晴だった。

見事に晴れ渡った空は何処までも青く、さわやかな風が吹き抜けてゆく。こんな格好じゃなければきっと良い気分だったろう、と目の前で鈍い光を放っている手枷を見ながら思う。

幸い手枷に大した仕掛けは無さそうなので、すぐに抜け出せる筈だ。この手枷を壊して何時でも飛び出せるように軽く手首を捻って具合を確かめる。俺の背中には、スキンヘッドを操ってまんまと奪還したエク公と朧姫が出番を待っていた。

「貴方はお父上の何を見てきたのですか。ハイグレイの力は抑止力ですぞ、加害になど使って良いものでは無いのです！」

罪人として連行された俺達4人は、処刑の場である闘技場で仲良く身柄を拘束されている。そんな俺達の代表として発言を許されたかつての家臣が、王に最後の説得を試みていた。

しかし事態はのっけから不穏な空気に包まれている。王がじいさんの説得を途中で切り捨てたばかりか、この場で他国を征服すると宣言したのだ。

「これだけの力、眠らせておく父上が馬鹿だったんだ。僕はそんな無駄な事はしない。この武力があれば我が国は更なる発展を遂げられるのだ！」

「そのような暴挙で富を手に入れても人の心は集まりませぬ。いずれ更なる大きな暴力によって飲み込まれてしまいますぞ！」

「ばーか、ボクが負けるとでも思っているのか。ボクにかかれば世界征服だって簡単さ」

「ホントですか？」

「黙っていような、リア」

話がややこしくなるから。

「何と滑稽な。わたくしごときを捕らえるのに一月も要した貴方が、そつた易く世界をおさめられるとお思いか？」

「何だって」

切り返された言葉に今までの余裕顔が一気に沸騰した。本当のこの言われて怒っている姿は滑稽で面白いが、この駄々っ子は一応俺達の生殺与奪権を握っている人物でもある。あまり刺激するのはマズイのでは。

「ゲ。口が過ぎるようですな、ご老人」

ほら保護者が出てきた。

思えば声を聞くのは初めてだった。こんなふざけたカエルみたいな声一度聞いたら絶対に忘れないだろう。今まで王の後ろで影のように佇んでいたジャイノスは何かを囁いた後、大人しく下がった王の前に進み出た。

「お主に用はない！ 王に」

「ゲツゲツ、口を慎め。辞世の句を詠ませてやるとの王の心遣いを嘲笑いおって」

手を掲げた力エル男に従って周りの兵が一斉に弓を構え、矢の先をじいさんに向けて静止した。これ以上の発言は許さない、という無言の圧力。

それでもじいさんはそんな脅しに屈しない。あくまで王との対話を続けようとジャイノスを見無視して語り掛ける。例え幾つもの矢が襲い掛かるうとも、じいさんの隣には守護^{サキ}天使が控えているのだから。

「ふん、そんなもので主様は殺させない、なの」

たった一本の剣をどんな風に使えば全方向からの矢を殺せるのか。俺が手を貸すまでもなく、機械的に放たれた全ての矢が地面に叩き落された。

「ここまでだ。じいさん、下がっててくれ」

サキに続いて俺が一步進み出る。手枷など既にぶっ壊した。説得がすんなり行く訳が無いと覚悟していた通りの展開になっちまったが、そうなれば俺達も予定通りにコトを済ませてさっさとこの場を脱出しよう。

「待ってくれ」

しかし、そんな俺達をじいさんは片手を挙げて制止した。

「頼む、待ってくれ。ここを逃したらもうチャンスは無いかもしれないのじゃ」

「ゲツゲツ。幾らほざこうとも無駄だ。偉大なる王の考えは変わらぬわ。…… たった三人の護衛で何が出来る？」

拘束を破った俺達を見てもジャイノスにまるで驚いた様子は無く、それどころかますます高慢に笑う。呆れるくらい耳障りな音を撒き散らす男を、じいさんは正面から睨みつけた。

「もう一度言う。お主に用は無い、そこをどけ」

「……ゲツゲツ。殺せ。」

号令に従い、狙いを定める兵士の手が機械的に矢を放つ。シュルシュルシュルと空気の中を泳ぐ音が幾重にもなって一点に向かう。当然、サキがそんなものを見逃す筈も無く、地面に新たなゴミが増えたただけだが。

「じいさん、俺にちょっと任せてくれないか？」

再び進み出た俺が確認を取ると、憎憎しげにカエルを睨みつけていた顔が悔しげに下を向いた。諦め切れないのかもしれないが、これ以上この場での説得は無駄だ。あの子供王は恐らく意識を上から塗り替えられている状態。平たく言えば操り人形になっているのだから。

注意深く観察しても微かにしか感じられないからよっぽど上手く隠したんだろうが、俺の目は誤魔化せない。犯人は勿論あの変な声

のカエルなんだろう。巧みに王の意識をコントロールして、自分は最も王に近い立場に収まっている。カエルの狙いが国の乗っ取りなのかどうかは知らんが、どうであれコントロール下にある相手を説得しても徒労に終わるだけだ。

「……と思うんだけど、お前はと思う？ リア」

「わたしは意識操作の術を使えないのでハッキリとは解りませんが……でも、確かにあの王様の呼吸が不自然に見えます。息を吸うのも吐くのも、タイミングがあまりにも一定すぎて逆に違和感がありますね」

言われてみれば確かにその通りだった。傀儡師の見習いがよくやる初歩的な失敗だ。やっぱり思った通りで間違いないと思う。

「そんな事が……すまん、こんなことに巻き込んでしもつて」

俺達の話に愕然としつつも得心したのだろう。結果的に自らの行為が無駄になってしまったと思ったのか、申し訳なさそうに丸めた背中。それを俺がぺしっと小突いた。

「そんなもつすぐ死ぬみたいな顔するなつての。リア、サキ」

兵士共の輪が出来上がりつつあるのを横目に、背中を預けている2人に問う。

「結局これからどうする？ なの」

「喜べ、解かりやすいぞ」

と、カエルを指す。

「要するに、後はあいつをぶっ倒すだけだ」

そうすればきつとあの子供も目を覚ます。その後じいさんにたっぷり説教でもしてもらえばこの騒動も解決するだろう。

「その前に、この兵士さん達を何とかしないといけないですけどね」
リアがエク公を構えながら周りを見渡す。俺達はじいさんを囲むように背中を合わせた。

「俺は魔術師の連中を相手する。そっちの鎧着た暑苦しいのは任せていいな？」

「任された、なの」

「私はサキちゃんのサポートに回りますね」

頷きを返して言う。

「よし……行くぞ」

* * *

数多の呪詛が一斉に吐き出され、数多の剣が殺到した。

俺の向いた先からは幾多の炎が燃え盛る。しかし慌てる必要は無い。生まれた炎同士が融合して巨大な炎になるうとも、所詮は烏合の衆が生み出すモノ。全て受け止めたって痒くも無い。

「かつつか。温いわ、こんなチンケな火で俺を焼こうなんぞ片腹痛い」

俺が今までどれだけの炎を浴びせられてたと思ってるんだ。俺の鬼畜両親が繰り出す灼熱地獄に比べたら、こんなの焚き火にあたっている様なもの。

勝ち誇ったような顔をしていた魔術師どもの表情が凍る。もう遅いけどな。

「ひひひひっ!？」

魔術というのは要するに自分の体内に持つエネルギー、俺は魔力と呼んでいるが、それを体外に放出することで色々な現象を巻き起こすモノだ。その手順は千差万別で、例えばリアと俺が全く同じことをやろうと思ってもその過程は異なる。

一般に良く使われている方法は、自分が何か道具を使っているイメージをそのまま投影してしまうやり方だ。

例えば小さな火を起こしたいなら、火打ち石を打つようなイメージをしながら指を鳴らすと初心者結構出来るようになるらしい。生まれた火が指先から垂れ流れていた魔力に引火してしまい小火を起こして怒られる、なんて失敗はちよつと魔術師に話を聞けばいくらでも出てくるだろう。

精度や発動速度は練習と経験を積み重ねる程に上がってゆく。複雑なもの、特殊なもの程難しいが、成功すれば様々な現象を巻き起こすことが可能だ。例えば今俺がイメージする物は、鏡だ。

そっくりそのままお返しして差し上げるのだ。

「ぎゃああああっ!？」

俺の目の前で頑張って燃え盛っていた火を全て弾き返す。連中に当たる直前で地面に触れた炎の塊が火柱を巻き起こし、悲鳴もろとも吹き飛んでいった。

「余所見なんて随分ナメてる、なの」

火柱に目を奪われていた最前列の兵士は自分が斬られた事に気付く前に昏倒していた。目の前で仲間が倒れた2列目の兵士がサキを追おうとした直後に膝を屈する。

届いていない筈の刃が斬られていない筈の鎧を切断する。そうして次々と意識を刈り取る様は何度見ても不思議だ。大層な二つ名に恥じない力がありありと見せ付けるサキへ、さらに待ち構えていた兵士が一齐に剣を振り下ろしても結果は変わらない。

「100まんねん早い、なの」

別空間を跳躍するかのように淀みなく大群の間を駆け抜けるサキにたった一太刀すら浴びせられない。兵士が姿を認めて身構えた時

には、もう終わっているのだ。

「え？」

そう漏らした兵士が最後に見た光景は、既に最後列の兵士すらも同じ道を辿る姿だった。

「あの、私することないです」

戦場のど真ん中で、仕事の無かった勇者が一人で拗ねていたのは放っておこう。

12・執行の日・2（前書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

今回残酷表現に当たる（と思われる）部分が少しありますので、苦
手な方はご注意ください。

12・執行の日・2

「どうしたカエル野郎。お前の手下はこんなモンか？」

周りに這う兵士の畏怖の視線を感じながらカエル魔導師に言い放つ。子供王すら驚きに目を見張るその様はなかなか愉快だ。思い知ったらさっさと降参でもしなさいふはははは。

「ゲツゲツ！」

だというのに、ジャイノスだけはまるで堪えた様子が無かった。ざつくりと突きたてた己の杖を両手に持ちながら、あの気味の悪い声で詠唱を始めたのだ。

《 炎よ、万物を無に還す力の源よ。我に従いて目の前の仇にその力を示せ》

魔術師の周囲を覆うようにオレンジの炎が顕現し、一気にその場の気温が数度跳ね上がった。聞き慣れない呪文だが炎の攻撃魔術でも上位に位置する威力を持っているようだ。人間にこれだけの力を持っている魔術師はそうそう居ない筈だから、威張るだけの事はあるかもしれない。

「リア、出番だ」

「私ですか？ わかりました！」

今の所一番ヒマそうな勇者の背中を押すと、久しく出番の無かつ

た手元のエク公が嬉しそうに光を反射した。座布団があれば『ようやく出番か』とか憎まれ口を叩いているかもしれない。俺の言うままに進み出たリアは珍しくちよっと眉を吊り上げた。

「ジャイノスさん、こんな暑い日にそんな熱い魔法使っちゃダメですよ」

……その通りだけどさ。もうちよっと他に言うこと無いのかお前。

「ゲツゲツ、やかましいわオマケが。貴様からこんがりと刑を執行してやるわ」

「……おまけ？」

あ。

外見はニコニコしているリアの周りだけ温度が数度下がった気がした。

勇者として色々規格外な存在であるコイツは堪忍袋の短さも規格外な所がある。どうも正義の血が騒ぐのか、気に入らないヤツが相手だとその長さは特に短いみたいで。

「いやですねレオンさん。わたしぜんぜんちつともおこっていませんよ？」

怖いよその笑顔。

「ゲツゲツゲ！ 消し炭になるがよい！」

一気に膨れ上がったオレンジの光が壁となつて前へ進む。大量の熱が周りの兵士を巻き込む事など構いもせず、リアを一気に飲み込む勢いで迫ってきた。

対するリアは「いくよ、エクちゃん」と小さく呼びかけて上段の構えへと動く。掲げた刀身には既に輝く水が宿り、大上段から振り下ろされた聖剣が水のカーテンを描き出した。

オレンジ色の炎と淡く輝く水が正面から激突する。

リアの笑みを見た時点で予感していたけど、決着は想像以上にあつてなかった。

水と炎のぶつかり合いの結末は、水が蒸発してしまうか炎が消えるか。……だと思っていたのだけど、微かにじゅつと音をさせた水波動が炎の壁を真つ二つに引き裂いてしまったのだ。

「ゲゲツ!？」

核を打ち抜かれた炎の壁が霧散すると同時に、固まった力エルの杖の先端がポロリと落ちる。やるな、そこまで狙っていたらしい。

「ひどいです！ 私オマケじゃありませんっ」

ところでやっぱりそこに怒っていた。こいつの地雷は何処にあるのかいまいち解かり辛いのでうっかり踏んだらどうしようとか本気で思う。

「…………げう」

自らの杖を呆然と眺めるカエルの顔が不健康な色に変わる。元々不健康そうな色をしていた顔は面白いように蒼褪めていた。

* * *

「……小癪なマネを。貴様ら、何をしておる！ 早く賊共を殺さんか！」

暫し呆けていたジャイノスが、先端の無くなった杖を振り上げながら無様に声を張り上げる。

「どうした、殺せ、殺さんか！」

しかし誰もジャイノスの言葉に何の反応もしない。それどころか兵士たちの様子が明らかにおかしい。冷水をぶっ掛けられた後みたくに眼を見開いて近くの間を呼び、そして何事かを口にする。皆一様に驚いている様子なのだ。

「ううっ！……？ うああ……ッ」

突然の変化は奥の天覧席に鎮座していた子供にまで及んでいた。頭を抱えて苦しそうに蹲るその姿に、世話係らしきメイドが血相を変えてすっ飛んでくるのが見えた。

変化はそれだけじゃない。よくよく見れば、先程までどこか虚ろだった兵士たちの視線が随分ハッキリして、この人数に相応しい音

（例えば小さな囁きや、鎧の擦れる音）が聞こえる。それでようやく気付いたのだが、今までこの空間は不自然な程に静かだったのだ。あの杖が壊れた途端にこんな反応があるってコトは、この場の兵士全員がカエルの影響下にあったのかもしれない。

「やつぱりあのカエルさんが色々と悪さをしていたみたいです。でもこれできっと元通りになるはずですよ」

つまり、今リアが切り落とした杖が催眠魔術のキーだったってコトか。

確かに少し前までジャイノスから感じた力強さをもう殆ど感じない。これ以上何をする力も残っていないだろう。

「ゲ、静まれいっ！ 王の御前であるぞ！」

やがてハッキリ声を出す者も現れ、場の混乱は加速度的に大きくなってゆく。勢いは留まる事を知らず、このまま行けば皆が正気に戻るのも時間の問題だった。

このまま何事もなかったら、の話だったんだけど。

「おやおや、大失態じゃないの？」

地鳴りを巻き起こしそうだった程の勢いが嘘のように止まる。

新たに登場した人物は心底愉快そうに唇を歪めて、くすくすと笑っていた。

* * *

その人物がジャイノスよりも格上だということは、本人のみつともない動揺振りからも十分理解できた。リアより少し大きいくらいの背格好をした男が頭3つ分は大きいジャイノスを圧倒しているのだ。

鮮やかな金色の頭髮がクスクスと笑う度にゆらゆらと揺れる。それにすら怯えるようにジャイノスは一步後退し、喘ぐように相手を凝視した。

「いやー、ラッキーだったよね。冷やかしのつもりでちょっと寄ってみたけどなのに、こんなに面白いものが見られるなんて」

ふふふ、とまるで気の置けない友達との会話のように男は楽しそうに喋る。

「ねー、どうするの？ このままじゃお前、間違いなく殺されちゃうよ？」

殺される？ 内容を理解できない俺達の事は全く視界に入れずに、闖入者は金の髪を無造作にかきあげて深い闇色の瞳を窄ませた。

「まだ失敗などしておらぬ！」

「冗談言わないでよ、完全に力負けしていたじゃない。アレでしょ？ ” 宝玉 ” を開放する為の鍵を処理するって仕事だったよね？ まだ終わっていないかったんだ？ もうかれこれ何ヶ月経ってるか知ってる？ お前が非力なカエルだって事は知っているけど、流石にもう終わっているだろうと思っていたんだよ。けれど想像以上にお前は愚図だったんだねえ。ボクなら一日要らないような仕事をコレだけ時間掛けて失敗でした、じゃあもう言い訳できないよ。あーあ」

男は相手が口を挟もうとする所に被せて言葉を連発する。ジャイノスは反論すら出来ないまま脂汗をポタポタと垂らす事しかできないでいた。

「ぐ、うぬう」

「……おっとそんなに睨まないでよ。何のために出てきたと思っているのさ？」

今までジャイノスに注がれていた珍品を見るような目が今度はじいさんを捕える。まるで値踏みするようにその瞳が動いて、「ハッ」と馬鹿にするように口元を吊り上げた。

「こんなヨボ爺を始末するのにどれだけ手間掛けているんだか。仕方が無いから手伝ってあげたよ。感謝しなよ？」

手伝って、あげた？

何を言っているんだコイツ。突然出てきてべらべら喋りやがつて、あまつさえ訳のわからない事まで。不可解な言い回しをした男はもうじいさんに興味を無くしたのか再び視線がジャイノスへ向く。

「そうそう、鍵ってコレだけ？ 他には？」

ドサっという音と共に、じいさんの体が地面に崩れ落ちた。

「な
」

「あ、主様！？ どうしたなのっ！？」

血相を変えたサキとリアが駆け寄る、その様を眼の端に捕えて金髪は言う。

「なんだ、先代のグレイスを既に始末したのなら次で最後じゃん。だったら折角だから、ボクがお宝を運んで行ってあげるよ」

「ゲ！？ それでは困る！ それはワシが
」

運ぶんだ、とでも言うつもりだったのだろうか。抗議の意を持って背中に触れた瞬間、その腕が奇妙な方向に捻じ曲がった。

「ギャウ！？」

「汚い手で触るな」

金髪は一切手を触れていない。ただジャイノスの腕がさらに捻じ曲がりミシミシと音を立てて

「ゲっ……ぎゃあああああああ！？」

ボキン、という乾いた音をさせた腕は、まだその動きを止めない。既に折れた腕をさらに捻り上げ、そして。

「やめろ、止め」

「ばいばーい」

なにか、形容のし辛い音がした。鮮血が放射状に散らばって周囲を赤く染めた。

「ゲ……グ……」

「おー綺麗綺麗、どんな愚図でも血の色は紅いんだね。ボクこれ大好きな色なんだよね」

出血がシヨックか、腕を千切られたジャイノスはもう息を止めていた。壊れた人形のようにヒクツヒクツと痙攣する姿を呆然と見守る周りの誰かが「ひいっ」と引きつった悲鳴のようなものを漏らし、それを皮切りに恐怖が波のように広がってゆく。その様をくつく、と楽しそうに眺める金髪は友達に語りかけるように明るく和やかに言う。

「さて、ちょっとだけ時間を無駄にしちゃった。そうそう、君達も死んでくれる？　これって一応部外秘なんだよね」

地面に染み込むようにして消えていった金髪の言葉が引き金だったのだろうか。気付けば音が再び静止していた。俺達は狂気に染まった兵士に囲まれていた。

* * *

「っ、主様っ！ 目を開けてなのっ！ あるじさま！！」

「リア！ じいさんを連れてここから退くぞ、何処へでも良いから跳べ！」

振り下ろされた大剣を弾き返しながら叫ぶ。水の奔流を出現させて兵士たちを食い止めていたリアが、一際でかい波を打ち出して一気に押し流した。しかし間髪なく、際限なく凶刃は殺到する。

「っ、でも！ この人たちは……っく！」

襲い来る剣の嵐は先程までと威力も速度も段違いで、しかも完全に囲まれているのだ。一度に相手をする剣の数は十を超え、さらにそれごと潰す勢いで火炎が降り注ぐ。じいさんを庇いながらの状況で相手をするのはいくら何でも苦しかった。

「俺達が居なくなれば止まる！ このままの方が危険なんだよ！」

それに、と後ろを確認する。俺の背後で必死に呼びかけるサキの声色は焦燥を通り越して悲痛な響きすら混じっていた。

「……解かりました、掴まってください！」

大きく剣を薙ぎ払った後に出来た一瞬の安息の間に、リアが素早く術を完成させる。

まだ意識の戻らないじいさんを抱え俺達は光となって空を駆けた。

13・白天玉（にちてんぎょく）

辿りついたのはまるでボールを真ん中から切ったような、見慣れない様式の建物だった。リアが以前旅の拠点として使っていた物らしい。先頭に立つリアが手を触れた途端、何もなかった外壁に扉が出現した。

「こちらです。ついてきてください」

じいさんを抱えた俺は、余計な衝撃を加えないように気を遣いながらも早足でリアに従った。指されたベッドらしきスペースにそつと横たえる。相変わらず回復の兆しすら見せない主に、サキがそつと毛布を掛けた。

ただの回復魔術ならもう試したのだがそれでも全く効果が無く、しかし命を失ったわけではない。ただ目を覚まさないだけにしか見えないこの不可解な状態を、リアは理解しているらしい。

《 水よ 命の源たる母よ その御心で伏したる彼を救いたまえ 》

リアの体が淡く光を発し、徐々にじいさんに移ってゆく。薄い青色の幕が傷ついた身体を優しく包み込むと、若干じいさんの顔が柔らかくなった気がした。

……それでも、目を覚まさない。

「リアっち、主様はどうして目を覚まさない、なの？」

主を守る事が自分の生きる意味とまで言い切ったサキには、何よ

りもそれが気掛かりなのだろう。生きているという喜びから一転、その表情が翳ってゆく。

「えと、どうやって言ったらいいのかな」

一仕事終えたリアの表情も同様に暗かった。どうしたんだろう、あとは回復するまで時間に任せるしかないと思うのだけど。そう俺が口を挟むと、リアは申し訳なさそうに否定した。

「それが、少し違うんです。あのねサキちゃん、落ち着いて聞いてね」

リア曰く、今じいさんを蝕んでいるものはある種の呪いらしい。先程の治療ではその進行を止めるのが精一杯であり、このままでは永遠に眠り続けるしかないのだという。

「元通りに回復させるにはどうしたらいい、なの」

「それは……」

リアの言葉が詰まる。サキからの視線を受け止めていた瞳が迷いの色に変わった。それは多分、解決法を知らないんじゃないと言うかどうかを迷っている表情。

「言えよリア。どうして黙っているんだ？」

「お願いなの。主様を助けて、なの」

サキの真摯な瞳を受けて何故かリアが視線を逸らした。らしくない様子についつい口を挟んでしまう。ずっと何かを考えている様子

だったリアがようやく口を開いたのは、それから大分後の事だった。

* * *

「にちてんぎよく日天玉」という宝玉を耳にしたことがありますか？」

「それがあれば主様を救える、なの？」

「結論から言えばそうなんです。」

「何処にあるのか教えて欲しい、なの」

迷い無く答えを求める。方法があれば例え世界の果てにでも今すぐ向かうつもりなのだろう。真剣そのものの表情で提げた愛刀を握り締めたサキに、リアは首を振った。

「在る場所はわかります。でもその宝玉は使えないんです」

「壊れてるのか？」

「そうじゃないんですけど、それがなくなると多くの皆さんが困ってしまふんです」

リアは感情を抑えるように、少しずつ説明を始めた。

リア曰く、この世界は各国に点在する日天玉によって支えられているらしい。普段当たり前前に生活している全ての生物は知らない内にこの宝玉に守られていると言うのだ。

「宝玉は常に膨大なエネルギーを国内中に発しています。無限と云われるその力は例外なく国を栄えさせると伝えられていますし、事実その通りになっています」

日天玉と名付けられた宝玉から溢れ出るエネルギーは、その通称を”命の息吹”という。無限にしかも膨大に溢れ出るその力は何にも染まっていない”魔力の原型”と言えるものらしい。

個体差はあるものの生物は体内に魔力を持っている。魔術を全く扱えない子供も、海を自由に泳ぐ魚も、空を自由に飛ぶ鳥も例外なくそれは変わらない。魔術師でもない限り意識することは無いが、実は魔力は宿主の体を支えている重要な要素の一つだ。

仮に体内における魔力が枯渇、または過剰に蓄積するなどして極端に変化すると、身体に悪影響を及ぼす。軽い症状だとめまいや吐き気、発熱程度だが、重度となると命に関わる程の体内機能不全に陥る。

そして生物はただ生きているだけで魔力を徐々に消費していく。早くて1週間、遅くとも1月以内には体内の魔力が枯渇してしまう。その為どうしても魔力の補給が必要になってくる。

大多数の人間は魔力というものを良く知らない。当然、コントロールする方法も知らないので魔力を補給したくとも出来るわけがない。そんなあらゆる生物に魔力を補給し続けているのが、日天玉だ

というのだ。

「日天玉はあらゆる生物の体内に魔力を送り続けています。ですから普通に生活していれば魔力が枯渇する事ありません。ですが、もしも日天玉からの魔力供給が止まれば当然大変なことになってしまうのです」

黙って聞いていたが、ここまでの説明ではリアの言いたい事がまだよく解からない。

「じいさんを叩き起こすにはその宝玉の力が必要だって話だったよな？ 日天玉がどんなモノかって事は解ったけど、どうしてそれがじいさんの為に使えないんだ？ 膨大な力を発散し続けているのなら、少しくらい借りたって問題無さそうだけど」

「ラインハルト卿を治療する為に必要なモノは命の息吹ではなく、宝玉の内に眠っている”何か”なんです。私も実物を見た事は無いのですが、それを使えばどんな奇跡も実現すると言い伝えられています」

その奇跡にかかれば、最高の名医が匙を投げた人の命でさえ救う事が可能なのだという。言い換えると、じいさんの現状はそこまで厄介な状態らしい。

そして、宝玉を自在に扱えるのは”語り部”と呼ばれるごく一部の人間だけだそう。それは宝玉の内側にある“何か”を操る能力を持った人を指すらしい。

「その語り部つてのは、どこにいる？」

「……ごめんなさい、知らないんです。昔お世話になった方の中に一人だけ居たんですけれど、もう亡くなっしまいましたし……」

非常に珍しい能力で、大陸に一人居るかどうか位の割合らしい。

そういう人間はやはり特別視されるらしく、何らかの形で世に影響力を持つ。その為に争いに巻き込まれることも少なくないらしい。詳しくは話さなかったけれど、リアの知り合いもその口らしかった。

「もし、その語り部が居ない場合はどうしたらいいの、なの」

当然の質問に対する答えは、まだ「どうしようもない」と言われた方が良かったかもしれない。

語り部の力を持たない者が同じ奇跡を願おうとするなら、宝玉を壊して中身をむりやり引き出す手段しかないというリアは言ったのだ。

そうすれば願いは現実になるらしい。

サキの主は助かるのだ。

「……………」

ようやくリアが説明を逡巡した理由が掴めてきた。サキが今どうしても欲しいそれは、現状この国に住む何万という人の命を壊さないと手に入れないモノなのだ。平和を守りたいリアと、主を救

いたいサキ。このままだと確実にどちらかが折れるしなくなってしまう。

「その宝玉はサキの国にある1つだけじゃなく、他の国にもあるんだろ？ 探せば1つくらい誰も使っていないヤツが在るんじゃないのか」

「……ごめんなさい、私を知る宝玉は全てその国を守っている大切なものなんです」

「だったら宝玉なんて使わないで、アイツ締め上げればそれで解決しないのか？ 呪いってアイツの仕業だろ？ あの妙な金髪」

「普通の術には確かにそういう解決法もあるんですけど、呪いというものは効果が無い場合が殆どなんです」

忌々しい事に、呪いの類というのは完成した時点で術者の手を離れる。つまりサキの主をこんな目に合わせた張本人をここに強制連行して、『さあ元に戻しやがれ』と迫っても意味が無い場合が殆どだ。しかも呪いは術者が死んでも効果が持続するという特性まで持っている。

半ば予想できた返事だったが、そうなるといよいよ手詰まりだ。

かといってじいさんをこのままにするのも後味が悪いけれど……。

「……ごめんなの、リアっち」

それは覚悟を感じさせる声だった。サキは愛刀を鳴らして立ち上がり、不安定だった瞳には強い光が戻っていた。

「サキ？」

「思い出したの」

サキが言う。まだ主が座に就いていた頃、宝玉の間に一度だけ立ち入ったことがあると。

「王国の丁度中心に誰もが無断で入れない地下神殿があるの。きっとそこにあるモノが宝玉、なの」

「待つてサキちゃん、気持ち解かります。だけどそれは……それはハイグレイ王国みんなが困る事になっちゃうんだよ。王国のことを誰よりも考えているラインハルト卿ならきつと、」

「だって！……だって、私には主様を守ることしかない、なの」

激しく髪を揺らしたサキがまるで叫ぶようにして遮った。しかしすぐに、まるで空気が抜けた人形のようにその語尾は弱々しく、震える。

「私は、主様を助きたい、なの」

自分を確認するように、奮い立たせるように。サキは少し掠れた声でそう言った。

13・白天玉（にちてんぎょく）（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

なんか説明ばかりの回になってしまいました。文章は一応見直してはいるのですが変なところが（いつも以上に）あるかもしれせん。
もし発見されたら指摘してもらえると嬉しいです。

14・サキ（前書き）

こんにちは。読んでくださってありがとうございます。

今回は、最後のシーン以外はサキ視点になっています。

この話は番外編にするべきか悩んだのですが、結局はそのまま掲載する事にしました。

14・サキ

私は、自分の言葉が嫌いだった。発言の最後に付けるそれは私にとって一種のまじないであり、護身術だった。

もうハッキリと顔も思い出せないが、両親は私が6歳になった頃に他界してしまった。私の生まれはハイグレイン領の端にある寂れた山村で、一人で厳しい世の中に放り出された子供が生きる為には他人の庇護がどうしても必要だった。

意外な事に、私の引き取り手はすぐに見つかった。余分な人口は排除される事も珍しくない村なので、それは幸運だったかもしれない。しかし私にとってそんな事は気休めにもならないほど現実は厳しかった。

引き取り手に名乗りを上げたのは村唯一の商人だった。まだ大人の腰程の上背しかなかった私は、使用人として雨の日も風の日も雪の日も数キロはなれた小川までの水汲みを一日の労働として課せられていた。

水汲みの量は一家一日の消費量だから、自分の小さな手に持てる桶で水瓶を満たすには数十回も往復する必要があった。運ぶ水の量は幼く非力な私にとってあまりにも多すぎた。それこそ死ぬ気で運んでいたものの、ただでさえ栄養不足で発育が悪かった私に大人でも悲鳴を上げる重労働が勤まる筈が無かった。

夜が明ける前から始めた水汲みが日が落ちてでも終わらない。不甲

斐ないその様に怒った商人は様々な罰を私に与えた。

一番辛かった罰は、その日の食事を取り上げられたことだった。最後の一滴まで搾り出した体はボロ雑巾のようになくたなのに、それを癒す栄養が与えられないのだ。一家が寝静まった後、寒さに身体を震わせながら桶を手にして小川まで行き、飢えを凌ごうと浴びるようにして水を飲んだ。辺りに生えている草にも手を伸ばし、考える前に口に運んだ。

やつのことで戻ってきた後は、少しでも体力を回復する為に眠ろうとした。でも私に貸し与えられた衣服は囚人が着るようなボロキレで、外気の冷たさがそのまま肌に突き刺さる。栄養がまるで足りない体は震えが止まらず、そんな日は碌に眠ることすら出来なかった。

次に辛かったのは商人一家から受けた悪意だった。少しずつ身体が成長し、次第に課せられた量をこなせるようになってきた私を面白くないと思った子供が、何かにつけて暴力を振るうようになったのだ。いつの間にか私はストレスのはけ口としての役割も兼任させられていたらしい。

「あ、の。桶を返して……ください」

少しでも機嫌を損ねたら執拗な罰が繰り返された。ただの悪戯で取り上げられた桶を返してもらっただけでも神経を削りに削る。どんなに頑張っても結局は暴力を振るわれるが、気分次第で回数が減ることはあった。ただただ謝り続け、ただただ耐え忍ぶことが一番効果的だと知ってから、亀のように身を硬くして無言で頭を下げるようになった。

それで暫くは何とかやり過ごせていたが、ある日唐突に商人の息子

「お前、たまに“の”とか“なの”って最後につけるよな」

と、そんなことを言ってきた。自分では気付かなかったが、それは私の両親の故郷特有の言葉で、この村では私しか言わないことをそいつが指摘したのだ。

「そ、そんなこと、ない……」

直感的に新たな暴力の口実にされると悟って思わず否定する。それが狂った耳には強い口答えに聞こえたらしい。私の体がくの字になって吹っ飛んだ。

「口の利き方には気を付けろって言っただろうが！……まあいい、卑しい生まれのお前にその訛りはお似合いだよ。いいな、これからはその卑しい喋り方をしろ」

「ゲホっ、っハ……は、はい」

左の頬を思い切り叩かれる。すっかり色褪せた私の髪がぱつと乱れて血のように舞った。

「もう一度」

「っ……。はい……なの」

「はい」の後に「なの」をつけるかどうかなんて判らないけれど、そんな事を知らない子供には言い訳など通用しない。無理矢理でも何でも、言われた通りにするしかなかった。

それから暫くはそのことで何度も口実を与えてしまった。無言を貫けばよかった今までとは違って受け答えを強要されるので、どうしても隙が多くなってしまふ。赤黒く変色するまで肌を叩かれ、その度に自分の迂闊さを呪うしか無かった。憂さを晴らしてスッキリした顔の商人達が離れていくまで、地獄のような時間はずっと続いた。

* * *

そんな生活が数年続いたが、不思議と死にはしなかった。水場に写る私の姿は今思えば酷いものだったし、どうしても栄養が不足がちだった為に背は大して伸びなかったけれど、それでも私は生き続けていた。

それなりに成長した私が12歳になった（これは適当に数えたものなのだが）ある日。いつものように水汲みに向かおうとした私に商人から声が掛かった。

「おい」

「はい、なの」

「今日は隣の町まで商売に出て行く。お前も連れて行くから用意をしろ」

「え……？ 私がですか」

はつと身を硬くする。あまりに突然な話に気をとられて言付けに疑問を返してしまったのだ。私はこれから来るであろう衝撃に目を瞑った。しかし、驚く事に不問にされた。

「その薄汚れた顔を良く洗っておくように。半刻後に出る」

ぐるぐる巡る疑問の答えを得ないままに街に連れてこられた私は、首に犬のような拘束輪を付けられた。その輪から太い鎖が伸びて自由が利かない格好で繋がれる。周りには似たような格好をさせられた年の近い子供が虚ろな目を泳がせていた。私はようやく自分の運命を悟った。

これから自分は売られるのだと理解しても、私は全く動揺しなかった。自分が見てきた世界以上の地獄が想像できなかったから、なのかもしれない。

どんな所に売られようとなるようにしなければならない。そう考えていた私は、自分の運命が変わる重大な局面だというのに他人事のように奴隷が売られてゆく様を眺めていた。

真つ赤な髪と瞳が珍しい色だったことから、私は商人の思惑以上に高く売れたらしい。

最初で最後に見せた商人の笑みも、私に何の感動も与えなかった。

ぐいと引かれた鎖に引っ張られて首が痛い。私を買った男は舐めるように体を眺め回してきた。

「これからお前にはオレの店で働いてもらう……が、その前に俺がキツチリと仕込んでやる。きひひひひつ、今夜から覚悟しておけよ」

耳障りな声は何を言っているのか半分も理解できていないが、言う事は決まっていた。

「これから、よろしく願います、なの」

「あ？　ヘンな言葉遣いしやがるなお前、まあいいや。それも個性ってやつだろ……う？」

不意に鎖から掛かる圧力が消えうせる。

視線を上げると、私の髪よりも濃く黒ずんだ飛沫が男の腕から噴出していた。

「があっあああああ！！？　な……なん、うがッ！？」

悲鳴を上げる口に力強い拳がめり込んで、男は無理矢理に沈黙させられる。

「……貴様ら、覚悟は出来ておるんじやろうなっ！？」

白髪交じりの男が発した辺りを揺るがす声が合図だった。人身売買を取り締まる銀灰色の鎧を纏った兵が一斉になだれ込む。

ここから本当の、私にとっての運命の变革が始まった。

* * *

「サキ、昨日は良く眠れたかの」

「サキ、今日の昼飯は美味かったの」

「サキ、よく出来たな。よしよし」

どれもが初めての言葉だった。

髪は櫛で梳かして手入れをするものだと思った。

服は重ねて着るものだと思った。

食事は日に三度もあることが普通なのだと思った。

眠る時は暖かいベッドを使うことを知った。

私の間違った常識を知る度に初老の男は悲しそうな顔をして、それから優しく本当のことを教えてくれた。

ラインハルトと名乗ったこの人は忙しい身でいつも仕事の道具を片手に歩き回っている程なのだが、館で私に会う度に立ち止まって声を掛けてきた。

「サキ、元気かの？」

「……はい、なの」

今思えば過去の自分を叱りつけたくなるが、当時の自分はまだラインハルト卿という人間を信用できないでいた。私が発した言葉は恐れに満ちてたどどしく、擦れていた。何が原因でこの夢が醒めてしまうか解からないと考えていた。未だに残る体中の痣が呪いの様に私に囁いてきて、いつか酷いことをされるという確信に似た予感がどうしても消えなかったのだ。

そんな思いを抱いていた私がとうとうそれに耐えられなくなったある日、私は竜の洞窟に飛び込むような覚悟で仕事欲しいと嘆願した。自分に出来ることならどんな事だってするからと必死だった。何か主の役に立つ事をしなければいつか酷い目に遭わされるという強迫観念を植え付けられていた私は、近くの森で薪を拾ってくるという役目を仰せつかって心底ホッとした。

「危険は無いはずじゃが、気をつけるんじゃぞ」

また初めての言葉をかけられてどう反応していいか困ってしまう。そんな私の心情を知ってか知らずか、私の頭を優しく撫でて主は外出していった。

* * *

森の入り口には館から歩いて30分程で到着した。そこには手頃な枝が一带に転がっていたので作業はとても楽だった。私の腕はあつという間に薪で一杯になり、結局一時間ほどで頼まれた量を終えてしまった。

「あれ……もういいの、かな」

あまりに楽すぎて、これでは満足してもらえないのではないかと、という不安が湧き上がってきた私は、もっと立派な成果を得ようと森の奥へと踏み込んでしまう。去り際に主から「決して森の奥に踏み込んではいけない」と注意されていたのに、成果を得ることに必死だった私はその禁を破ってしまったのだ。

果たして森の奥には薪の代わりに瑞々しい果物が沢山生っていた。これを持って帰れば許してもらえる、などと考えていた。冷静に考えれば許すも何もないのだけれど、私は染み付いた恐怖に突き動かされて夢中で果物を集めていた。そうして帰ろうとしたときに愕然とする。歩いてきたはずの道が何処にもなくなっていたのだ。

必死で帰り道を思い出そうとしても一向に解からない。ついには陽も落ちて途方にくれた私は、とうとうしゃがみ込んで顔を膝に埋めた。自分に残された選択肢は、夜が明けるのを待つ事しかなくなってしまったのだ。

「あ……あ……」

とんでもない事をしてしまったと蒼褪めた。自分の事などどうでもいいが、主が必要とした薪を届けることが出来なかったのだ。もう駄目だ、と思った。今までの分を取り戻すかのように恐ろしい罰を与えられるだろう。とうとう夢から醒める時が来たのだと、真剣

にそう思った。重厚な音で唸る鞭の音が、下種な笑いを浮かべながら拳を振るわれる感触が、打ち捨てられボロボロになった身体を自分で抱きしめながら必死に生きていた時の事が、私の頭の中に鮮やかすぎるほどくつきりと甦った。

「あ……うあああつ……」

どんな罰を与えられるのだろう。夢にも思い描けなかった今の生活の中で少しずつ小さくなってきていた火種の燻りだったものが、一気に燃え上がるように私の思考を全て多い尽くして

「おお、ここにおったか。心配したぞ」

だから、このとき聞いた言葉を、私はとても現実とは思えなかった。

「大丈夫かの？ おお、こんなに体が冷えて……寒かったじやろう？」

私の小さな体をすっぽりと覆うように抱き寄せて暖めてくれたその温度が、どれだけ私を変えたのか。それはとても言い表す事なんて出来ないだろう。

「おお、おお。もう大丈夫じゃよ。大丈夫じゃからな」

目が痛い。頬が熱い。喉が震える。不意にぽろっと飛び出た涙がまるで今まで感情に蓋をしていた物だったかのように、言い表せな

気持ちが後から後から溢れて止まらなくなってしまった。

ぼろぼろぼろ。

「よしよし。大丈夫じゃ。大丈夫じゃからな。」

ひくつ、と喉が引きつる。止まらない。止められない。

「つく。あつ。うああ」

もう一度ぎゅっと強く抱きしめてくれた主様の腕の中で、私は生まれて初めて声の出るままに泣いていた。私という人間はこの時に生まれたのだと、今でもそう思っている。

* * *

主様は、本当に優しい。

「サキの髪も目も鮮やかな紅色じゃな。紅は命の色じゃ。確かに珍しいが決して不吉な色ではないぞ、わしの好きな色でもあるしの」

「背の低さを気にしておるのか？ わしは可愛らしくて好きじゃがの」

「生まれが卑しい？ 誰じゃいそんな事を言いおった間抜けは。わしが成敗してくれる」

こんな風に私の嫌いなモノ一つ一つを、上から力強く塗り替えて

くれた。中でも私の心に響いたのはこんな言葉だった。

「サキは東方の生まれかの？ その言葉遣いは遙か東に住む刀使いの特徴によく似ていての。誇り高く目の覚めるような剣技の使い手が数多く生まれておる有名な国なんじゃよ」

未だに抜けきらなかった“なの”という癖。私にとって悪夢への引き金だったそれを主は誇れと教えてくれた。自分が言葉を口にするたびに嫌でも思い出してしまう悪夢を、私の主が塗りつぶしてくれたのだ。

「刀使い、……なの？」

そして、主様の何気ない言葉が切っ掛けで私は剣を習うことを決めた。主様は最初良い顔をしなかったが、私の気持ちは変わらなかった。修行を続けて剣技を修め、目の前のこの人を命ある限り守ろう。それは唐突に浮んだ考えだったが、私はその為に生きてきたのだとすら思える程、思いは強くなる一方だった。

苛烈を極めると脅されて入門した道場の修業だけれど、私には何が大変なのかよく解からなかった。同門の皆が悲鳴を上げる荒行の数々も真剣を用いた手合わせも、自分の過去と比べれば遊びに等しいとすら感じた。

とても幸運だった事に、私には剣の才能が備わっていたらしい。師範に「動体視力と反応速度は誰よりも優れている」と評された私は、剣を始めて一年余りで道場の誰よりも強くなっていた。

その頃から少しずつ主様の仕事を手伝わせてもらえるようになった。がむしゃらに務めを果たし続けた私は、気がつけば主様の護衛

として筆頭に立っていた。朧姫を貸し与えられたのはその頃で、それを使いこなす為に私はまた修行に明け暮れた。

主様は私が剣を持つことに不安を感じていたらしいが、それでも私が務めを果たす度に褒めてくれた。それが嬉しかった。

私が傷を負うと主様はとても悲しい顔をした。それが悲しかった。

だから、私は何処までも強くなろうとした。主様を守りたいという思いは絶対に消えない。でも悲しい思いもさせたくない。全てを満たす為には、私は強くなるしかなかった。

がむしやらに強さを求めた私は、やがて人々から賞賛されるような成果を何度もあげた。そんな私が王の目に留まり、ある日王直属の護衛兵にならないかと誘われた。誰から見ても破格の待遇で、十人が十人とも選ぶだろうその道を、私は断った。

当たり前の事だ。

私にとっての第一は主様を守ることであり、全てにおいて優先されるべき大切な決意だ。私の力は、私に生を与えてくれた主様に捧げよう。何があっても、例え命に代えてでも守りぬこうと、そう決めたから。それはずっと続く、私の存在意義をかけた誓いなのだから。

* * *

サキが行く手に立つリアを正面から見据える。じつと何かを語るような目で対峙したまま、どれくらいの時間が経ったのだろう。

「国の人たち皆を困らせる様な事をして、許されるとは思わないの。ううん、主様もきっとそんなこと許してくれないと思う、なの」

「だったら、ね、サキちゃん。私も」

「でも、このまま治せなかったら、主様はどうなる、なの」

もしもこのままじいさんの眼を覚ます事が出来なかったら？ ずっとこのまま現状維持なのか、いつかは目を覚ますのか、それとも

答えは、リアの表情で解かかってしまった。

部屋を飛び出したサキが、慌てて駆け寄ったリアの腕をすり抜けて外に出る。追って外へ出た俺達の視界が辛うじて捕えたサキの姿は、来た時と同じく光を纏まとって空の彼方にあつた。

これからどうするべきなのだろう。今にも泣きだしてしまいそうだったあいつの顔を見て、俺は判らなくなってしまった。

15・宝玉の間・1

ハイグレイ王城の後方に広がる森は、神聖な森だと教えられる。この国を守る神様がそこに居るからみだりに入ってはいけないと、子供の頃から口煩く教えられる。

ひっそりと広がるそこには何もない。美しい花も、甘い実をつける木も、日々の糧になる動物も何もない。虫すら禄に見かけない。

誰からも見向きされない只あるだけの森だが、その周囲は国に厳重に監視されている。深く立ち入るほど凶悪になる罠が至るところに張り巡らされ、森の周囲は常に交代で見回りが立つ。ただ、見回りの兵士ですら何故その森を守る必要があるのかを知らない。そして何故か誰もその事に疑問を持ったりしない。

サキはラインハルトの腹心として一度だけ案内されたことがある。万一の時は何を差し置いても、例えば王を見殺しにしてもこの神殿を死守せよと教えられた。

この場所の存在はごくごく一部の人間しか知らないので決して口外してはならない、とも教えられた。そう教えたラインハルトが見たことが無いほど厳しい表情をしていたのを、サキは良く覚えている。

入り口は小さい。知らなければ只の岩の集まりにしか見えないその隙間に体を潜り込ませると、中には驚くほど広い空間が待っている。長く伸びた天然の通路には仄かな明かりがポツポツと並んで辺りを薄暗く照らしていた。

「……………」

サキの目が訝しげに動く。入り口から近いこの通路には蜘蛛の糸のような細さの封がされているはずだった。それを切れば仕掛けが発動し、侵入者を更なる地下奥深くに叩き落とし、そのまま朽ち果てるまで封印してしまう筈だ。しかし床に罠が発動した形跡は無く、ただ糸が切れている。

（誰かが先に侵入している？ 罠を解除して？）

サキはそう考えたところで、あの忌々しい金髪の男が何やら楽しげに吐いていた言葉を思い出した。

サキの思考が一気にして沸騰する。駆け出したくなる衝動そのままに足を動かそうとしたが、グツと歯を噛み締めてそれを耐えた。

（……ダメだ。落ち着け）

背中に感じる壁にぴたりと身を寄せ、息を吸う。一瞬止める。ゆっくりと時間をかけてそれを吐き出す。

もう一度。

息を吸う。サキは落ち着けと自らに言い聞かせながら、細心の注意を払って息を吐いた。

まるで存在を消してしまうかのように息を潜める。目蓋の瞬きすら聞こえてしまいそうなのこの無音の空間は、王ですら勝手に立ち入る事が許されない場所なのだ。サキがここに存在する理由なんてど

れだけ探しても見つからない。

ゆえに、バレたらそこまで。

サキの過ちは、すなわちラインハルトその人の過失となる。いくら「自分が勝手にやったこと」だと主張した所で、主が責任を問われる事は避けられない。絶対に、絶対に失敗など許されない。

一瞬ごとに血を巡らせる鼓動の音がうるさい。じわりと滲んだ汗を拭った。愛刀を握る手が肝心な時に滑らないように、そつと握りなおす。ただの兵士の見張りならばここまでの緊張などしない。この守護者は、人間ではないのだ。

サキの耳と肌が相手の気配を捉えた。圧倒的な威圧感を受けて勝手に震えだそうとする体を押さえ込み、気配を殺す。

（大丈夫、まだバレていない）

強すぎる気配ゆえに感じ取ることは容易だった。歪な十字に伸びる薄暗い通路の奥で、そいつが周囲に目を光らせているのが手に取るように解かる。きよろきよろと首を左右に振った守護者が後ろを向いたところで、サキはそつと壁の隙間から姿を確認した。

深紅の翼を持つ偉大なる竜族 レッドドラゴンだ。

その口から放たれる業火を受けて、形を留めていられるモノなど存在しないだろう。

宝玉が守護者に護られているという噂は聞いたことがある。しかしそれは御伽噺であり、今時子供ですら話半分にしか聞いていない

ような他愛も無い作り話でしかないと、サキは今の今まで思っていた。

それが本当のことで、しかもその守護者が竜族だったなんて。

ドラゴン種は極めて希少な存在だ。冒険者と呼ばれる人々が一生に一度その姿を目に出来るかどうかというレベルであり、それが叶ったならばとてもない幸運だという。

（私は今とんでもなく不幸だけれど）

目指す宝玉はすぐ近くにある筈なのに、幸運のそれが邪魔をする。とんだ幸運のシンボルだ、と愚痴った後でやっぱりそれは間違っていないのだろうな、と情けなくサキは笑った。私欲の為に宝玉を壊そうとする行為は誰が考えても悪なのだから。

今ならまだ引き返せるかもしれない。ここを諦め、血眼になって他の方法を見出す方が良いのかもしれない。仮にこの宝玉を首尾よく手に入れたとして、その後待つものは主との永遠の別離に他ならない。取り返しのつかない大罪を犯した人間が傍にいられる理由など無いのだから。

でも、他の方法を探していたのでは間に合わないとサキ自身が反論する。主の容態を考えると残りの時間は恐らく数日もない。そしてその間に代替案が浮ぶとはとても思えない。

主を守る事こそが全て。それはあの日からずっと変わらぬ誓いだ。例え世界中から非難されようと構わない。絶対に主様を救ってみせる。サキは握りすぎて白くなった手をさすり、感覚を確かめた。

グルルルル……

底冷えするような低いひと鳴きを残して、重苦しい足音を残しながら気配が遠ざかってゆく。もう一度手の感触を確かめながらその姿を見送った。

(……アレを倒すのはまず無理と考えたほうがいい)

なんとかやり過ごし、隙を突いて目的を達成するしかない。サキはここを諦め他のルートを探そうと一步を慎重に踏み出した。

うわあああああー!!

耳に痛いほど響いた叫び声に身を竦ませたのは、丁度そのときだった。

* * *

(ん……う……?)

唐突に目を覚まして辺りをぼんやりと見回していたグレイスが「何かおかしい」と考えたのは、妙に視界が暗いからだだった。今はまだ日中の筈なのにどうしてこんなに薄暗いのだろう。そう考えた王は近くに控えているはずの侍女に声を掛ける。しかし返事は一向に返ってこない。

「マリン？ 何処に」

「わっ！！」

「うわあああああ！！！」

突然背後から声がして、こんなに動くのかと驚くほど心臓が跳ねて絶叫が木霊する。反射的に背後を振り向いた視線の先で、金髪の男がケタケタと腹を抱えて笑っていた。

「な、な……」

「やあ、やっと目が覚めたかい？」

「ふざけるな！ 私を誰だと知ってのことか！？」

「知ってるよ。最近即位したばかりの、蛙に操られていたお飾りだつてコトもね」

闇目の少年が唇を歪めて笑っている。たったそれだけの仕草に何故か心臓を掴まれる様な悪寒を感じて、グレイスは一歩後退した。

「まあまあ、そんなに怖がらないでよ。言うことさえ聞いてくれたら命なんて取らないからさ。ね？ ほら笑ってよ？」

男の不可解な言葉に不快感が一層強くなる。少しも笑う気になれず、笑うのは恐怖に震える膝だけだ。グレイスはそれでも恐れを意地だけで押さえ込んで、状況を確認しようと周りを見渡した。

そして、ここが何処なのかを理解して愕然とする。

「ここは……ここは宝玉の間ではないか！ 貴様、何故こんな所に！？」

「うん、その宝玉をいただきに参りました」

あまりに平然とした口調で返されて、グレイスはぽかんと口を開けてしまった。

（どうして僕もコイツもこんな所にいる？ 今まで僕は何をしていたんだ？ 闘技場で何かをやるうとしていた気がするけれど……闘技場？ 僕はどうしてそんな場所に……）

グレイスの思考は混乱するばかりで一つの仮説にすら辿り着けない。何故が苦しくなるほどの胸騒ぎが収まらず、白い顔を青くしてごくりとツバを飲み込んだ。

「混乱している所悪いんだけどさ、そろそろコレ開放してくれない？」

少しも焦っていない口ぶりで急かしてくる相手の目は、絶対的な優位に立つ者そのものだ。だけど、だからといってハイそうですかと頷いて良いワケがない。

「馬鹿な事を！ これを失った国は遠からず滅びの地になる。誰にも渡す訳にいかないのは当然だ！」

「知ってるよ。でも君の国がどうなるうとも、そんなコトはどうでも良いじゃないか」

「ふざけるな！ 話にならない、即刻ここから立ち去れ！！」

「そっか、うーん残念だなあ」

少しも残念がつているように見えない気配で「仕方がないなあ」と男はグレイスに歩み寄ろうとする。反射的に後ずさった姿が可笑しいのか、くつく、と金の髪を揺らした。

「平和的に話し合いで解決するように言われているんだ。もう一度だけチャンスをあげるからさ。早くしなよ？」

（気圧されている事を相手に悟られてはダメだ。例えハツタリを使おうとも、弱みを見せたらお終いだ）

そう口煩く自分に教えた教育係を思い出す。ラインハルト 彼ならこの局面を如何にして切り抜けるだろう、と。

（ そうだ、宝玉の守護竜は何処にいる？）

誰彼構わず襲い掛かる凶悪な赤竜だがこの状況なら贅沢も言っていられない。上手くけしかけられたらどんな相手だって

「無駄だと言っているのに、どうして解らないの？」

必死に頭を動かしていたグレイスが闇色の目を見た途端、動きが止まる。

彼の記憶が続いているのはここまでだった。

* * *

「あーあ、やっちゃった。だって仕方無いよね、この子強情なんだもん」

光を失った瞳を覗き込みながら男はつまらなそうに鼻を鳴らした。

「ま、いいか。意識を奪っただけで変な痕跡は残らないし。許容範囲内だよな。……ったく、サクツとやっちゃえば簡単なのにさ」

サキがようやくその場に辿り付いたのは、あの男が宝玉を台座から取り上げようとしていた時だった。嚴重に封印されているはずのそれを難なく拾い上げた男は、白く輝く球状の宝物を満足そうに眺めて「さて」と呟いた。

「……そのキミ。何か用かな？」

反射的にサキの体に緊張が走る。

（気配は消えているはず、なのに）

「そんな熱い視線を無視できるほどボクは鈍感じゃないんでね。隠れていないで出ておいでよ？」

「……ふん」

もとよりコイツから逃げるつもりは毛ほども無い。サキは一瞬だ

け目を瞑り、意識を戦闘用に塗り替えた。

「じょーとー、なの」

キツチリ決着をつけてやる。

そんな決意を胸に鎧を親指で弾いて、サキは舞台へと降り立った。

16・宝玉の間・2

初撃はナイフのような武器に防がれた。それがただのナイフでない事は、愛刀が貫通しなかった事からも明白だ。少なくとも何らかの祝福を受けたマジックアイテムの類でなければ、そのナイフごと相手を刈り取るはずだった。

数個の蜀台のみが闇を照らすこの薄暗い空間で、相手をはつきりと見定める事は困難だ。受けに回るよりも攻めきった方が有利に傾くと判断したサキは、受け止められた反動をもともせず二撃目を放つ。

キィ……ン、と澄み切った音を残しながら双方の刃が影を残して踊る。リーチで勝るサキと手数で上回る相手の攻防は互角の状況が続いた。

「驚いたよ」

ひとつ大きな金属音を残して男が後退る。サキとの打ち合いで傷んだナイフをくるりと回したかと思うと、まるで手品のように無傷のナイフが現れた。

「こんな使い手がまだ居たんだね、ここのセキュリティも満更穴だらけじゃ無いらしい」

どうやらサキのことを警護の人間だと勘違いしているようだが、正してやる義理などない。早くケリをつけないと、本当の守護者に見つかってしまうのはまずい。非常にまずい。

「うん？」

攻防の最中、2人よりも背の高い蜀台越しに対面した。普通はそれを避けて剣筋を走らせる。しかし、サキが持つ神刀にとつてそれは障害にならない。眼の錯覚かと思わせるほどの一瞬刀身が掻き消え、蜀台をすり抜けた刃が相手の死角を突く。男の笑みが初めて驚きに変わった。

（よし、利き腕を奪った！）

ポタツ……ポタツ。

「……え」

驚きに眼を見張ったのは、サキも同じ。

虚を突いた筈だったが浅かった。驚嘆すべき反応速度だが、問題はそこじゃない。刃が微かに捕えた腕から鮮血が流れている。人間には当たらないはずの朧姫が腕を裂いたのだ。

（つまり、こいつは。）

「……ク、クク」

モンスター、にしてはあまりにも人間に酷似している。

相手の正体について思い巡らせていたサキに冷たい汗が浮かぶ。金の頭髮と闇のように暗い瞳、人に比べやや小さい耳を持つ姿は、太古に絶滅した筈の伝説の存在と余りにも似ていたのだ。

「鬼……鬼族、なの」

返事をしない相手はぺろりと自らの鮮血を舐め取り、ニィツと笑った。

「？ ……っ!？」

不気味な笑みに眉を寄せるよりも早く、サキの体に異変が生じる。

「……な、どうなっている、の」

何が起こったのか理解できなかった。何もされていない筈なのに体が重い。見えない何かに急速に自由を奪われている。

（こんなの、まるで呪い 呪い？）

「ま、さか」

まるで水中に放り込まれたようだった。サキにとって周りのスピードが倍に感じる程に動きを封じられた今、相手の動きは絶望的なまでに速かった。防ぐよりも速く鬼の手がサキの首を鷲掴む。

「っぐ！ ……!！」

コイツは本当に、ただ相手を睨むだけで術を完成させるのか。

それ以外の可能性が、幾ら考えても思いつかない。普通は大なり小なり何かアクションをしなければ魔術だろうと呪いだだろうと成立しないはずなのに

ググッ……

掴まれたサキの体が徐々に上へと吊られてゆく。伸びきった脚が苦しげにもがく様を鬼がせせら笑い、鋭く伸びた牙が口から覗いた。

「……っ……ぐうっ！」

「苦しいかい？ 苦しいだろう？ 今楽にしてあげるからね？」

相手の右手に持つナイフが不吉に光る。

狂気を宿した闇色の瞳で覗かれると、まるで心を直接踏みにじられるような酷くおぞましい錯覚に襲われる。頸動脈を圧迫され続けるサキの握力が徐々に失われてゆき、柄を握る手が震えだした。

「ぐ……っ……うあああああっ！」

それでもサキは必死に掻き集めた力で刀を振った。掴まれた腕を狙った刃はあまりにもトリイ速度だったけれど、なんとか首は解放された。

クラリとする意識を無理矢理取り戻す。呼吸の度に血の巡りが戻ってゆく。掴まれた喉が焼けるように痛くなっていた。

「ゲホッ、ツハ、はあっ、はあっ………！？」

空気を求めるサキの腹に爪先がめり込む。

悲鳴すら上げる間もなく、サキは数メートル背後の壁に叩きつけ

られた。

「こんなモノじゃ済まなさない……さあ、立ちなよ」

「……く……う」

（ 強い。 ）

近接戦闘においても互角、さらにあの呪いのような能力は厄介どころの話ではない。相手を見るだけで術を完成させるなんて非常識も甚だしいが、そんな反則技も鬼族なら有り得る話だ。実在自体が疑わしい魔眼の類も、鬼という伝説の存在なら持つていても不思議ではない。

（ 本当に、不幸だ。 ）

ドラゴンをやり過ごしたかと思えば鬼が居た、なんて三流以下のひどいストーリーだ。

「……ひとつ、聞きたい、なの」

この状況を打破する手段を、サキは一つしか持つていない。それを実行する前に、どうしても確かめておかねばならない事があった。

サキが問う。極力冷静に努めた声色は、怒りが滲むのを隠せなかった。目の前の相手をどうしても許せそうになかったから。

「……無理だね。もうあのジジイは助からないよ。本当さ、零れた水が二度と返らないのと同じようにね」

果たして得た回答は最悪だったけれど、その言葉に安心感を得たのも事実だった。

「そう……わかった、なの」

何故なら、これで心置き無く戦えるから。

不倶戴天の敵というべきコイツを、許さずに済むから。

（今はただ、コイツを、倒す。）

サキは体を沈み込ませるようにして、ゆっくりと構えを変えた。

* * *

呼と吸。人は息を吸って吐く。全ての人間が行うこの動作は、やり方によって身体に多大な影響を与える。”呼吸法”と呼ばれるその技術は一般人の生活の中にも存在し、例えば痛みを和らげる効果などは良く知られているが、身体の機能を一時的に活性化させる方法も存在する。

その効果の程は微々たるものに過ぎないのだが、ある物と併用するとその効果が爆発的に跳ね上がる事は、あまり知られていない。

それは体内を常に巡っているもので、サキは”気”と呼んでいる。錬度によるが、気を併用する事により呼吸法は一気にその威力を増す。高めれば高めるほどにまだ先が有り、どこまでも強化できるように思えるほどだ。

今、サキの身体は目の前の鬼によって動きを半分程に封じられている。解除法は解からない。仮に解かったとしても本当に相手が睨むだけで発動する能力ならば、すぐさま同じ目に遭わされる。この状態をひっくり返す方法は一つしかない。

そう、身体をそれ以上に強化してやれば良いだけの話だ。呪いを跳ね返せるほどに。

「……ッ、ッ……」

微かに漏れ響く吐息の間隔が短くなってゆく。サキを囲む空気が歪んで見えるようになる。まだだ、まだ足りない。強化の度合いは”段”で数えるのだが、今までに実践で経験した強化限界は参段^{さん}まで。

恐らく今必要な段数は 最低でも伍^ご。

肆^し段以上をまだ試した事がないのは、肉体の限界を超えた途端に体内に収まり切らない力が激痛を引き起こすからだ。限界を超えた途端に襲い掛かる激痛は耐えがたい苦痛だった。

（けれど、例えば身体が壊れたって構わない。私の大切な人を傷つけられた、その痛みに比べたら大した事じゃない）

目の前の敵を、絶対に許さない。

必ず主様を救ってみせる。

その決意が力となってサキの体内に宿ってゆく。

「ッ……」

肆段。時の速さがマイナスからプラスに転じた。

痛い。

手も腕も胴体も脚も関係なく全部が痛い。体中が一斉に悲鳴をあげている。気を抜けばすぐにでも気絶してしまいそうだ。

それでも止める訳にはいかない。

歯を食いしばる。余計な事は何も考えるな。

（アイツを倒す。アイツを倒す。アイツをぶっ倒す！）

最後に大きく吸い込んで、気合と共に一気に吐き出す！！

「カクゴしやがれっ、なのッ！！！」

伍の段に到達した身体が、踏み出した足が、痛みに絶叫するのを黙殺して敵の傍まで一足で跳ぶ。地脈を縮めるが如くの速度は完全

に相手知覚を凌駕した。

相手の動きが突然跳ね上がれば対応も当然遅れる。短剣で防ぐより早く自らの体をつき抜けた刃を見て、恐怖に顔を歪める鬼の様を、サキには確認する余裕があった。

「なん……だつて……」

何の躊躇もなく赤銀が胴体から抜けた。

サキが手にする神刀のもう一つの名は”赤羽根”^{あかはね}。その異名が示すように噴出した鮮血が羽根のように辺りに舞い、周囲を赤く染めた。

何の手応えも感じなくなっているサキの腕が刃の血を振り払い、微かな水音が静寂の中に生まれて、また静かになる。鬼の体がゆっくりと、ゆっくりと沈んでゆく。

「バ、力な。こんな、」

ことり、と地面に音をたてて転がった宝玉をサキが拾う。

主の命ともいうべきそれを両手でそっと包む。

まるで放心したようにじっと見詰めたまま、サキは強く強く宝物を握りしめた。

「せ……て。破……しない……と……」

だからサキには聞こえていない。限界を超えて全てを運動能力強化に充てたツケは聴覚にまで障害をもたらし、さらにこれで終わったという油断が、泣きたくなくなるほどホツとした心理が、この後とるべき行動を遅らせた。

「消え……諸とも……終わ……」

鬼の体が地面に染み込むように、呪詛を残して消えてゆく。

仰向けの唇が微かに動いても、もう声は出ない。

「……ッ」

サキの身体が揺れを感じた。絶望のリズムを刻む足音の主がここに向かっていて。何よりも恐れていた守護者が、罪人を裁きに来たのだ。

ニイツ

相手を陥れたことに満足した、狂った笑みを浮かべながら、最後まで残っていた唇は溶けるように消えていった。

16・宝玉の間・2（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

続きは明日、大体昼前後には更新できるようにがんばります。

17・結末（前書き）

今回は前半に残酷描写があります。苦手な方はご注意ください。

17・結末

咆哮は、唯一の出口のすぐ向こうにまで迫っていた。

出口はひとつ。正面から戦って勝てる相手だとは到底思えない。まださっきの鬼のほうが可愛く思える程に、サキは壁越しのプレッシャーを感じていた。戦おうにも擦り切れた雑巾のような体はもう満足に動かない。逃げる道も無い。隠れる所なんてあるわけ無いけれど、それでも探す。

（もう少しでゴールなのに。もう少しで、主様が助かるというのに）

グオオオオオアアアアアアア！！！！！！！！

サキの胴より何倍も太い四肢で地面を揺らしながら、火竜が姿を表した。

足が、竦む。

剣を取ってから今まで、どんな相手にも恐怖を感じなかったのに。サキの歯がカチカチと乾いた音を立てる。

「あ……っ……」

守護者が罪人を裁きに來たのだ。

真紅の鱗を持つ巨竜がサキの姿を認め、凄まじい怒気を叩きつけてくる。

サキの顔ほどもある目玉が凝視しているのは、手にした宝玉。

刀身が情けなく震える。全身が疲労と激痛でまともに動かない。

「ぐッ」

出口は守護者の背後にのみ。

手にした宝玉を隠すように胸に抱き、激痛を噛み殺してサキが駆ける。

（主様の命は、もう残り少ない。絶対にこの宝玉の力が必要）

ガアアアアアアアッ！！！！！！

薄暗かった空間が眩い白色で染まる。突如膨れ上がったとんでもない熱量が全身に襲い掛かる。サキの体が意識から離れてのたうち回った。

「っ！！！！」

直撃したら骨も残らないような炎が目の前で炸裂したのだ。人の形が保たれているだけでも驚きだったのだろう。竜がそのぎよろつとした目を不満げに細め、巨体をゆっくりとサキに向かって進めた。

ヒッ……ヒッ……ヒッ……

喉を焼かれ、奇妙な音にも聞こえる苦悶の声は、サキ自身にももう聞こえていない。

うつ伏せに倒れこんだまま、宝玉を守るように握り締めた。

「が、の」

右の手が地面の石畳に爪を立てる。

「おが、い、だ」

体を起こそうとして、力を入れた左腕が動かない。

「おねが、だから、主を、助、わたし、どう、
いい」

色が失われたサキの視界に映る守護者が、獲物を冷徹に睨みつける。縫るように口にした言葉を聞き入れる筈も無く、その巨体は止まらない。

悪夢のように巨大な足が、サキの体に押し掛かった。

「が、あああああああッ」

跳ねた手からことり、と宝玉が転がり出てしまう。必死に手を伸ばしても届かない所にまで行ってしまった。

（死ぬ。ここで終わってしまったら、何よりも大切な人が、死

んでしまう)

「だめ……なのっ」

ギツと噛み締めた口から鮮血が流れる。ぽろぽろと涙を流しながら、必死に巨大な足から逃れようと足掻く。

「
けて。 、誰、 け……て」

グアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ふと、サキが体に感じていた絶望的な戒めが消失した。直後に巨体が地面を揺るがす音がして、パラパラと小石が辺りに降り注いだ。

「……トカゲ相手に、こんなにもム力ついたのは初めてだ」

霞む視線の先に、別れたはずの人物が居た。酷く傷ついた体を抱き起こし、不機嫌そうな顔でサキを見つめていた。

「
、 ?」

「いい。ちょっと大人しくしてろよ」

魔王がそつと眼前に手をかざすと、そのままサキの意識は彼方へと沈んでいった。

* * *

「だいじょうぶです。あとは安静にしていれば数日で回復するはず
す」

リアは心底ホッとした顔でサキの体に毛布をかけた。あの後すぐ
この隠れ家に戻ってきた俺は何もやっていないように見えたかもし
れないが、とにかく疲れている。

ああ、まったく。コイツらと一緒にだとトラブルが大挙して押し寄
せてくるのは絶対に気のせいじゃない、と声を大にして言うが誰も
聴いちゃいない。

「なんでドラゴンなんかと戦わなくちゃならなかったんだ。まったく
……」

酷い目に遭った。レッドドラゴンなんて久しぶりに見た。耐久力
がハンパない相手なのでやり過ぎそうと思ったのに、良く見たらサ
キが足元に居たのだ。何であんなのが居たのか良く解らないけど、
俺が不幸だったという事は間違いない。

「きっと宝玉を守ってる守護者だったんですよ。それにしても大変
そうでしたね」

「そう思っんなら前も手伝えよ！？ 何であんな厄介なのと俺一人で遊ばなくちゃならないんだよ！！」

見てみるよホラ此処、と有り得ない火力で焦がされた服の端をプ
ラプラさせて見せてもちっともリアには効果がないので諦めるしか
ない、というか泣き寝入りに近い。

まあ、リアはじいさんの看病をずっと続けていたから仕方ないん
だけだよ。

「それで何処に飛ばしちゃったんですか？ サキちゃんをこんな酷
い目に合わせたんですから、ちゃんとお置きしたんですよね？」

「あのトカゲ、そんな遠くに飛ばされるほど軟な体してねえっつー
の」

ムカムカした感情を込めた右ストレートをあの竜にブチ込んで、
通路から強制的に退かしたに過ぎない。まともに相手してたら冗談
抜きで決着前に日が暮れる。その間サキを放置する訳にもいかない
だろ？

恐らくあの地下神殿の端辺りで目を回している筈だけど、もう二
度と行く予定は無いからどーでも良い。ツノ折っておいたし。

目の前で横たわるサキが大事そうに握り締めている宝玉が、光を
反射した。眠っているにも関わらず、まるで硬直したように握って
離さないの、そのままにしてある。

くー、と息を立てて眠るその姿は平和そのものだが、体はリアが

悲鳴を上げる程ボロボロだった。

「まったく、無茶しやがって」

サキが誰と戦っていたのか、おおその予想はつく。

じいさんを助けるためにドラゴンとまで戦っているとは思わなかったけど。

ついでに言うと、何故か柱の影に転がっていたオマケも想定外だった。

「なありア、あの子供はどうなってる？」

思い切り無視しても良かったのだが、発見してしまったので仕方なくサキと一緒に運んだ人物はグレイス？世。少し前まで闘技場で偉そうにしていた子供だ。

「誰が子供だ無礼者」

「なんだ生きてたのか」

少し前に意識を取り戻していたグレイスが、小憎らしい視線を向けながら部屋に入ってきた。リアの治療が一段落したらしい。

「ふん、大体の事情はリア殿に聞いたよ。僕がじいを……ラインハルトを処刑しようとしていたと聞かされたときは驚いたけどさ」

その姿はやっぱ小さいけれど、グレイスが見せた表情は前までのイメージと随分違う。本当に辛そうに目を伏せるその姿は、自分

の事だけを考えて喚き散らす子供とは別人のように思えた。何か変なモノでも食べたんだろうか。

「あの男は、サキが？」

「金髪ヤローのことを言っているのなら、本当のところは俺も知らん。サキに後で聞いたらいい。俺が見たのは馬鹿でかい火竜だけだ」

俺がその場に到着した時にはもうヤツの姿は見えず、サキは竜の下敷きになっていた。だから今は想像するしかないけれど、サキの状態を見る限り、かなり激しいやりとりがあっただろう。

グレイスは一つ大きな息を吐いて、目を瞑った。

「やつぱさ、僕の責任なんだろうね」

俯き加減で呟くグレイス。何が？ と尋ねるとしぼんだ声色が続いた。

「じいやサキがこんな目に遭ったことだよ。僕がもつとしっかりしていればと思うと情けないよ。……それで、じいを救うには宝^{それ}玉が必要なんだ？」

「ええそうなんです。でも」

「いいよ」

何でもないように言い切られたせいで、理解するまで大分時間が掛かった。理解しても意味がわからなかったけど。

「いろいろ小言ばかりでうるさいヤツだけど、居なかつたら物足りないしね」

「でも、それでは宝玉が」

「さつきリア殿はこの宝玉を壊して使うつて言っていたけれど、それ間違いだから。僕なら壊す必要なんて無いからね。今のじいを治す程度の奇跡なら、宝玉に影響があってもせいぜい暫く国に渡る息吹が微減するくらいだと思う。リア殿が進行を食い止めていてくれたお陰だよ、ありがとう」

「「え？」」

ハモツた。

「僕は“語り部”だからね」

まるで悪戯に成功したような得意気な顔をして、グレイスは笑ったのだった。

17・結末（後書き）

次話で一章完結になります。
明日の昼頃までに投稿したいとおもいます。

18・「終わりだ終わり。もう次へ行こうぜ」

臉をゆつくりと開いたじいさんに飛びつくように抱きついたサキは、まだ回復しきっていない体も手伝って、腕の中ですぐに眠りに落ちてしまった。全ての緊張が解けたお陰か、その寝顔は先程までと違ってとても柔らかなものになっていた。

少し照れた風に「ほっほ」と笑って大切そうにサキの頭を撫でるじいさんは、事情を知って驚いた様子だったけれど、皆が無事だったことが何よりだと喜んでいた。

暫くして落ち着いた面々を前に、グレイスとじいさんは「是非御礼がしたい」と城に俺達を招待してくれた。結果的に国を救ったことになってるらしい俺達に、王様からお褒めの言葉や褒美を頂戴する話が持ちあがったらしい。けれど堅苦しいのは嫌いだし肝心なところで何もしていなかったので、辞退した。

結局は立場上断れないサキだけが盛大に祭り上げられ、そのことで文句を言われたのは、まあ余談だろう。

* * *

「サキちゃんには深く考えないで、って言われたんですけど……」

サキを称える式典の歓声が微かに聞こえる城の片隅で、リアは困

った風に笑った。

さつきから浮かない表情をしているのは、ずっと考え事をしていたせいらしい。

「結局、私はどうすれば良かったんでしょうか」

そう俺に問いかけたリアは、懺悔するように目を伏せた。

あの時リアは多くの人を守ることを選択し、サキは一人を守ることを選択した。

どちらも己が正しいと信じ、どちらも譲れない両者。双方が満足する手段が存在せず、必ずどちらかに身を置くしかない時、傍観を許されない勇者が取るべき正解は何なのか。

リアは「いくら考えても解からないんです」と呟いた。

「レオンさんが私の立場だったら、どうしましたか？」

もしも 그레이スが語り部じゃなかったら、なんて仮定の話で思い悩んでいたらしい。

魔王に勇者の教育が勤まるとも思えないけれど、リアが余りに思い詰めた表情をしているので、話に付き合っただけでやることにした。

例えばさ、と前置きする。

「もし、グレイスがじいさんを助ける事が出来なかったなら。宝玉をぶっ壊すしか道がないのだとしたら、サキはそうしただろう。お前はそれを黙って見ていられたか？」

「……ううん、なんとしても止めようとした、と思います」

「サキが悲しむとか、じいさんが助からないとか解かっていて、それでもお前はサキを止めようとした。この国の連中を守りたいと思ってそう決めた。そうだろう？」

「……そう、です」

「それはお前の中にある価値観がそうさせたんだろ？ 同じくらい大切だとしても、お前はほんのちよっただけ平和を守る側に傾いていたんだよ」

「……。」

「サキだって同じなんじゃないか？ 国の連中が困る事も、ひよつとしたらじいさんにまで怒られる可能性もあると解かっていて、それでもじいさんを救う為に宝玉を壊すという道を選んだのは、そっち側に傾いていただけなんだと思う。ここまではいいか？」

「はい。でも私には、どちらが正しいのか解からないんです」

どちらかが善、という考え方は魔物という解かりやすい敵としか戦っていない勇者だからなのかもしれない。

「お互い様なんだよ。サキも言っていたんだろ？ 深く考えるなつて。どっちが良いとか悪いとか、立場が変わればどんなものだって解釈は全然変わるだろ。だから、自分が正しいと思うほうに進むのが正解だと思う」

「自分が正しいと思うほう、ですか？」

「そう。だからお前の質問に対する俺の答えはリアの信じた道、つまりサキをぶん殴って止める、だろうな」

「わ、わたしそんな事しませんよっ」

まあ、とにかくだ。完全な答えがない問題にいくら突っかけても袋小路に迷い込むだけ。リアは勇者だからか自分よりも”正義”ってやつに拘る節がある。だから今回みたいな場合はどこまで考えても答えなんて出ないだろう。

「でもっ、それじゃ絶対にどちらかが悲しい思いをしますよね」

うん。俺が言った答はそういうことになる。そしてリアが求めた答えは、きつとどちらもがハッピーエンドを迎えられる選択肢なんだろう。欲張りなヤツだ。

「なら、お前がもつと凄いやツになるしかないよな。今回の場合、宝玉に頼らずじいさんを治せたなら、それで終わった話なんだ。そう考えると簡単だろ？」

どんな無理難題にも手を差し伸べられるようになるなんて、俺にはとても出来る気がしないけどさ。お前がなろうとしているのは人間が崇める神みたいなものだし。

「……………誰かを助けるって、難しいですね」

「そんな悩むなって。じいさんもお宝も無事だったんだからそれで良いじゃん」

「うー、だって……」

まだスッキリしないわからず屋にデコピンをプレゼントしてやった。

「終わりだ終わり。もう次へ行こうぜ」

何だそのいかにもビックリしましたって顔は。そんなに痛くなくなつたろ？

「あ。えと、」

「今度は何処へ行くんだ？　もうこの国に居たってすること無さそうだしな」

今度はもつと気楽に暇を潰せる展開を望みたいもんだ。

「そなの。もう一生分褒められてうんざり、なの」

「うおっ！？」

突如乱入してきた声に素でびびった。

ん、とピースした手をこちらに向けている真っ赤髪の頬までが少

し赤みを帯びているのは、恐らく主に無理やり飲まされたせいだろう。

「サキちゃん！ あれ？ 式典は？」

「もう皆べろんべろんのぐでんぐでん、なの。あれはただ騒ぎたかっただけな気がするの」

意識を向けると、主賓が居なくなっているというのに遠くに感じるドンチャン騒ぎテンションが収まる様子はない。完全に宴会モードに突入しているみたいだ。子供王と呑気じいさんの笑い声が一際大きく木霊しているのは空耳だと思っておこう。

「というわけで連れてって、なの」

主人の傍にいないくて良いのかという俺達の問いに「問題ないの」という一点張りしか返ってこない。

「ね、レオン。リアっち。お願いなの」

「サキちゃん……いいの？」

「前に言っただけなの。二人の事気に入ってたって」

その言葉にびっくりしたように眼を大きくしたリアだが、やがて大きく頷いた。

「うんっ！ サキちゃん。これからも宜しくね」

「こちらこそ、なの」

……ま、いつか。

* * *

その日の夜遅く。

既に戦場跡と化した式典会場の片隅で、二人だけが生き残っていた。

「あの子は大層私の事を慕っております。それはとても嬉しいことです。しかし、今回の一件を知って、サキに対する一つだけあった懸念が現実のものになったと思ったのでございます」

サキはラインハルトという人物を絶対的な第一位に据えている。その考え方が、サキを今回のような行動に走らせてしまったのだろう。運良く事無きを得たものの最悪の結果も十分有り得た、と再び元の座に就いた老人は若干落ち込んだ表情をしてみせた。

「サキはこの老いばばかりを大切にすぎで、自分を余りにも軽視している。王もそう思われたところはありませんか」

「ああ、それは僕も良く解かる気がするよ」

主に寄り添うサキの姿を思い出してグレイスが相槌を打つ。死屍累々と酔っ払い共が寝そべる光景の中、余っていた野菜スティック

を手で掴んでパキツと齧った。

「ふと思ってしまうのです。もしも私が居なくなったら、あの子は空っぽになってしまふのではないか、と」

シヤリシヤリと野菜を噛む音だけが響く。行儀の悪いそれに老人が一瞬眉を顰めたが、今日くらいはいいかと自らもひとつ手にすると、一気に半分を口にした。

「それで、リア殿達と同行を？」

「はい。彼らとは初対面とは思えない程にサキが打ち解けておりますからの。彼らに同行して世界を回ること、大事なものを見つけてくれればと」

「鬼の目にも涙、か」

「なんですかな？」

聞こえないような声だった筈なのに素晴らしい地獄耳だ。グレイスは肩を竦めて「何でもない」と惚けて笑った。

「娘を授かることが出来なかった私にとってサキは実の娘も同然ですからの、寂しいという気持ちは当然ありますが……ほっほ」

「わが国としても偉大な守護天使を一時的に失う事になるのか。まあ、じいが決めた事だ。仕方がないと思って諦めるよ」

「心配要りませぬ。語り部の力がこの国を守ってくれるのですから……何時の間に語り部として覚醒なさっていたのかは、この際不問

に致しましょう。まさか勤めが面倒くさいから黙っていた、などという理由では間違ってもないでしょうし」

「はっはっは。眼が笑っていないよ？」

「笑っておりませぬからの」

何処に隠していたのかどさりと突き出された今後のスケジュールには、語り部としての勤めもキツチリと記されていた。

「……………。秒刻みはやりすぎだと思っただけど」

幼い王はちよつとだけこのジジイを助けた事を後悔した。

「明日からまた忙しくなります。王もサキが居なくなること寂しがつてばかりはいられませんぞ？」

思わず噎せ返ったグレイスを、自称親代わりは面白そうに見ているのだった。

18・「終わりだ終わり。もう次へ行こうぜ」(後書き)

今回で一章完結です。

ここまで付き合っていただいて、本当にありがとうございます。
少しでも楽しんで貰えたなら嬉しいです。

評価、感想、ツッコミ、ご指摘など、一言でも頂けるなら是非お願いします！

今後の更新予定などは、活動報告ページに書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5998w/>

手を引く勇者と引きずられる魔王

2011年10月10日11時58分発行